
龍と書いてドラゴンと呼ぶ ～ 龍が空を泳ぐ時～

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍と書いてドラゴンと呼ぶ　　＼龍が空を泳ぐ時＼

【Nコード】

N9845G

【作者名】

雨月

【あらすじ】

主人公はとてもよく出来た家族に比べてあまり成績などがよろしくない少年であった。そして、夏休みも目前となったとある日に彼は一人の老人にであうのである。そして、その老人は彼を近所の空き家に連れて行き………そこから全ては始まるのであった。

プロローグ（前書き）

さてさて、今回からまたもや新しい作品を書くことができ嬉しいものです。まだプロローグなので話の内容などもわからないかたがたが大半だと思えますので、一生懸命更新を続けていけたらいいなと思っています。できましたら応援のほう、よろしくお願いいたします。

ブローグ

龍と書いてドラゴンと呼ぶ！　　〽龍が空を泳ぐ時〽

ブローグ

俺はよく、両親には似ていないといわれることが多い。

いや、確かに俺が通っているのは県立の高校なので、実質社長の父親に海外を飛び回る母親、それに加えて超一流お嬢様学校に進学しちまってほとんどあうことのない妹を二人も持っている時点で確かに似ていないだろう、顔とかは別にしても。

家族がこのように素晴らしいと自慢に聞こえる方々もいるかもしれないが、俺に言わせて見ればどうして俺はこんな家族のところに生まれちまつたんだとふと思うことがある。

成績優秀（逆の方向に）な俺はよく近所のおばさんから白い目で見られたものだ。いや、あんたが俺んちの何を知っているんだと俺は叫びたい。

こう見えても家の留守を任されている俺はきちんと自炊をしているし、洗濯物だって自分のものを干して入れてたたんでいるのだ。

「いいよなあ、黒河んちは」

そういう連中にはすべてフライングチョップを食らわせて地面にキッスをさせている。

自炊は実に面倒だということを自炊をしている方々にはよく、理解していただけるだろう。え？料理を作るのは面白い？なるほど、確かにそういったこともあるかもしれない。だが、毎日毎日献立を考えなければならず、誰かに意見を求めようにもうちには探せばねずみがいそうなものだがあいにく日本語をしゃべってくれる人はいない。

苦肉の策として友人に尋ねることがあるのだが……

「何でもいいよ」

「それが一番こまるんじゃないかああ！..」

無論、そんなやつにもオリジナルの技であるエリザベスヴァーストを食らわせる。これを食らったものは十分ほど動きを止めてその場で悶絶し続けるのである。

そんな俺の生活に異変が起こったのは忘れもしない高2の夏休み一歩手前。明日は恐怖の通知表が俺の手元に光臨するという日のことだった。

第一話：「その手に龍を」（前書き）

さて、プロローグはいかがだったでしょうか？まあ、自分で思い返してもすこしさわりだけなのですが……まあ、だからプロローグだろうにと思った方、すみません。評価、感想、メッセージ……その多もろもろ、お待ちしておりますのでお暇なときにぜひ、お願いしたいと思います。今年の目標：誰かに面白いといってもらえる小説を書いてみる。

第一話：「その手に龍を」

第一話：

「その手に龍を」

家に帰りつき、鍵を手にはガチャリと回す。ここで上からたらいが降ってきたら面白かっただろうが、毎日鍵を回しているが一度もそういったことはない。

「？」

いつもだったらいやな手ごたえがして扉を開ける準備が整うのが幸運なことに鍵を持っていない人たち、主にどろぼうさんとかにはお堅いはずの扉が今日はあっさりと鍵を回してくれた。

「？」

いや、もう面倒なんで先に進むが俺が帰ってきた時点ですでに扉が開いていたというわけなのである。

俺の両親が家に帰ってくるのは月初めのみ。今日は七月十九日。

ついでに言うなら双子の妹が帰還召されるのは春休み、GW、夏休み、冬休みといったところか？そのたびに俺を『駄目兄貴』と二人揃ってのしった拳句にあごで使いやがる。親の顔がみてえよ。

とにかく、そんな下克上姉妹や両親は用事とかがあったら基本的に俺のケータイにちゃんとメールなりなんなり送ってくる。そう、たとえ、名ばかりだけの家族だったとしてもだ。

いや、別に一人が寂しいわけじゃないぜ？高校生にもなってママ、パパ言っている場合じゃないのだ。妹たちのおもりをするのも中学まで。

優秀すぎる家族にとっていまや俺はどう考えてもお荷物的存在なのだろう。まるで他人の子であるかのように俺に接してくる母親に、妹にはめちゃくちや甘いくせて俺が武術の練習を怠るとそりゃもう、雷落とすわ、井戸に落とすわ、おじゃまぶよ落とすわ、いろいろと親父はしてくるのである。

さつきも言ったが双子の妹だって俺のことをどう考えても蔑むし！いい忘れたがこつちに帰ってきたときは俺の後には風呂に入りたくないとか抜かしやがる！誰が風呂を沸かしているんだって思ってるんだ！一番風呂は風呂を沸かしたやつが手に入れるに決まってるだろ？大体、宇宙までいけるようになった時代なのになんでうちは五右衛門風呂なんだ？誰かをかまゆでしようって魂胆か？それって俺か？

ボーっとそんなことを考えていると庭へと続く道から一人の爺（じい）い、おきな、好きなほうで読んでほしい）が出てきた。

「ほお、こりやまた大きく育ったの」

俺を見ているが、このじーさんを俺は持ちろん知らん。

「誰だ、あんた？」

「忘れたか？お前の祖父じゃ」

こりやまた怖いじーさんが出てきたと思ったね。だって、母さんの両親、父さんの両親はすでに死んでいる。俺が生まれる前だから俺も双子も写真でしか顔を見たことがないんだぜ？しかも、その写真が白黒であって映っている人たちはすべて若い人たちだった。指を指されてこれがお前の祖父母だよといわれたところでわかるわけがない。

「母方が父方かどつちかしらねえが、さつさと成仏しやがれ！じーさん！」

そういつて肩をたたいてみるが骨ばった感じの肩は当然物質であるということを実証させてくれている。

「何だ？最近の幽霊は触れることができるのか？」

「失礼なくそがきじゃな」

心外そうにじーさんは首を振る。

「孫にくそがきつていうじーさんがどこにいる？」

「ここにおるわい」

一言言わせてくれ、変なじーさんだ。

「ところで、俺に何か用か？俺はこの後、馬鹿な父親の特訓とやら

を自分でやらないといけないんだが？してなかったらどつかで見張っているのかは知らんがこの世の地獄が俺を待っているんだ」

改めて考えるが、この家に防犯カメラなどないはずなのに、なぜあのくそ親父は俺がサボっているのを知っているのだろう？七不思議のひとつに違いないね。俺はじーさんをむしして玄関をまたごうとしたのだが、じーさんは俺の手をつかみ、さらにじーさんは俺の前に踊りでて、にやけた表情でG3は言ったのだった。

「おお、そうじゃった。お前さんを連れて行かなくてはいかんのだや」

「どこに？天国？」

じーさんが死んでいるのなら天国か地獄のどっちかにおくられるんだろうなあ……地獄にいきそうな顔をしている気がするの俺だけか？

「お前、今とても失礼なことを考えなかったか？」

「いや、常識的なことを考えてた」

今、気がついたがこのじーさん、普通の爺じゃない。か細い腕をしている割に強く、それなりに訓練というか、そんなのをしている俺の力をもつてしてもびくとも動かない……。

「そうか、それならよいわ。わしについて来い」

そういつてさっさと歩き出す。気がつけばじーさんは俺の手を離していたのだった……跡が残っているところを見ると非常に力が強かったことを改めて思い知らせてくれた。

「おいおい、せめて着替えさせてくれよ」

「……これから死地へと赴くのじゃ。礼装として制服でよかるうに？」

「……はあ？」

言っている意味がよくわからなかったがとりあえずかばんだけを玄関の中に放り込んで鍵をかける。この家にあるもので価値があるものといえば、玄関先におかれている招き猫ぐらいだろう。

「ふむ、それならいくぞついて参れ」

「……いやなじーさんだな」

命令口調だし、なんだか怖い……怖いというのは次に来る動作がよくわからないということだ。

人はえてして理解できないものとかを怖がる性質を持っているに違いないだろう。お化けが怖いとか言う人の中には絶対、それがどういったもので自分に危害を加えてくるものなのかわからないからこわいという人がいるのだから。

「ここじゃよ」

じーさんに連れてこられたのはすでに取り壊しが決まっている家屋だった。友人から聞いた話なのだがこの家屋はものすごく古いもので町長がこれをこの町のシンボルにしようとか言っていたがあるとき、どうやらその町長が実際にこの家に入ってからを境にそういったことを一切言わなくなったそう。そして、怖がるように家屋を壊す計画を推し進めたのである。

毎晩、奇妙な叫び声を聞いたといっている人が数人いるが過去にそれを確かめるために一度友人と忍び込んでみたのだが特に何もなかった。

「で、ここに来てどうしようってんだ？肝試しか？」

「そうじゃな、肝試しじゃよ……実は、ここには地下があるのじゃ」

なぜか、頭の上に千佳（俺の双子の妹の片割れ）の生意気そうな面構えが現れる。

「地下あ？以前ここに来たときはそんなのなかったぞ」

「ついて参れ」

俺の質問には答えずにそういつて歩き始める。ちょっと力チンと来たがじーさんの顔がにやけているところを見ると少し面白いことが起こりそうだったので黙ってついていく。

肝試しで何も起こらない……それが一番いいことなのだが、人は何かが起こってほしいから肝試しをするのではないのか？

正面突破はすでにロープなどが張られていて立ち入り禁止のいうことなのでできない。よって、近くのブロック塀を飛び越える。きがつきやじーさんはすでに庭に侵入して歩き出していた。かるがると上ったところをみるとこのじーさん、相当の手練のようだ。今度は割られている窓ガラスや、裏口など目もくれずに玄関から素直に入って……なんと、下駄箱の近くの床を足で壊し始めた。「お、おい何してるんだよ！取り壊すって言ってたがこういうのはいけないんじゃないのか？」

「ここに階段がある」

指差す先には闇が広がっているだけだ……しかも、それを闇と言に捉えてはいけないような気がしてならない。

それは、近づくだけで寒さを感じさせ、周囲のものに心を不安にさせる何かを発しているような気がする。そうだな、たとえるなら

……

「ぼつとん便所みたいだな。あれに匹敵する存在感だ」

「雰囲気全台無しにするな」

「すまん……で、階段なんて見えないが？」

「よく、近づいて見るがよい」

じーさんに言われて俺はもつと穴に近づく。ぼつとん便所のおいはしなかったのだが、徐々に背筋をはってくるような寒気が外でそれまでないていたせみの声を消していく。

「それ！」

「うわっ……！」

気がつけば俺はじーさんにけられ、俺の身体はその闇へと吸い込まれていく……

「気をつけてな！喰われるなよ！」

まわりつくような闇に、いやな浮遊感と落下しているという事実が混ざって俺の脳を混乱させる。闇が俺の身体を値踏みするかのようにまわりつき、離れていく……。

思ったよりも短い時間で地面についたようだが、はるか上には光が俺を照らしてくれていた。

「あいたた……ん？」

そして、俺の目の前、五メートルほど先には二つの紅き光があった。

それが何なのか……

「キシヤアア！」

「ぎゃああつ！？！」

俺が学んだ教訓はひとつだ。

知らない人にはついていけないようにしよう。」

第二話：「龍が解き放たれるとき」（前書き）

さて、遂に龍と輝の第一種遭遇が確認されました。まあ、龍が出なかつたらこのタイトルに偽りあるだろってつつこまれそうなんですけどね。もっとこうしたらよくなるのではないかと教えてくれる優しい方の厳しいお言葉も募集しております。

第二話：「龍が解き放たれるとき」

第二話：

「龍が解き放たれるとき」

目の前には絵本や漫画、小説とかドラマとかテレビ、ゲームにお隣の奥さんが怒った時の状態などでよく見かけるその、一言で言うなら龍がいた。龍…… だったらロンとよめそうだがドラゴンってよめねえよなあ。

「夢夢、これは夢だ」

最近こういった夢を見ることが多々あったのだがあくまでこれは夢。俺は思いつきり！ そうだな、嫌いなやつ顔を思いつきりけるようなときの感覚で頬をつねってみた。

「いや、普通に痛いわこれ」

「ぐるわあああつ！！」

「ぎゃああああつ！？」

場を和ませようと思い切り努力したのだが、どうやらおきに召さなかったようで『ぐるわああああつ！』なる、ものすごい叫び声をあげながら相手が俺を亡き者にしようとしながら襲い掛かってくる。
「ひやつ！！」

情けない声を出したのは勘弁してほしい。闘技場に行つて戦車が出てきたら誰だつてそんな声を出すものさ。素手で戦車を倒せる人、募集します！

なんとか相手の記念すべき第一撃をよけたので俺は足元に転がっていた石をつかんで投げつける。もちろん、暗闇なのでどこを狙っているのかというと紅い目だ。

カツンっ！！

それだけ音がして、その場に落ちたようだ。相手は一瞬だけ動き

を止めたがあくまでそれは何が起こったかの確認だけ……つまり、ダメージはゼロ。気をそらしたただだった。

怪しいものを信じる性質ではないのだが、目の前に龍がいることを認めないと俺が殺されてしまうだろう……そういうわけで、俺の知識の中での龍として、彼らは火を噴く。だが、この龍が火を噴くかどうかはわからない。

「つーか、剣とか何かあつていいんじゃない？ 徒手空拳で龍とたれ張るのはぜったいおかしいだろ！ ドラゴンバスターとかそういった剣はないのか！？」

叫んでみるがいるのは龍だけ。あのじーさん、龍を倒してほしかったのなら俺じゃなくて、勇者を呼べ。もしくは自衛隊。

「ああっ、もうっ！！」

親父に渡された鉢巻を頭に巻く。ちなみに、みんなが期待しているような特別な能力がこの鉢巻に備わっているわけではなく、大体この鉢巻、百均製だ。

一応、親父が『道づれ根性』とフェルトペンでそんな文字を書いていたりする。死ぬこと前提の気がしなくてもないが、今はそんなことを言っている場合ではない。

「ぐるわあっ！！」

「こんなるっ！……！」

再び襲い掛かってきた龍の一撃を軽くよけ、その光っている紅い目にそこらのグーよりは確実に硬いだろうちよきをぶつけてみるのだが……

「ぐわっ！！」

どうやら龍の目は俺のちよきよりかたかったようで右手の指は折れたような気がする……事実、変な方向に曲がっていて俺の意思ではどうしようもない。

しかし、すくなくからダメージは通ったようで相手は苦しそうにもだえていた。目が慣れてきたおかげで相手がどのくらいの大きさかわかってきた気がする。

体長は約20メートル、この部屋みたいな場所の大きさはざっと体育館の大きさ程度だ。そして、階段のようなものが龍の向こう側に見える。

あそこまで逃げられれば……

「ぐるわっ!!」

「しまっ……!!」

考え事をしていたのがいけなかったようで、相手の一撃をまともに食らう……ずっと、意識が遠くなった。

「おやおや、これまたお若いものがきたのう」

「俺は………死んだのか？」

「ああ、死んだな」

「あんたは？」

「わしか？わしは神じゃ………えらいぞお、わしは。わしが屁をするだけで世界が滅ぶ」

「………」

「さて、客観的にみておぬしは残念ながら龍に殺された。これが意味することはもう一度、現世に戻すことがさだめ………」

「なぜ？死んだらそのままだろ？」

「龍は死人の魂を伝ってこちらにやってくる………人の姿を持たぬやつらは凶暴なのじゃよ。すべてがすべて、力に支配されて一度キレた龍は力を使い果たして眠りにつくまで辺りいつたいを混沌へと変

える。今、このままおぬしの死体を放置し、魂を地獄へ連れて行けばおぬしがその龍を連れてきてしまう可能性が高いからおぬしにはいやでもあの龍をどうにかしてもらわないといけない。龍をつれてきたものは地獄いきじゃ」

「おれがねえ……でも、実際はあのじーさんが悪いぞ」

「白河の爺か……まったく、こまったものじゃな。いいか、おぬしはぶっちゃけいって黒河家のものではない」

「え？」

「知りたければおぬしは生き続けなければいけない……ここで足踏みをしているばあいではないのじゃよ」

「けどよ、一発で死んじやったぞ、俺。右手犠牲にしても一矢報いた程度だろ？」

「言霊をぶつけるのじゃ」

「はあっ？そんなわけわからんもの使えるかよ」

「できる。白河の先祖はそれで龍とともに歩んできたのじゃよ」

「……」

「わかったな、輝よ……」

「……わかった、やるだけやるさ」

「復活！」

目の前まで迫っていた龍を踏んで背中側に跳躍。折れた右手も復活していてわき腹に開いたと思った穴もきちんとふさがっていた。

「わりいが、もうちよつとオツムある龍になつてもらうぜ？」

自称神様だと名乗っていたジーさんに言われたことはひとつで、言霊を使えと……よくは意味がわからんが、とりあえず相手をばこぼこにして宣言すればいいのだろうと俺は考えていた。えつとだな、言うことを聞かない子供に対してたたいて言うことを聞かせるという……しつけというやつだな、うん。

「ぐるわあつー！」

再び怒って突っ込んでくる相手をよけずに拾った木の棒を相手の眉間にぶつける。

「ぐあああつー！」

「これで頭冷やせたる！いいか、人になれよ！」

すると、どうだろうか？のた打ち回る竜は黒と紅い光というなんともまがましいような光を放ちながら動かなくなった。

「あ？ありゃ？死んじまつたか？」

近づいてみると、相手の身体が消えていつて最後に一人の少女が横たわる。

「こいつは……」

「死なずに生き残ったか」

そんな声が聞こえてあわてて近くを見渡すと、階段のほうから下りてきた人影が部屋のスイッチを押す。

なんと、目の前の少女は裸だった。

ぱつと、そこで再びスイッチが押されて辺りが真っ暗闇に包まれる。

「……」

「今のは事故じゃ、事故」

うれしい事故だ……いや、なんでもないぞ。

「……それで、これはいつたいたいということなんだ？ここに俺を落として、あんた何を考えてる？」

「さあ、それは自分で考えればよかるう？」

「はあ？一体全体このじーさんは何を言っているんだ？考えたってわからんからたずねているのになあ。」

「じーさんは満足したのか再び階段を上がりはじめたようだ。俺はあわててそのじーさんにもうひとつ、また違うことを尋ねる。」

「お、おい！この子はどうすりゃいいんだよ！」

「お前の家に住まわせればよかるう？どうせ、あの家に住んでいるのはおぬしだけじゃ」

「ちよつと待てよ！そろそろ妹が二人、帰って来るんだよ！」

「知るか、それまで家においてやってもよかるうに……」

「ひいつ！？」

気がつけば後ろからそんな声が聞こえていたのだから驚いたのも仕方がないさ。

「お前さんはこの子を見捨てるのか？」

「え？いや、そりゃあ……じーさんが世話を見ればいいだろ？」

「わしが？わしはこのこに対して何もしておらんぞ。おぬしがちよつかいを出したのだろう？」

「……いや、あっちから襲ってきたんだが？」

「とにかく、お前も男じゃろう？女の子をたすけることもできるのか？お前のまたにはち凸がないのか？え？」

挑発的なじーさんのその表情は思い切り殴ってやりたいほどむかつくものだった。

「……むつ、そんなくらいできらあ！」

言ってしまったと思った。

「そつかそつか、それならよろしく頼んだぞ」

暗闇に残されたのは俺と謎の少女だけ……

いや、何もする気はないさ。

俺は自分の着ていた学ランをその子に着せて背負う。学ランの下は素っ裸だが、今日はただ暑いだけで風が吹いていないのだから問題はないだろう……

俺はその後、誰にも見られずに服を一枚羽織った少女を家の中に運び込むことに成功したのだった……なんだか、文面だけ見ると犯罪のおいがぶんぶんすると感じてしまうのは俺だけだろうか？

第二話：「龍が解き放たれるとき」（後書き）

今回の話、どうだったでしょうか？以前の龍と書いてドラゴンと呼ぶシリーズを読んでいる方がいたら教えて欲しいと思います。表彰したいんです。まあ、面白かったと伝えてくれるだけでもいいんですけどね。それと、これを知っている方はもういないのではないかと思います。『アンノウンエンジェル』を知っている方、ぜひともご連絡下さい。おもしろかった！とかそういった感想をいただきましたら、この小説と同時進行で新しく始めたいと思いますので！評価、感想、メッセージ……その他もろもろ受け付けていますので、お暇なとき、よろしくお願いしたいと思います。今回は読んでいただき、ありがとうございます。雨月の作品の半分は読者が読んでくれているということで成り立っています。

第三話：「日和」（前書き）

ええと、評価、それとご指摘いただきました愚者様、誠にありがとうございます。場違いではございますが、一応、ここでもお礼の言葉を述べさせていただきたいと思えます。ええと、始まる前ではなんですので、今回はあとがきに、色々話をさせていただきたいと思えます。

第三話：「日和」

第三話：

「日和」

家に連れ込み、学ランを着せたままでベッドに寝かせる。下は急いでタオルをかぶせたが、これからどうしたものだろうか？

「ん……」

寝返りをうつたところで足がかなり危険な角度まで動き、見えるか、見えないかというぎりぎりの……たとえるならジェットコースターでもうおちる！というぐらい……ところまで動かし、俺の心臓がばくばくと鳴り響き始めた。

「おわっ……！」

そして、徐々にまぶたが上がっていくのをスローモーションみたいにみていて、なぜだか瞳に光が宿って起きるという瞬間に俺は机の下に避難してしまった。理由はわからない。もしかしたら彼女は前世がライオンで俺はシマウマか何かで本能的なものだったかもしれない。いや、いいわけだな。

「……ここは……」

「お、俺んちだよ」

「あなたは……？」

不思議そうな顔をするが、その目には先ほどまで俺を殺そうとしていたものの瞳などしていない。大体、その瞳は紅く染まっただけで真っ暗だった。

「俺？俺は黒河輝……あんたは？」

「私は……名前……もってない」

そういつて目を伏せる。

どうやら聞いてはいけないような話題を振ったようだ。徐々に部屋の中がなんだか光が消えていくような感覚を覚え、外ではめっちゃくちゃせみが泣き叫んでいるというのに背筋を震わす寒気が部屋を覆

い始めていた。はつとしたそのとき、この部屋だけい空間になっていることに気がついた。もはや、音など聞こえてはいない。

「えっと、だな、名前がないならつけてやるよ」

「え？」

明暗が明よりに傾き、再びうつとおしいほどの湿気と熱が俺の部屋にやってくる。そして、俺の緊張も徐々に緩和されていった。せみの鳴き声がこれほど心地よく聞こえたのは生まれて初めてだと実感できた。

「名前、ないと困るもんな……えっと……えっとだな」

期待がふくらむその表情になぜだかプレッシャーを感じ、適当な名前では駄目だと考える。そこでふと、あの暗闇が俺の脳裏にさつとよぎって薄れていった。

「漆……漆でどうだ？」

膝とよんでしまった諸君、ちゃんと読もうね？

「漆？」

「そう、漆」

理由を聞かれたときのために俺はきちんとこの意味を知っている。確かに漆と聞いたら木の種類のほうを思い浮かべるかもしれないが黒を表す言葉でもあるはずだ。ごめん、実はうる覚えだ。

「漆……それ、私の名前？」

「ああ、そうだ」

「ありがとう」

はにかむ顔がかわいいなあと思う。少し暗そうな感じを受けるのだが、まあ、それはそれでポイントをあげているのでほうっておくでしょう。

「とりあえず、今服用意してやるから」

「……うん」

前は第二ボタンだけが留められているので二つの山が寄り添っていてなんつか、一言で言うならエロい。そして、その、なんだ？下のほうは両手で押さえるように隠していてこっちは一言では言い

表せないし、俺の鼻から紅い液体が出てきそうな気がしてならない。とりあえず、応急処置として俺の小さくなつたＴシャツやらなんやら取り出して俺より少しだけ背丈が小さい漆に渡していく。

「？」

それを着せてみて思ったことを言ってみる。

「なんだかきつそうだな……その、特に胸が」

「……うん」

めちやくちや刺激がおおいな、Ｔシャツつてさ……やっぱり、あの程度の大きさを持ったＴシャツでお茶を濁して妹の部屋に侵入してフリーサイズのスカートを入手。

「下着も持つて行つとくか」

適当に選んでとつてくる。まあ、あの胸が収まるブラジャーなぞ俺の妹たちの部屋におかれていたわけなどないな。ああ、それなら親のブラジャーもつてこいつて思った人。ちなみに父さんと母さんの部屋は存在していないとさきに言つておこつ。部屋は確かにあるのだが、何も入っていない空き部屋だ。

「ほれ、下着とスカート」

扉を少しだけ開けて中に投げ入れて俺は扉を占めて廊下で待機。さすがに中で着替えをじろじろと見るわけにもいかないだろう。

「ありがとう……ところで、これ、どうしたの？」

「とつてきた」

そこで漆の顔が驚愕に染まる……のが手に取るようにわかつた。もちろん、覗いて顔色をうかがつたわけではない。

「お、お隣の洗濯物から？」

お隣の若い奥さんの下着を取つたら最後……この前、下着泥棒が奥さんに家に引きずり込まれてから行方不明になつたのを俺は知っている。

「いや、普通に妹の部屋から」

「それも……問題があると思う」

「ん？でもブラジャーはとつてきてないぞ。どう見てもサイズが小

さいだろうしな。パンツぐらいだ」

「……」

着替えが済んだところで俺は中に入り、聞きたいことをたずねることにした。

「漆、じーさんの知り合いいるか？」

「えっと……どんな？」

首を大きめにかしげる。それだけで胸が揺れるって………すげえ、とだけ言っておこう。

「えっとだな……怪しそうなじーさんだ」

なるべく胸を見ないようにして応える。

「……その、私はずっとあの場所にいたから……人間に会うことはほとんどないよ」

それだけいって再びくらくい雰囲気を滲み出し始める。それに寒気を覚えた俺は話題を変えることにした。

「わ、わかった、それはいいとして漆にちょっと話したいことがあるんだ」

「何？」

どうやら切り替えは早いらしいほうですぐさま寒気は身を潜める

……よかった。

「この家でとりあえず生活してくれ」

「え？」

一瞬驚いたように頭を後ろに動かしたので胸が揺れる………すまん、さつきからむねにばっかりきをとられすぎだな、俺。戦国時代とかで武将やってたらくのいちに殺されていたに違いない。

「いきなりで悪いんだが……そのじーさんと約束っていうか、不条理な条約を結ばれたんだわ……それとだな、あの家実は取り壊しが決まってるあそこで暮らすことなんてもうできないんだ……だから、ええっと、それで、家事分担とかお願いしたいんだが………つて、そもそも家事とかわからねえよな？」

ずっとあんなくらしい場所に住んでいた……しかも、人間じゃない

のなら……くわしくわからないだろう。

しかし、俺の予想に反して漆はうなずいて見せた。

「家事？それならまかせて、私は何をすればいいの？お掃除？お洗濯？お料理？」

残念ながら添い寝？とは聞いてくれなかった……いや、忘れてくれ、彼女がいらないやつ of 妄言さ。

「え？あ、そ、それなら料理は俺がするから掃除をよろしく頼みたい。掃除をするところは俺の部屋とリビングだけでいいから」

自慢じゃないが、この家はほかの家より大きな家だ。しかし、使用している部屋は俺の部屋とリビング、風呂場……といったところで豚に真珠とっていいだろう。

「まかせて」

「掃除機の使い方はわかるか？」

「大丈夫！輝は休んでてね」

そういつて駆けていった漆の後姿を見送ってなんとなく、ああ、こういうのっていいなあと考えていた。

「にやけておるぞ」

「……ほつといてくれ」

気がつけば窓のところにあのじーさんが立っていた。おいおい、ここは二階だぞ？どうやって上がってきたんだろう？とはもうすでに思わない。きつと、ひとつとびなのだろう。

「で、今度もまたどこかに連れて行ってくれるとでも？」

「いいや、少し世間話をしにきただけじゃ」

よつこらせと床に腰を下ろしてベッドの下に手をつっこむ。

「その一連の動作が何で手馴れているんだ？」

「そりゃ、あれじゃよ。家とかでよくベッドの下に手をつっこむほうじゃから。ツバメが雨が降る前に低空飛行を繰り返すのとなんらかわりのないことじゃ」

嘘つけ。

「まあ、わしのばあい嵐がおこってしまうがのう」

「じゃあ今すぐに手をそつから取り出せ」

ベッドの下にエロ本があるとでも思っているのだろうか、このじーさんは？ふつ、甘いな、俺はそんな安易なところにそのようなA級危険物を隠していたりはしないのだ！もしも、もしも誰かが家に帰ってきて好奇心という恐ろしい気持ちでそれを探してもみる。いい屈辱以外何もないぞ。

もし、家に帰ってきて、部屋をあけたら強盗が金品探す前にエロ本を見つけて、そのエロ本を読んでいた……あなただったらそのシチュエーションでどう行動する？

「ちつ、最近の小僧どもはデータ化してパソコンとかに忍び込ませておるのか……やりおるな。自宅には誰もいないくせしてパスワードをかけているとは臆病じゃ……じゃが、その考え、正しいのう」

「つておい！勝手にパソコンをいじるな！」

パスワードを適当に入れ込んでいるじーさんの魔手からマウスとキーボードをひったくる。すばやく移動したじーさんは机の上に立っていた。

「しつとるか？走行中に車の窓を開けて風をもむと速さにもよるが、おっぱいを触ったときの感覚ににているそうじゃぞ」

「どうでもいいだろ、そんなこと」

そんな話をしていると階段を上がってくると音がする。

「あれ？輝、その人は？」

「じーさんだ」

「え？輝の？」

「そうじゃ」

「おいおい、そもそも俺の祖父だって話、それって本当か？」

「違うの？それじゃあ、不審者？」

確かに、それは納得できるだろう。

「確かに、不審者じゃがマジで輝の祖父じゃ」

堂々とそういうが、俺としてはこんな不審者な祖父が欲しいわけ

ではない。

「ところで、おぬし、名前は？」

「私？私は漆。輝につけてもらったとても大切な名前。ね？」

「え？ああ……」

ね？といわれてこちらを見られるとものすごく、恥ずかしい気持ちになってしまっていた。これで、どれだけ彼女が自分の名前を大切に思っているかまるで心がつながっているかのようにわかってしまう。

「ほほう、よもや三十分程度でここまで仲良くなれるとは……やはり素質かのう？」

じーさんはじーさんでなにやらぶつぶつ言った後に再び床に腰を下ろしたのだった。

「そうじゃ、そろそろ話してもいい時期かもしれんな」

「はあ？」

「？」

俺と漆は首をかしげてそんなじーさんを見ていたが、二人して顔を合わせてじーさんの目の前に正座して座る。

「これからいうことはだれにも言ってはならんぞ？」

よいか？というその顔を物凄くゆがめて笑いながらじーさんはそんなことをいったのだ。

第三話：「日和」（後書き）

今回もお読みくださり、ありがとうございました。輝のもとに漆がやってきて、さて、これからどうなるか………そういえば、龍シリーズもはやこれで何作目だろうかと思いましたがシリーズを通して基本概念が全て同じになっているのではないかとご指摘いただきました。まあ、今回の作品は言い訳となってしまうですがこれまでとは若干違ったものとなる予定ですので………そうですね、例えばそれが読者の方がそれはないだろう？といわれるものだとしてもですが………そういった方向へと転がして行こうかなと考える所存でございます。エンジェルシリーズも新しいの書こうかなと考えている途中ですがいかなものでしょうか？何かしらの応援のメッセージなど、お待ちしておりますのでよろしく願います。

第四話：「輝に起きたこと」（前書き）

さて、ちりも積もれば山となる………というわけで、こつこつと積み重ねていきます。

第四話：「輝に起きたこと」

第四話：

「輝におきたこと」

じーさんがエロそうな顔をして漆を見ているのを知って、漆の前に身体を移動させる。

「ちっ、独り占めする気じゃな？」

舌打ちしながらマジで怖い顔をしながら俺を見てくるが、ここで負けてはいけないのである。

「独り占めするも何も……………」

「元から俺様のにゃんこちゃんってか？」

「違う！」

「え？」

漆、そこで違うのかって顔をしないでくれ。俺が困るからさ。

これ以上続けていたらこの部屋が暗黒物質で一杯になるかもしれないのでさっさと話を進めてもらうことにする。

「それより何か話すことがあるなら話してくれよ」

「おお、そうじゃったな」

いかんいかん、忘れておったわ。そういつてじーさんはふところから数枚の写真を取り出して俺らに見せた。

「これは……………」

「輝に似てるね」

赤ん坊などどれも一緒だろうにと俺は写真に写っているサルみたいな幼きころの自分？を見ていた。

「そうじゃ、これは輝が生まれてまもない写真じゃ」

そういつて次に違うものを取り出す。

「これは？」

見たところそれは一本の短めの木刀だった。

「これが白河家に代々伝わっておった守り刀じゃ」

「木刀なの？」

「まあ、守り刀じゃから気にはするなよ。お守り的な意味合いが強いもの……しかし、輝が生まれた時点でのう、頭の固い白河家保守派の者達は輝が白河家にとって災いを生み出すものだと言いつた」

「……………」

黙って聞くことにした。

「そして、養子に出されて黒河家の長男となったのじゃよ」

神様だといっていたじーさんがそんなことを言っていたが、本当だったのかよ……。

「ありや？あまりショックを受けてないみたいじゃのう？」

「いや、まあ、なんだ？うすうすは気がついていたよ。だって、この家の連中と俺の顔とか性格、ぜんぜん違うんだもんなあ……………」

まあ、なんだか少しだけ寂しい気がする。親父が俺にここまで冷たくしてきた理由はこれだったのかもしれないな。こんな、冷たい親父がお前の本当の親父ではないって思わせることでショックを薄くする……そんなところかもしれない。

身体が小刻みに震えていることにきがついたが、後ろから漆が抱きしめてくれていることのほうが心を占める割合は多く、暖かい気持ちになることができた。

「そして、お前は今、これから先に進む道が二つある」

「二つ？」

俺ではなく、漆が応えてくれる。

「そうじゃ、白河家に……お前を生んだ親の元に行くか、それでもなお、ここに残るか。お前さんが白河家に行った場合、漆は連れて行けない。じゃが、おぬしは白河家のすべてを握る権限を得ることができる……しかし、それをもつてしても漆と会うことなどできないぞ」

「漆と会えない？なぜ？」

もう俺は大丈夫だった、漆に甘えて背中を預けている。

「理由はいえない……じゃが、こっちに残れば漆はここにいる」

「ははっ、なんだ、じーさん？それってもう決まってる道じゃねえかよ」

俺が白河家にいつてもメリツトなど何もない。こう見えても俺はまるで寂しいと死んでしまふ小動物のような人間だ。そう、か弱いのだ。

「こっちにいるさ。ここの家にとっちゃお荷物だろうが、それでもかまわない……それに、ここに漆を残していつてしまったら俺は二度と漆の顔を見ることなんてできやしないから」

「……輝……」

ぽふっという音が聞こえてきて彼女が俺の背中に顔をうずめたのがわかった。

「そうか、それならそれでいいんじゃないよ。ふふっ、今頃連中は歯噛みしておるうなあ……」

なぜだか笑う、じーさん。俺は首をかしげてじーさんに尋ねる。

「じーさんは白河だろ？」

「ああ、そうじゃよ」

「何でまた、白河に俺を戻そうとしたりしたんだ？」

「ああ、それは白河家に残したら災いになるとおもっているのが大半じゃったとみなは勘違いをしておったのじゃが、実際は他家へ養子に出すと災いになるということなのじゃよ。まあ、今知ったわけじゃあない。連中、それを知った時点でここの親父に返してほしいといったのじゃが……ここの親父、頑として首を縦に振らなかった」

「はあ？」

「こいつは俺の息子だ、お前らとはもう関係のない俺の家族だと言いつ放った」

「……」

涙なんて流さないさ、その代わりに目からうるこを流しておいてやろう。

「今頃、あいつは漆を家族に加えるために書類をでっちあげておる

だろうな」

実に面白そうにじーさんは笑っていた。

「え？」

「まあ、安心することじゃ。あの親父の目が黒いうちはそうそうおきるまいよ」

そういつたあと、ものすごく鋭い瞳が俺と漆を捉えたのだった。

「じゃが、気をつけておくことじゃ。おぬしの親父はお前に立派に育ってもらいたいとおもっておるからのう、わざと、おぬしが傷つくようなことをするじゃろうて」

「……ああ、ありうるな」

「じゃ、わしはこれで帰るが……輝、お前にはまだまだ、おもしろいことがあるじゃろうて。今年の夏休みはおぬしにとって一番の思い出になること、間違いなしじゃ」

そういつて窓から出て行く。急いで漆とともに窓から外を眺めるがそこにはすでに誰もいなかった。

ボーっと外を眺めていたら漆が俺をじっと見ていた。

「……大丈夫、私がかんばるから」

「え？ いや、かんばるのは掃除だけでいいから。これ、漆に関係ないと思うぞ」

「か、関係ない……」

どよどよと暗くなっていく雰囲気をどうやって緩和させようかと考える。

「ああ、その、なんだ？ 腹減ったろ？ とりあえず飯を食べようぜ？ 作ってやるから！」

「ほんと！？」

そういつてるんるん気分で漆は階段を駆け下りていった。

「……思い出に残る夏休み……ねえ」

すでに龍と、漆に出会えただけで十分だと思っていた俺だったが

……

その考えが甘かったということを次の日の放課後、知ることになる。

第四話：「輝に起きたこと」（後書き）

今回の話、いかがだったでしょうか？まあ、毎度のことながら謎のじーさんが登場していたりしますが、そこは気にしないでいただきたいと思います。さて、話は変わりますが実は長期連載とか苦手なんですよ。後のほうになつてくるとマンネリ化が進行してしまつてにっちもさっちも行かなくなつてしましますから。そういうこと、ありませんか？ですが、他の作家さん達はちゃんと区別できている人たちもいますし、やはり、これは実力の違いなんでしょうね。

第五話：「潜蟄」（前書き）

さて、今回も更新の時間がやってきましたが………今後の展開が気になる方が多くいると嬉しいですね。いい意味で読者を裏切れるような小説を書いていけたらと望んでいます。

第五話：「潜塾」

第五話：

「潜塾」

「……今日から、夏休みですが……」

今日から待ちに待った夏休みである。部活動を行っているものは部活に精を出し、彼女がいる連中は……いや、なんでもないなんでも。

とにかくにも、夏休みである。

今日ばかりは学校に生えてある木という木に密集して妻を娶ろうとご近所めーわく考えずに鳴きまくっているせみのことも多めに見てやらないでもない。

「……漆、大丈夫かなあ……」

俺が家を出る前、まだ漆は眠っており、短パンをはいていたのだがすらつとはえた足がものすごく……その、なんだ？健康的でよかった。

昨日の夜の時点で暑かったらクーラーをつけておくようにいっておいたし、俺のケータイが鳴り響くこともなかった。

つまり、ケータイが鳴り響いていなかったということはあの双子が帰ってくるのはまだ先のことであり、いろいろと面倒なことを押し付けられないのである。

人は束縛の中に自由を見つけるものなのだ。

まあ、束縛の中に快感を見出すやつもいるのだが……

「黒河、おれ、もう溶けそうだ……」

「俺に言うな、校長に言え」

「さつきから何分待たせてるっておもっているんだよ、あの校長は？みる、PC部顧問が倒れたぜ？」

指差す先には言われたとおり、席に座っていたはずのPC部顧問が白目をむいて倒れていた。どうやら熱中症のようであわてて職員

たちが駆け寄ってかついで保健室へと運んでいく。ちなみに、保健室は快適に保たれているために今頃涼しいクーラーが作動しているに違いない……。ころなしか、運んでいつている先生の中にはほっとしたような顔をしているものも多い気がする。

「…………… 高校生の身分で夜遊びなど言語道断……………」

「まだまだ、続きそうだな……………」

「TO BE CONTINUE…………… おれとしては続きは始業式でやってもらいたいな」

まったく、俺はさつさと家に帰りたんだよと心の中で叫んでみたものの、俺たちが解放されたのは後二人ほど人が倒れてからのことだった。

帰り道、俺は友人である佐原太郎と一緒にだった。

佐原太郎は自称、帰宅部部長である。俺たちの学校の中で一位、二位を争うほどの部員数なのだが当然のように部費など支給されてはいない。

部費がないのはおかしいではないか！と立ち上がった帰宅部たちはなんと、理由は不明だが市長を相手にして帰り道が暗い場所に外灯を設置させたり、比較的事故の多い場所に信号と横断歩道をつけさせたのである。

いやはや、立派な部長様ではあるな。

「黒河、そついやこつから先って高級住宅街だろ？」

「ああ、そうだったな。ふらふら歩いてたら珍しくこつちに来たんだな」

「いやなところだよなあ……………」

そついつて本当にいやそうな表情をしながら歩いているが、俺は不思議に思う。

「どうした？ 普段だったならそんなこと言わないだろ？」

「いや、だってさ、あれだよ、あれ」

指差す方向にはイヌと戯れるおばさん…………… いや、貴婦人？ がたつていた。

「あれがどうかしたか？」

「あのイヌ、三桁万ぐらいの価値があるらしいぜ？」

「すげえな、おい。イヌって保健所行けばいくらでももらえるんだろ？ただで」

「ああ、そりやそうだがきちんと世話しねえといけねえんだぞ？あいつらが飼っているのは血統書つきのぼんぼんのイヌどもさ」

そういつてため息を再びつく。イヌを見ていると、ものすごく賢いのかさまざまな芸をやつてのけている最中だった。

「あゝあ、俺んちのイヌもあれだけ賢かったらばかにされねえのによお」

「そうか？お前んちのイヌ、あれで結構かわいいぞ」

佐原の家のイヌは佐原が家に帰つてくると急いで飛び出して尻尾をめちやくちや振りまくる。佐原が芸を教えようとしても、イヌは尻尾をこわれるんじゃないかというぐらいふりまくり、佐原を見上げているだけなのだ。

「けどよお、あのお嬢様に馬鹿にされたのはくやしいんだよ」

そして、クラスメートの一人の女子が佐原のイヌを馬鹿にしたのである。まあ、俺としてはどうでもいいことだ。

「？」

再びイヌのほうへ視線を向けようとすると、ふと、別の家の二階の窓に視線がいく。

そこには白い服を着た少女が無表情でこちらを見ていた。

「佐原、あれ……」

「なんだ？」

指差した時点ですでにその少女は消えていた。

「何もいねえよ」

「いや、けどさ……」

そこで不思議に首をかしげる。別に少女がこちらを見ているい

いのではないだろうか？そりゃ、イヌを見ていた俺たちがいたくらいだから、そんな俺たちを見ている別の人がいても別に不思議には思わないだろう。

しかし、そんなのお構いなしに俺はその少女をみて不思議に思ったのだ。なぜだ？

「しろい少女がいたのか？」

「え？ああ」

知っているのだろうかと思って佐原を見るとどろどろとか口で言いながら話し始めた。

「ああ、それって有名な話だぞ……以前、あの家にすんでいた娘が死んで、幸せそうな面をしている連中をあの家の中に取り込もうって話」

「おいおい、あの家に人、いるだろ？」

そういつてその場で話していると、少女がいた問題のある家から一人の女性が出てきた。

「ほら、見ろよ」

「……まあ、確かにそうだよなあ……気になるし、ちょいと聞いてみるか」

「え？おい、ちょっと待って」

佐原の悪い癖はどうでもいいことを真剣に聞こうとしたりすることだ。いまどき『あなたの家に女の子いますか？』とか聞いたら変質者あつかいされかねん。

「すみません」

「はい？」

ほらみる、早速怪しげな目で俺らを見てるぞ。

「あなたの家に、白い服を来たお子さん、いますか？」

「つつつ！？」

なぜだろうか？ものすごくおびえたような瞳を俺たちに向けて、その人は答えずにさっさと家の中に入っていつてしまった。

「なんなんだろうな？」

「さあな……けど、あの驚き方は異常だな」

俺は素直に思ったことを口にする。

「そうだよなあ……怪しい、なんだか事件の香りがするぜ」

「……」

目が輝きだした佐原をとめるには地球を滅ぼすしかない。生まれた時点で野次馬であるこいつは身体の90パーセントが好奇心の塊であり、一度火がつくと誰にもとめられないのである。

「ただいま、漆」

「おかえり、輝」

にこにこで迎えてくれた漆になんとか和みつつも、俺は帰りに寄ったスーパーで手に入れた品々をテーブルの上においていく。リビングは光るぐらいに掃除されており、掃除をしていたのが目に見えてわかるぐらいすばらしいものだつた。

「今日はとんかつ作るからな」

「うわぁ！お肉、だいすきなんだぁ」

だろうな、初めて会ったとき俺を食らおうとしていたぐらいだから……っか、龍だし。

「ああ、ちよつと飯喰つたら友達と用事があるからちよつといつてくる」

「用事？」

「俺の友人でさ、へんなやつがいてそいつ、知りたがりなんだ。ほら、漆がいたあの廃墟の中にも俺を引き連れていったことがあるんだよ」

「へえ、そうなんだぁ……あ、だから輝のにおいをどこかでかいだことがあるって思ったんだぁ」

のんびりとそういつたので俺は首をかしげる。

「においてそんなに覚えておけるものなのか？」

「うん、だっておいしそうなにおいだったから」

「……」

それはボケでしょうか？とたずねたくなつたのだが、マジだよと返されたとき、俺は笑って食事を取ることなどできなくなるだろう……やられる前に犯れ！って犯罪くさいな……食われる前に食べ！ってこれもアウトだ！下ネタ反対！

「あ、そうだ輝」

「何？」

「あのね……『おかえりなさい、食べるならお食事？それとも私？』

」

「……」

それはなんででしょうか？

「え？え〜と……お食事？」

「『あら、私はもう食べれない年齢なのね……しくしく』」

「じゃ、じゃあ……漆？」

「『私が作つたお食事が食べれないって言つたのね！ひどいわ！』ってお昼のドラマであつたよ」

「……」

そういや、保育園とか幼稚園に通っている子が寝るのが遅くなっているって理由のひとつにテレビが上げられていたっけな？

「……漆」

「何？」

「今後、そういった番組見るの禁止だから」

そうこうしているうちに約束の時間に。

「よっ、待ったか？」

「いや、今来たところだ」

「それ、女にだけ使えよ。男に使うと気持ち悪い」

そういつて佐原は背負っていたリュックを下ろす。

「なんだ、それ？」

「ビデオカメラだ。設置してあそこにお化けが映るかどうか確認する」

「って、それってどう考えても犯罪だろ？盗撮だぜ？」

この年で前科もちにはなりたくないなあ。

「そうか、それならしょうがねえから……手っ取り早く侵入してみるか？」

「しょうがねえなあ……」

すでにこちらでは前科があるのでそれほど心苦しい気が……しないわけではないが、とりあえず、近づいてみればわかることだ。

「黒河、気をつけるよ、イヌがいるかもしれねえぞ」

「そうだな」

辺りをうかがってみるのだが犬小屋などそこらいつたいにあるわけではなかった。安全だ、そう思っただ庭の中に侵入する。

「で、どうやって二階のあの部屋までいくんだ？」

「はしご、持ってきた」

リュックの中からはしごが出てくる。どう考えてもそのリュックの中に入りきるようなレベルではない。

あっさりとはしごをかけて二人して上り始める。問題の部屋にいた時点で、鍵を確認してみると……

「開いてるな」

「ああ、そうみたいだ」

「今頃、戸締りすらしてねえなんておかしい話だぜ？ 罠か？」

「おいおい、高校生が忍び込むのを誰が予想するんだよ？」

「それもそうか」

そんな会話を小声でした後に俺たちは部屋の中へと静かに入り込む。もちろん、泥棒とかそういうものではないので靴はぬぐことにして……

第五話：「潜蟄」（後書き）

あんまりあとがきのほうで感想をくれ、評価をくれ、メッセージをくれ、金をくれと言ってもいけませんね………というわけで、確実に途中で断念しそうな企画をやります。今後、一問ずつ問題を出して行きますので………よし、まずは常識問題！金太郎の母親は？

第六話：「果て口」（前書き）

懺悔します、以前、私は冗談で……「冗談であとがきにせつに評価が欲しいとかいてしまいましたっ！そのせいで、次の日ぐらいに一気に数人の方から評価をいただいてしまったのです！それ以降、なんだか気まづくなってしまう……え？ここは懺悔する場所じゃない？すみません、つつい心の片隅に引っかかっている過去のお話が……えゝばつが悪いですね。

第六話：「果て口」

第六話：

「果て口」

中に入ると、そこは空き家……… じゃなくて空き部屋だった………
見た目だけは。

「妙だな、この部屋」

「ああ、妙だ」

二人してその部屋の感想を言い合う。

別に俺たちは建築関係の勉強をつんではないのだが、誰だって一
発で妙だと思うに違いない……… なぜなら、この部屋が部屋である
必要なもの、そう、扉がなかった。もしもここで殺人が起これば基
本的に密室殺人に即つながり、警察関係者、そして第一発見者は基
本的にこの窓からはしごで入らなければならない。

「この扉、いちおう開くけど隣には続いてねえな」

そこは壁をクローゼットとしたようなところで、あけては見るが、
奥に鏡があつて俺らの姿を映しているだけだった。

と、そのとき…… 佐原の顔を外からの光が照らした。

「!？」

「ああ、そういやはしごをそのままにしてたな……… まずった、黒河、
お前はこのクローゼットの中に隠れてるよ。それで、おれが急いで
警察をまくから急いでここを出ろ！この程度の高さなら頭からおち
なけりや、怪我すらしねえ！じゃ、また後でな！」

そういつてやつは俺の返事も聞かずに窓から飛び降りて走って
いった。あいつ、一体全体何者だ？こんなところって二階だぞ、ここ
まあ、あいつが何者であるかは置いておくとして、警官がどこか
に行ったのを見計らって俺もどうにかしないとイケない。

いわれたとおりクローゼットに隠れてはいたが、これ以上クロー
ゼットに隠れるより外に逃げたほうがいいだろうと考え、はしごか

ら素直に降りようと窓から下を覗き込む。

「!?!」

そこには誰かがはしごを上っている最中のように、どうやらそれは佐原ではないようだ。あわてて俺はクローゼットの中に入ってそこでなにか不思議な感じに気がつく。

「?」

先ほどの場所は固かったが、今回足を乗せたところは足元がなんだかベニヤ板のような薄い、一枚の板の上に立っているような感じがするのだ。不思議に思ってその場で飛び上がってみる……もちろん、二回目を行おうとすると上ってきた相手にばれてしまうということだけで一度だけ。

ばりっ!

「えっ!う、うああああっ……」

見事に床は抜け、俺は間抜けにも抜けた床の下に向かって落ちていったのであった。落ちていく、そのときに……俺は心の中で漆に助けを求めた。

「あはははっ!これ、おもしろいな」輝、早く帰ってこないかな」漆はテレビのお笑いを眺めながら親友の帰りを待っていたのだった。

「ん?なんだか今輝に呼ばれた気がしたんだけど……」

助けを求めている輝の姿が脳裏に映る。

「……待ってて!輝!」

トイレに一度立ち寄り、トイレトペーパーをその手に握る。

「今、きつと公衆トイレかどこかで私の助けを待っているんだよね!」

決意を新たに、彼女はガス栓を閉め、玄関の扉を閉めてお隣さん

のおじさんに家の中で何か物音がしたら警察に連絡してくださいとつけてから輝を探しに旅立ったのであった。

目の前がまばゆい光に包まれて、俺の意識は浮上する。それまで暗闇の中で俺は一人、ただ一人だけの世界におびえ、縮こまっていた……だが、誰かがそんな俺を助けてくれたと勘違いをして俺は意識を取り戻す。

「……いつつ……」

思ったよりも身体にはダメージがいつてないようで、何度か足を動かして立てるようになった。そして、あたりを見渡すが、果てしなく、白が続いており、壁があるかもしれないが、見た目どおりあたり一面真っ白だ。その白はまばゆい光を放っているだけ。

「……」

この白に洗剤業界が目をつけたらほうつてはおかないだろうとなんとなく、思ってしまう。

『あなたも狂いに來たの？』

「誰だ？」

『わたしはわたし、狂った白』

気がつけば、五メートルほど先に白いワンピースを着た青白い肌をしていて白く、長い髪を持つ少女が立っていた……

いや、立っていた、はおかしい発言かもしれない。なぜなら、その少女のワンピースのしたから伸びるそれは足ではなく、一本の太く、白い物になっており、その先には

龍が存在していたからだ。

「……これは……」

まるで蛇のようにしなやかで、紅い目の後ろには魚のようなひれみたいなものがついていて、時折赤い舌をちらちらと俺に見せる。だが、その身体 of 四箇所から手足が生えていてそれで龍だと理解で

きる。

『狂わせてあげる』

それだけ言うと、その少女は俺を指差す。まるで、それがスイッチであるかのように少女から生えた白い龍は俺に牙をむいたのだっ
た……

「うわぁっ!!」

無様に転がって何とか逃げるが、相手はどうやら漆とは大違いの
ように切り返しが早く、すぐさま俺の首を狩るために口をあけて突
っ込んでくる。

「うおっ!!」

急いで頭を下げる。今のは一瞬でも遅かったら俺の胴体と首、冗
談抜きで吹き飛んでいたに違いない。

すばらしいぐらいの無表情。相手が何を考えているのかさっぱり
理解できない。敵意はないのだが、友好的でもない。

『狂って、狂ってわたしとお友達になりましょう?』

気がつきや相手の口はまったく動いていなかった。蛇の頭が別に
しゃべっているわけでもないのだが。

「狂うのは勘弁」

『なぜ?とてもすばらしい……何も恐れなくていいのに』

悲しそうじゃない顔に対して、悲しそうな声。いまさらだが俺が
昼間見たのは確かにこの子だ。間違いない。

憂いを含めていなくても、恨みを持っているでもない、無機質
な瞳。

これも龍なら、完全な人型にすることができるはずなのだ。

「わりいな、ちょっと痛い目見てもらうぞ」

『……いない、わたしの友達になら無いなら要らない、いない、
イライナイ……』

少女の身体は無視して、蛇頭への攻撃……しかし、少女の姿は一
瞬で無に帰し、次の瞬間、鋭い尻尾が俺を貫いていた。

「がかっ……」

そんな無様な言葉を残し、白だけしかないパレットに赤が加わる。
「げほっ!!」

『イラナイイラナイ』

蛇は自分の尾っぽについた赤い絵の具を一なめした後、すぐさま俺に飛び掛り……俺の目の前には真っ赤な口蓋。だが、次の瞬間には真っ暗な闇が訪れた。

「死して尚、その手につかむは勝利……そうじゃな、若者よ」

「ああ、そうだ」

「じゃが、これで二度目。ポイントカードなど存在せんからな？」

「もちろんだ、俺も別に死にたくてえ、死んだわけじゃあない！」

「よからう、もう一度言うが、おぬしが復活できるのは相手が龍のときのみ。それだけはくれぐれも胆に刻み込んでおけよ？」

「……わかつてる」

目を覚まし、すぐさまバックステップを行い状況確認。目の前の龍は何かをむさぼっているように見えた。

「それ、喰っても腹の足しにすらならねえって思っぜ？」

驚いたかのように蛇はこちらへと視線を向ける。

『食らったはずなのに』

「あいにく、ストックがあるようですね……さて、と」

身体をこぎこきとならし、どこにも問題がないことを確認する。

すでに相手は攻撃に転じており、俺は何もない白い大地をただ、駆けるだけ。

この、白い大地はまやかし。

この、白い蛇はまやかし。

本体はやはり、尻尾。

蛇が牙をむいたが、それをさっさとよけて尻尾をつかみ、投げ、そして落ちてきたところにけりを食らわせる。人のけりがどれほど通用するかわからないが、とりあえずこの相手には通用したようで悶絶している間に俺は口をあけていた。

「ええつと、とりあえず人型になれや！」

しょぼい、もっとかつこいい言い方もあるに違いないと俺は思うが、こんなことをするときには命を賭ける時だけ……。

動きをとめてびくつき始めた龍のために、俺は上に羽織っていた上着を脱ぎ捨て、そのままその龍に投げる。

目の前に、白いワンピースをまとった少女が眠っている。

「おわったか……」

今、何時であるかはわからない……だが、俺ももう疲れていたためか、そのままその少女の隣で眠りに引き込まれていく……。

目が覚めたら……この子がくるっていませんように。

そう願いながら、俺は目を閉じた。

第六話：「果て口」（後書き）

さて、前回の答えは『八重桐』または『山姥』です。いやあ、すごいですよね。ちなみに雨月としては山姥のほうが似合っているのではないかなあと思つてますが。だって、熊にもかつたんですし、そりや人間じゃねえから余裕だろ！？と思つてしまいますもん。ああ、ちなみに銀。の主人公の名前も金太郎が成人して名乗った名前、坂田金時から取っているものらしいですよ？さ、次の問題は………では、桃太郎で！桃太郎が女の子だったと伝わっているのは四十七都道府県、さて、一体全体どこでしょう？

第七話：「対談」（前書き）

更新スピードが低下しました。あまり速すぎるとスピード違反で警察に捕まってしまうから……冗談です。神様、怠惰な僕に何かください！

第七話：「対談」

第七話：

「対談」

白く、まばゆい光が俺の意識を掬い上げる。

「ん？」

気がつけばそこは洋風の客間で、俺はベッドで眠っていた。

「？」

昨日、何があつたか一生懸命思い出す努力をしてみることにする。
まず、美女に会って、お酒を飲みに行こうと誘われて……違うな、
昨日の夜は不法侵入をして、龍と戦って死んで、相手を倒してその
ままその場で眠った。

これが、事実。

「あ、目を覚ましましたか」

そこには少し年老いおばさんがたっており、どうやらこの家の家
政婦、メイドのようであつた。いや、おばさんがメイド服を着て
いるわけじゃないぞ。

「だんな様、お客人が目を覚ましましたよ」

「そうか、今行く」

そんな声が廊下から聞こえてきて一人の男性が入ってきた。

「今しばらくお待ちください、すぐに紅茶を持ってまいりますので」
そういつておばあさんは退室し、おっさんのこる。

「まず、君の名前と住所、電話番号を聞こうか？なぜ、この家に不
法侵入したか聞きたいからね」

「……」

やっぱりか、そう来るとは思っていたがまるで万引きした悪者み
たいなあつかいだな、おい……まあ、実際犯罪者名わけだが。

窓ははめ殺しでドアの前におっさんが立っているの俺は逃げら
れない観念し、首をすくめる。

「黒河輝。ほかは黙秘。警察にでもなんでも突き出してください」

「輝君か……そうか、君はなぜ、この家に侵入したんだ？」

嘘をついてみようかと思った。金品が目当てでした……よし、これがいい。よもや、白い少女がいて、それを確認しに来ましたは狂っていると思われかねない。

「金品目当てです」

「それならなぜ、一階の外からでも見える純金の時計に手を伸ばさなかったんだ？」

「え？そんなのありました？」

「ほら、すぐそこに」

はめ殺しのまどのところ時計はおかれていて静かに時を動かしていた。

「……」

「違うね、君は別の理由でこの家に侵入した」

「……ええ、まあ、そうですね」

「ずばり、それは白い服を着た少女だね？」

「知っているんですか？」

俺は首をかしげる。

「知っているも何も、あの子は私たちの娘だ……生まれてきた時点であのような身体でね、そのせいで外にも出せず、医者には高額金を渡して黙らせている……彼女から見たら監禁されていると思っ
ていいぐらい、この十六年間あの部屋から一步も出したことはなかったんだが……思念というのかな？そのせいで私の家はお化け屋敷扱いされてしまったよ」

そういつて笑っているおっさん。俺は何も答えずに窓の外を眺めていた。

「だが、彼女にどうやら騎士がきたようで……見事、お姫様を助けてくれた。彼女は今、生まれてはじめて母親と一緒に朝食を食べている。もうすぐ、ここに来るから待っていてほしい」

「あの、悪いんですけど俺、帰らせてもらいます」

ベッドから立ち上がって扉を開けようとするが、それをおっさんは制した。

「それはできない。君はあの子の恩人だ。恩人をもてなすのは人としての義務だよ」

「それなら、不法侵入のことでやらです。どうですか？」

そういつて少し考えはじめたところを狙って俺は扉を開けて急いで逃げ出す。

「おや、どちらへ？」

「トイレへ」

途中会ったおばあさんにそういつて俺は広い廊下を駆ける。途中からおっさんが走って追いかけてくるのを感じたが、あの程度では俺にかてるはずもない。

「久遠、それじゃあ行きましようか？」

「はい、お母様」

そんな声が聞こえてきて、俺は一瞬、立ち止まろうとしたのだが……やめた。急いで近くの窓を開けて逃げ出すことにする。

「狂ってないみたいだな」

ぼそつとそうつぶやいてみると、後ろから声が聞こえてきた。

「お待ちになつて」

「いや、待てない」

「なぜ、逃げなさるの？」

「そこに道があるからさ」

適当なことを言つて庭に降り立つ。

「あなたの名前は？」

「黒河輝」

一目散に逃げ出して、俺はさつさと高級住宅街を脱出する。

「あ、輝〜！」

と、なぜか知らんがトイレトペーパーを握り締めながら追いかけてくる漆を見つける。

「うわ、なんだそれ？」

「だって、輝が助けを私に求めてたよね？」

「いや、求めてないよ」

「うそ！？脱糞しそうだってテレパシーおくらなかった？」

「いや、送ってないから」

「なんだ……そうなんだ……」

根暗ゾーンが形成されようとしている中、俺はあわてて漆に告げる。

「漆、昨日の夜から今日にかけて、龍にあつたぞ」

「え？ほんと？」

「ああ、今度、いつかお前に紹介できたら紹介するから」

「へえ、楽しみだなあ」

あの子に友達ができなかったら漆を連れて行こう、そう俺は思った。

「あれ？黒河……その子は誰だい？」

後日、てつきり警察に捕まったと思った佐原が遊びに来た。漆をみて首をかしげる。

「黒河漆。俺の親戚だ」

「そうなんだあ、よろしく」

手を指し伸ばす佐原。

「ばっちい！触らないで！」

「く、黒河？」

「え、えつとだな……彼女、潔癖症なんだ。握手禁止だな」

「そ、そうなんだ……よろしく」

「よろしく」

まあ、あれだな。漆に友達が増えたようでよかったよかった。

第七話：「対談」（後書き）

はい、まだ第三回目ですが恒例となりました後書きクイズ！前回の答えはなんと香川県！まあ、香川県全土でそういった話はされていないそうですけどね……というか、この後書きまで見てくれる人……は、一応いますね。ありがとうございます。ちなみに、今回の問題はあんまり他からとってきたら問題あるんで自分の書いた小説から出させてもらいます……作者がこのサイトに始めて小説を投稿したのは何月何日でしょう？ええと、評価、感想、メッセージに応援の言葉（がんばって！とかじゃなくてネタを提供して怠惰な作者を応援もとい、援助するメッセージ）をお待ちしております。高いところ（画面から50センチ上）からですが、これからもよろしく願います。

第八話：「尖兵の一時」（前書き）

えゝ、楽しめていますか？つて、どうでもいいことですねえ……………
ああ、今回は後書きなしです……………え？別に誰も期待してない？そ、
そうですね……………で、では今回のお話もどうぞ、お楽しみ下さい！

第八話：「尖兵の一時」

第八話：

「尖兵の一時」

ペリーが来たよ、日本に来たよ。

俺のケータイのメール着信音。

どうだ？おかしいだろう？いや、俺だっておかしいとは思っているが、俺のケータイは壊れているのか他の音に変えてもこれしかないのである。別に俺が設定したわけじゃないぞ？俺の妹たち、どちらかがこれにしたのだ。壊れているということはケータイショッブまで持つて行けば原因は説明されそうなのだが別に問題は発生してないのもっていつてはいない………というのは嘘で、実は俺、一人じゃケータイショッブにいけないんだわ、これが。

ちなみに、電話着信音の場合は

日本を開国させること………それが私の使命だ。

である。

「輝くケータイなってるよ？」

Tシャツ一枚のそんな刺激的な格好でソファアの上でごろごろ。

俺はちらりとそんな漆を一瞥するとケータイに手を伸ばす。

「……………親父か」

てつきり、双子が帰って来るためのメールかなと思いきや、親父だったのでは？とする。今日の午前中、久遠だったか？久遠の家から逃げ出してきて一息ついてそのまま眠って気がついたら夕方になつていたということだ。一日、無駄にしちまった気がかなりする。

メールの内容は『今、玄関の前にいる』というものだった。

「？」

珍しいメールだった。

これまでは件名のところにしか文字を打たなかったあの親父が珍しく本文のところに打っているところを見るとどうやらケータイの使

い方を学んだらしい。まあ、それはおいておくとして月初めにはまだ一週間ほどあるものの、お早いご帰還かもしれないので俺は玄関を開けに行く。鍵を持っているとは思ったのだが……もしかしたら落としたのかもしれない。

「おかえり……」

「こんにちは、輝さん
ばたん。」

い、いま目の前に白い少女の幽霊が立っていた！

え、ええつと……知り合いの霊媒師、霊媒師の電話番号は……
…うわ、俺の知り合いに霊媒師なんていねえよ！ええつと、なんだ？
メリーさんに電話すればいいのか？いや、メリーさんはかけてくるほつだ！……どうでもいいことだけどさ、メリーさんが何かしら電話つばいものをもっているところを俺は見たことがないな。いや、実際にメリーさん自体見たことなんてないんだが、テレビとか漫画とかで登場するメリーさんが電話を持ってお話しているところを俺は見たことないんだが……みんなはどうだ？

「輝、閉めるとは失礼だろう」

「親父……」

なぜだか後ろのトイレから出てくる親父に俺はため息をつく……
…そういえば、この親父とは血がつながってなかったんだよねあ……
…まあ、血がつながってなくてよかったと思えることのほうが多いかもしれないが……小さい頃からあんまりあわねえからここまでつながりが薄いのかって思ってたけど違うのかなあ……

「お客様だ、上がってもらいなさい」

「おゝいてっ！」

はい、皆様には俺が言わない限りわからないでしょうが文と文との間に一発殴られています。理由は不明ですが、どうやら不謹慎なことを考えてしまったからなようです。

しょうがなく、俺はしぶしぶ玄関を開ける。そこには久遠の父と久遠がたっていた。

「やあ、輝君またあつたね」

なれなれしく名前を呼ばないで欲しいなあと思う。たまにいないか？勝手になれなれしく名前を呼んでくるおっさんが。

そして今、ソファアに座って久遠父と俺の親父は何やら話し合っているようで、久遠もその隣に座っているのだが俺と漆は俺の部屋に退散していた。

リビングに通したとき、漆の尻が丸見えだったことは誰も見ていないということだけでけりをつけておくことにしよう……………ああ、安心してくれ……………俺は見えてなくて、部屋に入ってきた久遠が慌てて漆の尻を隠したからな。

「輝、あの子は誰？」

少し吊り目な感じだがなぜだか親しみのわくような視線を少しだけそらして俺に尋ねてくる。

「んゝあの子？ああ、あの子も龍だった子だ」

「ふゝん？」

自分で言うておいて興味なさげにそういつていつも漆が寝ているベッド（元俺のもの）に寝転がっている。

どーでもいいことかもしれないが、俺と漆は同じ部屋に寝ている。誤解しないで欲しいが、ベッドは同じではなくて、さっきも説明したが漆が俺が使っていたベッドを使って俺が床に布団を敷いて寝ている。これはまだ、暫定版であり、決して夜中漆を見ながらぽーっとしていることなどないということを誤解を生まないためにも教えとおこうと思う。

「輝、ちよつと来い」

「はいっ？」

あらぬ妄想をしていたところで親父に呼ばれ、さつさと部屋を出て行って親父の隣に座る。

「？」

「輝君、実はこれから私と家内は外国に旅立たなくてはいけないん

だ」

「は？」

それを俺に話してどうしろというのだろうかと言の『は？』にこめたのだが、どうやら相手はそれを聞いてはいたのだが理解はしていないようだ。

「久遠が何故、このような事になったのか私はそれなりに調べてきてはいたのだ。そして、南米辺りに久遠みたいにドラゴンのような異形の姿になったりしていた少年がいたらしいのだ」

「へえ、そんな人が……………」

「実はその人たちも何かしら理由があつてこの国を離れているそうだが、噂では凄腕の人たちで沈んでしまった船から脱出した後に泳いでそこまでいったそうなんだよ。現地の人は硝煙の臭いがする女性に、少年、そしてネコ耳をつけた女性だったと私に教えてくれた」
「……………」

一体全体、そんな屈強な、そしておかしな人が本当にいるのだろうかと俺は尋ねたかった。

「危険を伴ったびだから、久遠を連れて行きたくはないんだ。猿渡さん……………あのお手伝いさんだね、お手伝いさんに任せようとはおもったんだが、私たちがいない間に久遠が再びあの姿になったらきつと驚くだろう」

そりゃ、そうだろうな。驚かないほうがおかしいぞ。そうしたら警察とかに連絡とかされるに違いない。

「それで、悪いとは思っただけど君の家に久遠を住まわせてやって欲しいんだ」

「はあ、そうなんですか……………え？」

俺は驚いた。

「お願いだ、謝礼だったらなんでもするから」

親父にいいのかとアイコンタクトを送ると俺が知ったことではないといわんばかりに目をそらす。つまり、自分で決めるといいたいのだろうなあ……………久遠のほうを見ても、彼女は俯いているだけで

何も話さない。

俺はため息をついて一つ、疑問に思ったことを口にしていた。

「いえ、謝礼とかどういったことでもなんでもないんですけど……」

……その、久遠のお父さんはいいいんですか？」

「何がですか？」

「そのう……」

これから先のことを聞くのは非常にためらわれたのだが、正直な話、これ以上何か厄介ごとを俺はこの家に侵入させたくはないのである。

漆との生活だつてほんのちよつとだけだったが、文に表さないだけで実はトイレに入っているのに気がつかずに戸を開けてしまつ、俺が着替えているのにそこで着替え始める、テレビ見てたら後ろから俺の肩に顎を乗つけて見始める……などといった、お年頃な男子の妄想を爆発させるような危険な行動をとっているのだ。

これに久遠が混じるとなると、俺が漆の裸を間違つてみる↓久遠から白い目で見られる↓否定するも、後に遊びに来たりした友人にも誤解される↓二期、俺は変態に♪

「……普段は俺だけしか住んでいませんし、そんな家にその、愛娘をおいていくのはどうかと思います」

「安心してくれ、君が私のことをお義父さんと呼びたいのならそれで構わないからな。なにせ、娘の命の恩人だから」

俺、あなたの娘さんに一度殺されましたけどね……とは絶対にいえない。いえるわけがない。

「君さえうんと言つてくれれば久遠は今日から君のところに住める準備をしている」

既に準備済みとは……だ、だが俺には最後の砦が存在する！

「こ、こういうのは本人に直接聞いたほうが……ほら、む、娘だつてお父さん、お母さんと一緒に行きたいだろうし……」

「わたし、平気です！輝さんの家なら……」

「……………」

あ、ああ……そ、そうなんだあ……

俺が断れることなどなく、その後は自家用機で行くからという
となのですぐさま久遠のパパは去って行った。

第九話：「黒白」（前書き）

これはあくまで独り言です。ええ、誰にも聞かれていませんから……小説かいていてたまにメインヒロインをサブのほうに追いやってサブヒロインをメインにすえちやいそうになるんですよ……実際、これまで書いた小説の中に『龍と書いてドラゴンと読む！』つてのでミストなる人物を一発キャラで終わらせようとしたのにそのまま……ああ、おそろしやおそろしや……こほん、ご意見、ご感想、メッセーじに昨今の日本の政治の愚痴などを聞きたいと思つてますので、よろしくお願いします！

第九話：「黒白」

第九話：

「黒白」

「う、漆い？え、えつとだな、今日からこの家に住むことになった

……」

「最上久遠です」

「ん？」

そういつてベッドの上で俺の漫画を読んでいたのだが、久遠を一瞥する。

「……誰？」

「だから、久遠。最上久遠だよ」

「知らない人」

そらあ、そうだろうに。だから、今自己紹介をさせていたんだが

……

「……」

本当に興味なさそうに漆はそっぽを向いて本を読み始めた。

「あ、あのだな、久遠もその、龍でな？」

「うん、それで？」

まったく、驚いていない……というか、興味を持っていない。

「え、えつとだ、ご両親が海外にいったんでこれから仲良くしてやつて欲しいんだ」

「ふうん………私は漆」

「え？あ、はい。よろしくお願いします」

「……」

「……」

それ以降、漆が何かをしゃべることなどなかった。

寝る前のひと時、結局俺の部屋で俺のベッドを漆と久遠が使っ

とになり、俺は床に布団を敷いて眠ることとなった。

ちょうど久遠が歯を磨いている間に俺は布団の上で寝転がる漆にたずねてみることにしたのだ。

「なあ、漆、久遠のこと嫌いかな？」

こちらのほうを不思議そうに向けてくる漆。

「嫌い？ いや、嫌いじゃないよ」

「そうか？ それならいいんだけどさ」

「何でそんなこと聞くの？」

「そりゃあ、久遠はな、友達がいらないんだ」

「私だつていないよ」

「……いや、とりあえずは俺がいるだろ？」

「あっちにも輝がいるじゃん」

「いや、友達かどうかは……その、会ったこともほとんどないし」

「私も一緒だもん」

そういつて漆は布団をかぶって一人でベッドを占領。

「漆」

「……ぐう」

すでに眠ってしまったようで漆は一度眠るとそれこそ、何をしてもおきない。ちよつとした俺のいたずらなんて無視。だから俺はため息をつくことにしたのだった。

「あおう、輝さん？」

「あ、久遠……」

扉を開けて久遠がそこに立っていた。ものすごく、いつらそうにしていた。

「その、実は輝さんのお父さんから漆さんがいることは聞いてはいたんです」

「そうなんだ」

「だから、すぐにお友達になれると思っていたんですけど、漆さんにとってはわたしはお邪魔なんでしょうかね？」

本当に不安そうな瞳をこちらに向けており、俺はそんな彼女が気

の毒になつてきた。

「お邪魔じゃないだろ？邪魔だったら今頃久遠を襲つてゐるだろうし」
飯にも龍だ。気性が激しいところもあるだろうし……とか考へて
いる自分が悲しくなつてきた。

「と、とりあえず！まだあきらめちゃ駄目だ！」

「そうですねえ？もしかして、輝さんをとられると思つてゐるんじゃないんでしょうか？」

「とられる？」

うなずいて何か思ひつめたような表情でこちらをみてる久遠。

「ええ、わたしと輝さんが話すことによつて漆さんは輝さんと話す
時間をとられてしまいます」

「まあ、そらあ、そうだろうな」

「漆さんも一人でこれまでいたんでしょう？わたしはあのような場
所にいましたがそれでも夜遅くとかにわたしの両親はわたしにあい
にきてくれていましたから」

そういつて俺の隣に座る。漆は……そうだな、確かにあんなく
らい場所に一人でいたのだ。思い出したくないのか暗い場所には行き
たがらないし眠る時だつて部屋を暗くすることはない。

「久遠、漆はちよつとわがまま言つてゐただけだ」

「そうでしょうか？」

「そうそう、だからお前が気にすることもない……とりあえず、今
日は疲れたろ？」

主にめちやくちゃアプローチをかけていた漆にオールスルーを食
らつてしまつて。

「だから、もう寝ろよ。ほら、俺の隣が空いてゐるから」

「あ、はい。失礼しますね」

二人寝るにしちゃあ、少し狭いがなんとかなるだろ。俺は明日こ
そは漆と久遠が仲良くなれるように努力しようと思つたのだつた。

これは夢である。

「輝、こつちにおいで」

「……お父さん、このお家大きいねえ」

「そうだな、だけどここはもう廃れてしまった家なんだよ？」

「廃れた？」

「そうだ。今ではもつと別の場所に移ってしまったて今この家がある理由はほとんどないっていい。ああ、そうだ、実はこの下にはお化けが住んでいてねえ……子供が悪さをしたら連れて行こうとするんだよ」

「……本当？」

「本当本当。だから、お前が双子の妹をいじめたりしたらお前もお化けに連れて行かれるからな？」

「うん、いじめない。絶対」

「それはよかった」

俺はそういつてその家の前を通り過ぎたのだがものすごく、記憶に残るその家。それは……

「んっふ……？」

目が覚め、なんだか口をふさがれていることに気がついた。何かが俺の上に乗っている。幸い、電気はついているので頭の処理能力が眠りから覚めればこの状況に一発で解説を入れてくれることだろう。

むにゅ

「ん」

「んんっ？」

くぐもった声が聞こえ、頭の処理能力が一定以上の働きをし始める。

現状況、漆が上に乗っている。さらに、俺の手は思い切り彼女の

大きな胸をまさぐっている最中だった。

「ぶっはあっ!？」

そして、俺は漆の唇とくっついていて自分の唇をはずして驚いて立ち上がろうとしたが失敗。

気がつけば漆は俺に抱きついていたのだ。顔は移動していて俺の首元に唇を押し当てて眠っている。俺と漆の足はお互いに絡み合っていてデンジャラスな状況である。そして、久遠は俺の隣で静かに眠っている……しかし、記憶をまさぐってみると寝るときは俺の右側にいたのだが左側に移動していた。寝相わるっ！

「ったく……おい、漆」

「……ぐう」

こんな状況で久遠がおきて俺たちの姿を見たらなんと思うだろうか……いや、思えば箱入り娘だった久遠が何かを思うわけでもないし……いやいや、大体漆がこんなこと……いや、寝癖が悪いだけか？ つか、なんで俺は漆の胸をもんでたんだよ？

なんだかまだ胸の感覚が残っているような気がして右手を上げてみるが、そこでため息をついて漆をはがそうとする。ものすごく、力をこめているのか両手を使ってもなかなかとれない。

「……輝、いかないで……」

「……」

苦勞して右手をどかしたところでそんなことを俺の首元で漆は口にした。

「……やゝめた、めんどくさい」

俺は漆に引っ付かれたまま、再び眠りにつくことにした。いろいろと当たってくるからだの部位に苦勞はしたのだが眠ることには成功したのだった。

外からちゅんちゅんという声が聞こえてきたので朝が来たということを理解した。

「……朝か……」

おきようとして身体が動かないことに気がついた。

「……」

美少女が俺の上に乗っていた、それだけならどれだけいいことだろうか？

漆はあの龍の姿になっていて、同じく久遠も龍になっていたのだ。

「ちよつと……重い……」

よく静かに寝ていたな、俺よ。驚く以外の何物でもないぞ？

漆の顔を探して頭をたたく。

「おい、おきろよ！重い！」

「ぬがつ？」

そんな声を漏らして目を開ける黒き龍……だが、瞬きの間に漆は人型になっていた。

「……」

目をこすりながらこちらを見ている。次に久遠の頭……（説明不足だったがこつちは少女の身体の下半身、そうだな、股ぐらいか？それ以降が龍の身体につながっている感じ）を探してゆする。

「おい、久遠！」

「はいっ？」

こつちも目を覚ましたようで気がつけば人型になっていた。

「とりあえず、二人とも顔を洗ってきなさい」

「……」

返事もせずに立ち上がってそのまま部屋を出て行く。

「おい、漆」

「んなつう？」

発音しづらい声が聞こえてきたが、どうやら呼び止められたのがわかったようでこちらを振り向く。

「俺はいかないから、安心しろよ」

「……？」

首をかしげてなにも言わずにいつちまった。どうやら、まだ眠っているらしい。

ペリーがきたよ、日本に来たよ。

そこで、そんな声が聞こえてくる。

俺はケータイをその手に握ったのだった。

第九話：「黒白」（後書き）

さてさて、前回？いや、前々回の答えは……多分、夏ぐらい？つて、やっぱりうるおぼえてしたね……すみませんっ！じゃ、気を取り直して今回の問題！バハムート、ご存知ですか？このバハムートの姿を想像してください。それが、今回の問題です。

第十話：「降り注ぐ災難、それはまるで」（以下略）」（前書き）

タイトル名が長すぎて入りきれないのは致し方ないということでは……勘弁願います。ほぼ、毎回感想を下さる愚者様にはすごく、びつくりしています。いやあ、世の中にはこんなすばらしい人もいるんですねえ……おもえば、既に記念すべき十回目を終了してしまつて以前やっていた十回記念とかやれずじまいでした。用意としては一応、『歴代の龍シリーズヒロイン！』をやるうかと思つていたんですが……まあ、仕方ないですね。少しでも評価、感想などを書きたくなつたらぜひともお願いしますっ！

第十話：「降り注ぐ災難、それはまるで」（以下略）

第十話：

「降り注ぐ災難、それはまるであの漆黒の夜空を彩る流れ星かのような美しさ……そういえばさ、流れ星つてごみたいなものなんだよね？なんでそんなごみに願い事をするようになったんだ？」

俺のケータイに死神が降り立った。二人。

日時： 7月21日 06:46

送信者： 妹1

タイトル： お昼過ぎ

内容：今日、帰ってくるつもりだから。

日時： 7月21日 06:46

送信者： 妹2

タイトル： 12:45

内容：帰宅。

両者とも冷たい文面だが、どっちが感情に乏しいか読んだだけでわかるつてものだ。後者はまったく、無駄のない……けど、わざわざタイトルとかつけるところが面倒くさがりな俺とは違うわなあ……。

「……はあ」

ひとつ、ため息。

俺の妹、一応紹介しておこう。

双子で、歳は俺より一つ下。

名前は黒河千佳、黒河由佳。

性格は千佳が明るくて由佳が少し引っ込み思案か？だが、それはあ

くまで他人に対してであつて、自分より下だとわかつた連中には二人とも見下したような目線を送り（俺とか、俺とか、俺とか）、さらに家にいるときは見下したやつ（例：俺）をこき使う（やれ、肩をもめ、やれ、怖いから一緒にテレビを見るとか）困つた性格をした連中だ。

外面がめちゃくちゃいいから先生とかにはかなり人気があるが、俺は実際の正体を知っているので中学自体は憂鬱だつたな。

いつも俺はあの二人の妹と比べられていたからな、それに、あいつらめちゃくちゃもてるんだぜ？これもまた比較対象となつたな……お前、あいつらの兄貴じゃねえんじゃないか？ううん、確かに血がつながつてないことを知つちまつたが……言わないほうがいいんだろうな、けど、血とかそういうものを抜きにしてあいつら性格がばれることなくもてたんだよ、いや、うらやましいわけじゃないぞ？ま、まあ、俺が通つていた中学のほとんどの男子はあいつらにほれていて中にはちよいとお痛が過ぎるような連中もいたがもてていたのは事実だ。七割がたが告白をしたがあゝの二人は何を考えているのか知らんが資産家の息子からの告白を断つたり、男順位（イケメンランキング）上位五位をすべて振つたのだ。アホである。

けど、あの二人も家じゃ仮面が外れるから風呂から上がったらタオル一枚でうろろしているのできつと青少年の夢も崩れるに違いないわな。完璧人間なんてこの世にはいないってことだ。それに、ぬれた床を拭いてやるのは誰だつて！いつつ、わざとらしく俺の前を歩いていくのだが、あいつら、絶対嫌がらせしてるだろ？朝っぱらからいろいろと文句をたれてしまつたがそれでも俺の妹だ……けどさ、俺とは血のつながってない妹だよな。やっぱ、似てないから俺みたいに心優しい妹じゃないんだろうなあ……

「輝、ごはんは？」

漆が部屋をのぞきこんでくる、その表情はすでに覚醒を終えているためにきりつとしていた。

「あいよ、今作つてやるから」

そんな返事を漆にすると漆の隣から久遠の顔がひょっこりと現れる。

「あれ？輝さんが朝食、作ってくれるんですか？」

「ああ、まあな」

昼過ぎ、時間は12：43となり、俺はごろごろとしていた。

「ちっ、先にいかれたわ！」

「え？あ、あはは……」

「つて、気がついたら久遠の子供の数二台目必要じゃない！」

「え？ああ、本当だ」

昨日とは打って変わって漆と久遠は仲良く？遊んでいる。二人でやる人生ゲーム、楽しいか？一人は確実に大富豪にならないのか、それは？

すでに二人には俺の妹が帰ってくることを伝えていた。そろそろ帰ってくるだろう。

「ただいま」

「……………ただいま」

そんな声が聞こえてきて俺は二人が帰ってきたことを知った。

「お兄ちゃん、荷物運んでよ……つて、誰？」

不躰に千佳がそんなことを言う。もちろん、人生ゲームに熱中している二人組を見て、であるが。

「ん？この二人は漆と久遠」

「ちっ、またスタートへ戻るかぁ……」

漆はゴール手前でスタートへと戻った。これで彼女が人生のスタート地点に戻ったのは二度目であるが。すでに久遠はゴール地点まで来ている。そして、不思議なことに久遠には“1”以外でないという珍事が起きていた。ちなみに、漆は必ずといっていいほどデメリットのマスの上で駒をとめまくっている。

「……………兄さん、この人たち誰？」

「ああ？だから、漆と久遠」

遅れて入ってきた由佳にそういう。無論、彼女が荷物を持っているわけではない。多分、俺に運ばせるためのものだろう。手間のかかる妹たちだ。

「友達？」

「まあ、そうだな。今日から仲良くやつちくれ」

「仲良くって……」

「……どういうこと？」

「この二人、この家に住んでるから」

一瞬、双子が珍しく目を見開いたようだったが、俺はあくびをかましていてそれどころではなかった。

「ちょ、ちよつと待ってよ。おかしくない？」

「おかしい？どこが？」

今また、漆が借金をおったところか？おいおい、そろそろ自己破産を役所に提出したほうがいいんじゃないのか？漆。すでに所持金額はどう見ても久遠のほうが上だろう？勝つにはあと三周まわったあとに宝くじを連続して当てなきゃならんぞ？

「他人が家にいることよ！遊びに来てるってことならわかるけど泊ってるってさあ……」

「他人じゃねえよ。ほら、そんなことより荷物を部屋に置いてやるからさっさと部屋に行って着替えてこいよ。いつまで制服でいる気だ？」

「……」

かなり不服そうだったが珍しく引き下がったうえにさっさと引っ込んで着替えを始めたようで、俺は玄関に置かれていた荷物を二人分もつ。

「……今回もねえのか」

G Wの時にはお土産があったのだが、それは両親のものであつて俺のではない。俺のはないのかとたずねたら『私たちが無事に帰ってきたからそれで十分じゃない？』『……』とかいいやがった。由佳は完全なシカト。

「……………」

「ん？どうした由佳？」

「……えいっ！！」

「いたっ！何するんだよ！」

俺のすねをけって末っ子、由佳はそのまま部屋にこもった……………

…ったく、いつから暴力をふるうような子に育ったんだ？もしかして、学校内でそんな暴力をふるうやつにいろいろとちよっかいを出されているのではないだろうか？これってDVじゃねえのかよ？

「ったく、何がきにいらねえんだよ？」

考えたってよくはわからんな。年頃の娘なんてみんなあんなものか？まあ、もとから暗かったがさつきはさらに暗く見えたな。

「久遠、お前ご両親にけりをくらわしたときとかあるか？」

「え？ありませんよ？」

そりゃあ、よく考えてみたら久遠が暴力振るえばあの家が崩壊するわな。

「よし！あがった！」

「よかったね」

ここで漆と久遠の人生が上がったようだが……………漆は借金もちすぎ夜逃げしたほうがいいんじゃないのか？

久遠は所持金を漆が借金として持っているぶん、所持していた。

「プラマイゼロねえ」

この二人、意外と相性いいのかも知れんな。

「……………」

夕食時、なんだかいつにもまして機嫌が悪そうな双子。

「輝、しょうゆとって」

「自分で取れや」

「輝さん、ポン酢は？」

「冷蔵庫の中。勝手に開けてくれ」

自分から立ち上がった久遠に漆は視線を向ける。どうせ、久遠に

頼むつもりだな。

「久遠く、しょうゆとって」

「はい、どうぞ」

「ありがとう」

静かでまるで嵐の前触れのような双子、それとは対照的に仲良くやってる龍二人。

「ねえ、お兄ちゃん？」

「何だ？」

「しょうゆとって」

「自分で取れよ、面倒くさい」

がちゃんっ！！

「しょうゆぐらい、とってくれないじゃない！」

千佳がものすごく怒っていた。

俺はきよんとする。そりやそうだろ？しょうゆを取らなくてマジギレなんて高校生がするものじゃない。それに、千佳よ……お前、すでに自分の分の料理をすべて平らげてるぞ？それ以上何にしょうゆをかけるんだ？ああ、食後のプリンの上のソースに醤油をかけようって魂胆だな？あれ、失敗するからやめとけよ。

そついおうとしたら漆が同じようにして立ち上がる。久遠と由佳が静かにその成り行きを見守っていた。静かに……とはいったが前者はおろおろしながら、後者は冷やかに、ではあるが。

「ええっと、千佳だっけ？」

「何よ？」

千佳が挑むような目つきで漆を見ている。なんだか、落雷が落ちるんじゃないのかなあって気分になってきた……訂正、さっきのは頭痛が痛いといっているのと同じだ、正しくは雷が落ちるんじゃないかって気分になってきた……みんな、きちんと日本語は使おうな？

「……………」

「……………」

にらみ合いが続き、居心地が悪くて、結構上手に作ったつもりのおかずがまずい気がする。

「私だっしょうゆを輝にとつてもらえなかったんだか、自分でとらなきゃいけないってわかるでしょ？」

その程度のことと分からないのかと暗に示している漆。威圧的だ

……………

「何よ、あたしはおにいちゃんの妹よ？」

妹が兄貴に何か頼みごとをして何が悪い？そういったことを言うおうとしているのだろう。

「妹だからってそれがどうかした？」

「あんたにおにいちゃんの何がわかるのよ？」

「さあ？それはわからないけど……輝を困らせようとするのなら、私、許さないから」

真摯な瞳、真一文字に結ばれた唇……………だが、漆、お前もさつきしょうゆをとってくれといった拳句に久遠にしょうゆをとらせたぞ？

そして、これ以上にらみ合いを続けていても勝負がつかないということを二人とも悟ったらしい……………

「……おにいちゃん、この人に何か言つてよ！」

「……輝、私何か間違つてる？」

二人がこつちを見てくる。非常に居場所を失っているような感じの上に俺がこれからすべきことは何か……………白い龍に助けを求めるか、双子の妹の片割れに助けを求めるべきか……………

俺は覚悟を決めてとある言葉を口にした。

「久遠、しょうゆをとってくれ」

「……………はあ」

「何で、怒っているんでしょうねえ、千佳さんは？」

「さあな、わがままだからな」

茶碗を洗うのを久遠に手伝ってもらっているところへ由佳が現れた。これまであんまり立ち入った事のない領域だろうにその瞳には真剣という文字が浮かんでいたりする。

「……手伝う」

一瞬、何を言い出したかわからなかったが（由佳はこれまで一度足りとも手伝いをしたいとはいいだそうとはしなかった……まあ、近くで俺を見ていることは多々あったが）こいつに何かしてもらわなくても俺にはアシスタントが既にいる。

「いいよ、手伝わなくても。久遠がいるし」

「……」

「ほい、久遠」

「ええ……」

ぶすつとした調子の由佳だったが、久遠がうけとろうとした皿を横取りし……さらにはうまくキャッチせずには落として割ってしまった。

「……」

「おっほっほい！危ないだろう？おい、由佳、怪我はしてないか？」
怒るときは声を荒げて怒ってはだめなのだ。だから、静かに怒る、それが多分ベストだ。

「……してない」

うそつけ、お前の右手の人差し指からあふれ出ている赤い液体はなんだ？ケチャップか？

「久遠、わりいけど由佳、怪我しちゃったからあっちで手当してやってくれないか？」

「ええ、わかりました」

「それと、久遠は大丈夫だよな？」

「はい」

「そっか、それならいい……久遠、危ないから割って入ろうとするなよ。手伝おうとしてくれたのはうれしかったけど……けど、

俺の皿を割った罰として鼻の頭に洗剤つけてやるから」

ちゃんと鼻面をたたいてしっしと追いやる。

「……」

てつきり文句を垂れていくかと思ったのだが久遠におとなしく連行されていった。ふむ、由佳と久遠は仲がよさそうだな……まあ、おとなしいのは皿を割って罪悪感を感じているだけかもしれないが。

風呂に順番に入っていった、俺が最後に自作（ペットボトルをくっつけて下に穴を開けて五右衛門風呂からとったお湯）のシャワーを浴びる。なぜか？そりゃ、あれだな。俺の妹は俺の後にはいるのがいやだそうなので妹がいる間はこうするしかないのである。それに、これで何円か得するに違いない。

風呂からあがってリビングで小競り合いをしてそうな感じの漆と、由佳を後ろから抱き締めているような久遠に撤収の呼びかけをする。「んじゃ、そろそろ二人とも寝るか……じゃあな、お休み千佳、由佳」

「……ふんっ」

「……」

いつもいつも、俺のあいさつには視線をくれるのだが今日は二人とも視線すらくれなかった。なんだ？まだしょうゆ事件を根に持っているのか？

いまだににらみ合っている漆と久遠に俺の声は届いていなかったように、改めて声をかける。

「漆、久遠、そろそろ寝るぞ」

「うん」

「はい」

二人が俺の部屋に入っていく、覗けばベッドに寝転がっていた。さあて、俺も寝るかと部屋に入ろうとすると待ったがかかった。

「ちよっと待った」

「何だ？」

千佳が後ろから声をかけてきたのである。しかも、腰に手を当てて……あんたはお母さん気取りか？

「何であの二人がお兄ちゃんの部屋に入るのよ？」

「そりゃあ……一緒に寝てるからだろ？」

「ええっ！？」

めちやくちや驚いたような顔をしている千佳。気のせいかな、普段は感情が欠落しているような由佳まで驚いていた。

「おいおい、何をそんなに驚いているんだよ？」

「おかしいでしょ！？」

「おかしい？何が？ああ、部屋が狭いから三人で寝るのはおかしいって言うてるのか？別に狭くないぞ。それに、きちんとベッドに二人、それに布団を敷いて寝てるから」

「違う！」

まったく、わがままだな……こいつは。しかも、何を言おうとしているのかさっぱりわからない。

「……兄さん、おやすみ」

「え？ああ、おやすみ、由佳」

「え？ちよつと、由佳……」

由佳が部屋に入っていく、なぜか千佳もそのまま自室へと戻っていった。仲がいいな、やっぱり双子だったら違うのだろうか？いまだに、あの二人の部屋は同じなんだし。

第十話：「降り注ぐ災難、それはまるで」（以下略）」（後書き）

さて、前回の問題の答えは……魚です！様々なゲームで誤解している方々もいるでしょうがバハムートはドラゴンではありません。単なる、魚……ではありませんが、まず、ドラゴンだっと思った方、残念でした。あ、魚だと思った方は是非、ご連絡下さい！マジで尊敬しますから。さてさて、今回の問題は……セーラー服ってありますね？元は男が着ていたということを知っている方も多いと思います。セーラー服の襟って何に使っていたかわかる方、いますか？感想などであたった場合はここで表彰させてもらいます！では、めちやくちゃしつこいことはわかっています。感想のほう、よろしく願います。

第十一話：「タイトルが長かったので今回もまた入りませんでした」（前書き）

雨月「今回のお客様は天道時時雨さんです」時雨「こんにちわ」雨月「時雨さん、新作の主演が決まったとか？（嘘）」時雨「いやあ、それほどでも……」雨月「次回作、どのような意気込みですか？」時雨「皆に後ろ指を指されるようにがんばりたいと思っています！皆さん！応援よろしくお願いします！」雨月「では、今後この前書きでは次回作についての出来具合を発表して行きたいと思っています（嘘）」

第十一話：「タイトルが長かったので今回もまた入りませんでした」

第十一話：

「一度でいいから降り注ぐ大金に心を躍らせて虫取り網で思い切り取ってみたい、賛同してくれた人、是非とも俺に連絡を！」

布団に入ったところで、ベッドに寝転がる漆が俺に言うてきた。

「輝、絶対甘やかしすぎ」

「はあ？誰を？」

「あの千佳って子！調子に乗ってるんだよ！あんな妹、賤しとかないと！」

この恨みはらさしておくべきか……そんな面をしている漆。どろどろとした黒い何かがあふれ出ているようにも見えなくもない。

「まだ、甘えたい年頃なんですよ……漆さん」

それとは対照的に何かいいことがあったのか白いオーラが出てきていて漆のそれとぶつかり合って中和。

「そう？あの千佳って娘はあ！独占欲がある！輝のことを自分の物だつて目、してたもん！そんなの、許されないよ！」

ふんと鼻息荒くそんなことを言う。

「でも、由佳さんはとてもいい子でしたよ。ついつい、兄に頼ってしまうのだといってましたから」

「へえ、由佳がそんなことを……」

そんなことをまさか久遠に言うなんておもっても見なかった……初対面なのにな。けど、久遠にはぼろつといつちやいそうな気がするな。だって、久遠の話し方とかなんだか人の心に入り込みそうな感じだし……。

「そう？けどあの千佳って子はわがままだ……よ……ふあああ………」

鼻息があらかったが………それだけ言うて黙り込む。どうやらお

ねむのようだな。

眠ってしまったその横顔を眺めながら、ふと思う。

「漆もおもったよりわがままっばいけどなあ……ま、その点、久遠は大丈夫みたいだけど」

「ふふ、どうでしょう？意外とわがままかもしれませんよ？」

不敵に笑う久遠だったが大丈夫、俺はお前がわがままっこじやないって知ってるさ。お前がわがままってならあんな真っ白な部屋から出てお外で大暴れしていただろうし。

「んっ……」

夜中、目を覚ました。寝苦しいのだ……。

また漆が上に乗っているのかと思ったのだが……

「ぐ、ぐがあっ」

そんないびき？いや、寝言か？それとも、腹の音？……まあ、とりあえず奇妙な音を出しながらベッドの上で眠っているし、久遠もその隣で静かに眠っていた。

実際、胸をまさぐってみたが二人のそれとは比較にならないほど小さい、ていうか、ない？男か？と、それなら誰だと考えてみたが泥棒以外のなんでもないな……と、そこで気がついた。いや、よく考えてみたら男が俺のからだの上に乗ってるって想像もしたくないぞ。顔だつてまっくらで見えないし………？

電気が消えているのだ。

漆が怖がるという理由で電気を消していないのだが、珍しく消えていた。消した覚えはないし、事情を知っている久遠が消したわけでもないだろう。

上に乗っかっているやつを起こさないようにして立ち上がり、電気をつける。

「ん？んっ……」

「つて、由佳か……」

まぶしそうに目をこすりながら由佳がこちらを見ていた。ああ、
そういえば由佳って胸ないからな……ぺたんこだ、かわいそうにな
………。そういや、こいつにラブレターを出してきたやつってぺたん
娘が大好きだつていつてたなあ………。

ふと、時計をみる………。時刻は深夜二時半。

「つたく、驚かしやがって………。上に乗るなよ、重いから」

「………んう」

それだけ言つてその場でまた眠る。どうやら、寝ぼけているだけ
のようだな。まったく、人騒がせな………。それだけ心の中で呟いてす
ぐに俺は電気をひとつだけにしてから由佳の隣に寝転がったのだっ
た。

「ちよつと！お兄ちゃん！」

叫び声が聞こえ、あわてて身を起こす。つて、誰かが部屋に入っ
た時点で目を覚まさないといけねえよな、俺。こんなんじゃ寝首を
かかれてやられちまうよ！

「何だ？どうした？泥棒か！？よし、俺にまかせろ！」

寝ている間に誰かが室内に入ってきてしまうという失態をやつち
まったがすでに身体は臨戦態勢。自慢じゃないがナイフを持ってい
るとしてもそんなじゃそこらの大人より俺は強いぞ。

「ちぐあうわよ！何で由佳がいるのよ！？」

ちぐあうわよ………。だつてさ………。なんだか、元気だな。朝っぱらか
ら。

「ああ？そりゃあ、ここは千佳の家であり、俺の家でもあり、そし
て由佳の家でもあるだろ？由佳がいるのは当然だろ？」

隣の家に千佳が寝ていたらそれこそ驚くだろうに。

「そんなことじゃないわよ！なんでおにいちちゃんの部屋で、しかも
おにいちちゃんの隣で由佳が寝てるのよ！？昨日はあたしの隣のベッ
ドで寝たつておもつたのに！」

「はあ？俺が知るかよ…… 由佳に聞けよ」
「本当に？」

おにいちゃんが連れてったんじゃないんでしょうね？と、その目はあからさまに怪しんでいた。

「俺が由佳を連れて行ってどうするんだよ？」

「……まあ、嘘は言つてないようだけど…… ちょっと、由佳」
ゆっさゆっさとシャツだけの由佳をゆすって起こす。朝に起こされると、寝起きがいまいちな由佳はものすごく怖い視線を姉に向けて送っていた。ああ、久しぶりに起きた顔をみたなあ…… 怖い。

「……ソレイジョウユスツラツルスワヨ？」

「え？」

今なんだかとても怖い声が聞こえたような…… 千佳も目を白黒させてるし。

「……何、千佳？」

よかった、空耳だ。

「何でおにいちゃんの隣にいるのよ？」

「……ん？」

シャツは、気がついたら俺のを着ていてしかも、近くに自分のパジャマ、パンツが落ちているのに気がつく由佳。

「……間違えた」

「そうだなあ、うん、今のお前、いろいろと間違えてるって俺思う」

「は？はあ？間違えた？」

「……うん」

そういつて立ち上がる。

「おい、こら由佳…… パンツははけよ、かぜひくぞ」
「うん」

拾ってその場ではき始める。

「ちよっと、お兄ちゃんは見ないで！エッチ！」

千佳が顔を真っ赤にして俺を睨みつける。そして、俺は首をかしげた。

「エッチ？何で？」

ぱしんっ！

「このエロ兄貴！」

「……………ぱんっ」

そういつて由佳を引きずって俺の部屋を出て行く千佳。

「やれやれ、まったくわがままなんだからなあ……………なあにが、エロ兄貴だ！」

当然のように俺は憤慨する。妹の裸をみて何か想像するわけないだろ？

「……………んっ？どうしたの輝？」

「なんでもない」

まったく、そういうのは……………ほら、もう、つつこんでくれっていわんばかりのだばだばTシャツで肩が露出していてもう生足も拝みまくりの漆とかそんな漆の足を抱きしめている久遠の……………その、寝起きの姿を見たときに言われるせりふだっつうの！

朝食をいつものように作っていると着替えた千佳が一番先に現れる。目つきが鋭いのは親父似なのだろうか……………

「スケベ」

「はぁ？」

「べっつにい」

千佳は俺を見てそんなことを言っていた。

「あのなあ？妹の全裸見て喜ぶ男がどこにいるんだ？」

「ここに」

「……………お前、男じゃないだろ？もしかして……………だが、禁断の姉妹愛……………か？」

ちよ、ちよっとそれはどうかと思うんだが……………

「違うわよっ！！あたしじゃなくて、お兄ちゃんのことー！」

ぎゃーぎゃー騒いで朝から元気なこつて……叫び声がお隣の奥さんとかにきこえなけりやいいんだけどなあ、まったく。

「……おはよう、輝」

「ああ、おはよう漆」

「なっ……」

さつきと変わらずＴシャツ一枚の格好……おいおい、下はどうしたんだよ……。

目のやり場に困ってしまうが、なんだかそんな漆に敬礼をしたくなった。ああ、まあ、だぶだぶのＴシャツだから下は見えてないぞ。おっと、敬礼するのを忘れないようにしないと。

「スケベ」

「そうそう、そういったときに使う言葉だろ？おかしいぞ、千佳」
きちんと千佳がそんなことを言うてくれたのでよかったよかった。

食いつくように見ていたのを漆にばれずに俺は再び料理に戻ったのだった。

「おはようございます、輝さん、千佳ちゃん」

「ああ、おはよう」

「……」

「ほら、千佳、挨拶」

「……おはよう」

ぶすつとした様子でそういう千佳。

うんうん、ちゃんとパジャマ（ふりふりの服）を着ているがこれもまた、見事なもので敬礼をしたくなるな。

「スケベ」

「そうそう、突込みがうまくなくてきてるぞ、千佳。お前の未来は明るい」

「お兄ちゃんはおあたしの未来の何を知ってるのよ？」

さあ？

「……おはよう、兄さん、久遠さん、姉さん……膝さん」

「私は漆よ」

ナイスボケ、ありがとう由佳。

「スケベ」

「何が？」

「どうみてもおかしいじゃない！」

「？」

「ほら、何で由佳が兄さんのＴシャツを着てて肩が露出しているとか……ぶ、ブラの紐とか見えてるし」

「ああ、本当だな……こら由佳……ちゃんと顔を洗って目を覚まして来い。お前、そんなに胸ないからブラジャーなんて要らないだろ？」

「違うでしょ！」

突っ込んでくるが、俺の考えを超えているのでもはや何に突っ込まれているのかわからなくなってきた。

「何が違うんだ？」

「ああっ、もうっ！！」

そついうと、自分の胸の下で上組みをする。

「どう？」

「どうって何が？」

「……」

さらに胸がせりあがるように腕を組むがわからない。けど、顔を真っ赤にしているところを見ると……

「さてはお前、熱だな？」

「はあ？」

「きつと、由佳みたいにシャツ一枚で寝ちまったんだな？まったく相変わらず子供なんだから……ほら、お前は寝てろ。ちゃんとおかゆ作って持ってくるから」

「違うわよ！」

両腕を振り回して否定している千佳……やれやれ、わがままさんめ！

「違うない、まったくお前は強情なんだからな……」

俺はさっさと千佳を抱き上げて部屋に連れて行き、ベッドに寝かせる。

「ちょ、ちよっと!」

ぱぱっと濡れタオルを準備してきて頭に載せる。

「今日はゆっくり寝てろ……いいか? 身体の具合が悪いつて言うのにまた無理して起きてきたら……力づくでもお前を寝かせるからな」

「……わ、わかったわよ」

そういつて静かに布団を頭からかぶったのだった。

「ほら、あーんっ」

「じ、自分でできるわよ。恥ずかしい」

「馬鹿、いいからさっさと口を開ける」

「……あーんっ」

おかゆを口に運んでいると隣に座っていた漆も口を開けていた。

「あーんっ」

「……お前は病人じゃないだろ?」

「病気だよ!」

「病名は?」

「仮病」

「………」

まったく、こんな知識をテレビから得てくるんだから大変だ……。

「輝さん、そろそろお昼にしませんか?」

「そうだなあ……ほれ、あーんっ」

「あーんっ」

まるで小鳥みたいだなあと千佳を見ながらおもったが……そうだな、お昼は焼き鳥を買ってこようか。

「……兄さん、今日は昼から雨が振るつていつてた」

「そうか、それなら洗濯物を入れないとな……最後、あーんっ」

「あーんっ……って、由佳! 何でケータイをあたしに向けてるのよ!」

「……記念」

何の記念だろうか？前もこんな風に食べさせたような気がするんだが？

「よし、じゃあ昼にするか……」

「輝、雨が降ってきたわよ！」

「大変！輝さんは座っててください」

「……パンツが！」

あわてて俺以外が洗濯物を入れ込むために外に出て行ったのだっ
た。

「さてと、じゃあ俺はもう行くからな。ちゃんと寝とけよ？」

「……わかったわよ」

おとなしくそういったのでよかったよかった……

ぴんぽーん♪」

さらに、忙しいのに人が来たようで……俺は急いで玄関へと向か
ったのだった。

第十一話：「タイトルが長かったので今回もまた入りませんでした」(後書き)

ちいっと、あれな話ですが…… 某作者の方がとらドラなるゲームにはまっていると聞きまして、とらドラを見たことも聞いたこともなかった雨月としてはなんとなく、興味を持って動画サイトにてとらドラを第一話から最終話まで見ました…… 感動した、めっちゃ感動した！感動してたら小説の更新が遅くなっちゃいました…… それで、近くのゲーム屋にとらドラのゲームを買うべく向かったのですが…… 売り切れ。ちなみに雨月が足を運んだ店舗数、11件。どこも品切れ状態だったのでした。というか、前回の更新から一日しかたっていないからなのか、それともそんなにこの小説人気なのか…… まったく、感想かいてくれる人がひとりなんて…… ぐすん、へこむ。獄潰しもあれだったし…… って、この程度じゃへこみませんけど！だって、以前書いた小説で一ヶ月ばかりへこんだ酷評あったから！さて、気を取り直して前回のクイズの答え！答えは相手の声をきくためでした！この後書きのシリーズおもしろいので続けたまえとかそういう上から目線の感想でもいいんで誰か、誰か俺に感想をおおお！！！下さいっ！！(心の中で、土下座)

第十二話：「今回も……………その、長すぎで……………いいわけじゃありませんよ？」

前回の反省：適当な企画を垂れ流した結果、総スルーを喰らった上に読者の皆様から『おいおい、前書きに毎回毎回駄文を書くなよ…

……………本編、読むのにもうワンクリック必要だろう？』と思われるに違いないと信じている今日この頃。あ、ちなみに今回は気合をこめて取り掛かりました。よろしければ、評価なんかよろしくお願ひしたいと思います。

第十二話：「今回も……その、長すぎで……いいわけじゃありませんよ?」

第十二話：

「あの夕陽に向かって走っているまるで一昔前のスポーツ漫画の登場人物っぽい人の足にスライディングを決めてころばせたい」

玄関に立っていたのはお隣の奥さん、身長二メートル、体重は三桁に達するかという……ががちの化け物みたいな人じゃない。身長推定一メートル六十センチ、体重四十一ぐらい……という感じの人だ。一言付け加えるならフレームレスの眼鏡がよく似合っている。

「あら、輝君じゃない?お母さんは?」

「いませんよ」

いつもこの人は俺の母さんに用事があってくるのだが残念ながら母さんとあったことは数える程度しかないそうだ。

「そう、それならこれを渡しておいてくれないかしら?」

「わかりました」

いつものとおり、ダンボールを受け取る。これを空き部屋のひとつである母さんの部屋においておけばミッション完了である。

「そうだ、ちよつと腕相撲していく?」

怪しく光る隣人の人妻……なんだかエロい題名だな。

そういえば、この奥さんはめっちゃくちゃ強いといわれていて下着を盗んだ人を踏んじまってぼこぼこにして警察に突き出したというわさを聞く。黒帯とか持っている人が暴力を働けば銃刀法違反になるそうだが……それ以上だといううわさを聞いた。まあ、あくまでうわさだし、どう見ても俺より身体の線は細い。

「いいですよ?勝ったら何かくれますか?」

「わ・た・しの唇」

「いりません」

「即答？悲しいわあ……」

「ちよつと漆？」

「何？」

近くを通りかかった……（なぜか頭に俺のトランクスをかぶっている）……漆をよんでレフェリーを頼む。

「輝、女の人に腕相撲なんて……」

「いいからいいから」

「……レディ」

俺と奥さんの視線が交差し、彼女は勝利を確信したような顔をしていた。

「GO！」

「ふんぬばあつー!!」

「えいつー!!」

「ごきつ」

「いつてえ！」

俺はあわてて腕をはずしてさする。

「つ、つええ……」

「ふふ」毎日毎日身体を鍛えてる割にはひ弱ねえ……その程度テクニクじゃおばさん、満足できないわ」

テクニクも何も腕相撲は純粹に力と力のぶつかりあいじゃないのだからか？そうおもったし、実力を惜しみなく出した……。

「……輝、ちよつと変わって」

「おいおい、漆……」

龍が人間に全力出したら大変だろうが？といおうとして目の前には隣人の奥さんがいるので控えようと思ったのだが漆が口を引きつらせながら笑う。

「大丈夫、相手にとって不足ないから」

「……まさか……」

奥さんは首をばきばきと鳴らした後に手をぐー、ぱー、ぐー、ぱー、を繰り返す。その間も手からはごきごき、べきべきという音が聞こえてきて……気のせいだろうかとおもっほどの闘気をまとっていた。

「……輝君、レフェリーを頼むわ……」

「え、ええ……」

両者が軽く腕をつかみ、俺は重ねあっているその手の上にさらに手を乗せる。

「……3、2、1……」

「ぐくり……」

「……」

「GO!」

その瞬間、俺の右手は跳ね上げられて俺の身体もものすごい風を感じた。

「う、うおおお!?!」

あわてて両手を顔の目の前でクロスさせて防御姿勢。足は思い切り踏ん張って全力をもって吹き飛ばされないようにしながらも二人の戦いを目に刻もうとする。

「くぬぬぬ……」

「な、なかなかやるじゃない? わたしもちよつと年かしら?」

組み合った手からなんだかものすごい力を感じる……ばちばちとか音、してるしさ……なんだか、腕相撲にものすごい無駄な労力を使っているようにしか俺の目には見えなかった。

「く、くっはっ!」

「もらったあっ!」

だん!……という音が聞こえて下駄箱に穴が開く。

「はあ……はあ……」

「所詮はまだまだ小娘ね、わたしでよかったら何度でも相手してあげるわよ、お譲ちゃん……」ところで、この子は輝君の彼女? すごいわねえ、こんな子を手ごまにするなんて」

「してませんし、漆は彼女じゃないですよ」

「何々？どうしたの輝さん？」

おくからものすごい音を聞いて気になったのかタオルをたたみながら久遠がやってきた。

「……あ、輝さん……この人は！？」

「え？ああ、隣の奥さん」

「……あら、そっちの子とも一度やっておきたいわね……」

妖艶に笑う人妻、獲物に狙いを定めたように彼女は蛇のように鋭く久遠を眺めていた。

「久遠、悪いが俺たち二人の敵をとってくれ」

「……っ、強かった……」

そして、俺は漆の肩を抱いて下がる。

「え？よ、よくはわかりませんが……何をすれば？」

「「腕相撲」」「」

「は？」

「よもや、輝君がいつの間にかここまで変わった子達を手ごまにしていたなんてねえ……」

「してません」

「こんな純情そうな子まで輝君の毒牙にかかったのね？」

「かけてません。そんな話、関係ないですから準備、いいんですか？」

そういうと心外そうに奥さんは俺を見ていた。

「あらら、それはちょっと違うわ。なんにせよ、大切な人をおもいながら闘えばものすごい力を発揮するもの……あなた、久遠ちゃんだっけ？」

「はい？」

「あなたの大切な人を思い浮かべてやってみてね」

「は、はいっ！」

垂れ目っばい久遠の瞳がずっと引き締まり、俺は彼女たちの組み

合った手の上に自分の手を乗せる。

「3、2、1……」

「……」

「……」

両者のにらみ合い、まだ彼女たちの手には力が入っていないがものすごい重圧を俺が受けていたりする。ものすごく、居心地の悪い家だな……。

「GO!」

「えいっ!!」

「ぬっ!!」

ごっ!!という音がして俺が吹き飛ばないように支えていた漆が声を上げる。

「こ、これってなにっ!?!」

「し、しらねえっ!!」

先ほどの1、5倍の圧力を感じて俺と漆は戦う二人を見守ることにした。

「……くっ!!」

「な、なかなか……か、やるわねえ……散っていった輝と漆ちゃんの敵とり……あ、あなたなんか……」

実に楽しそうに奥さんは嗤っていた。そして、久遠の瞳には真剣という文字が浮き彫りになっているようでいつもと迫力が違う。

「わたしはっ……わたしは絶対に負けません!負けてしまった輝さん、漆さんの敵をとって見せますからっ!!見ててください、輝さんっ!!」

そう叫び、光がその手からほとばしる。

「な、なんて力なの!?!」

どんっ!!

そんな音を残して下駄箱は音をたてずに粉碎。こんな現象がある

のか……というぐらいに粉末状になって玄関に散ったのだった。

「や、やりましたよ輝さんっ！」

そんなにうれしいのか俺を抱きしめてぴょんぴょんとジャンプしている久遠。

「あ、ああ……やったな……」

「完敗よ、久遠ちゃん……」

そういつて右手を差し出す奥さん……

「はいっ！ありがとうございます……いたたたっ！！」

右手をつかんだ瞬間ににこやかに握力勝負を始める奥さん、年齢不詳……見た目は二十代。

「あなたは子どもですか？」

「子どもお？」

そういつて左手で俺の左手をつかむ奥さん。

「ぐあああああつ！？」

まるで万力……俺の左手がものすごい音をたてる。

「子どもはこんなに握力強くないわよ」

「「いたいたっ！！」」

俺と久遠は奥さんが許してくれるまで苦しみ続けたのであった。

「……となりの奥さん、恐るべしっ！！」

「う、漆っ！何勝手に閉めてるんだよおっ！！」

ちなみに、後に俺はもつとすごい出会いをすることになるということだけを付け加えておこう。

第十二話：「今回も……………その、長すぎで……………いいわけじゃありませんよ？」

さて、雨月の作品の中には途中から空中分解が始まって結末が様々なものにばらけるというものが少数ですがあります。これは、せっかくキャラを登場させているのだから全員が幸せになってほしいという意図の下に考え出したものです。いまだキャラが立っていない部分が多々ありますが、よろしければどのキャラがお気に入りか教えてもらえると幸いです。

漆編：崩壊を招く、ひとつの存在。（前書き）

さて、今回から漆編始まりました……初っ端でいいですが、どんな結末でも、許していただけたら嬉しいなあって思っています。甘い期待ですけどね。

漆編：崩壊を招く、ひとつの存在。

龍と書いてドラゴンと読む　　〵龍が空を泳ぐ時〵

漆編：崩壊を招く、ひとつの存在。

それが唐突に……というか、起こる事は前々からわかっていたことなのだが漆が下に住んでいた、否、潜んでいたあの建物の取り壊しが今日から行われていた。

騒々しい音を聞きつけて俺と漆はあの場所へとやってきていたが、いつかやってきたみたいにそこはもう静寂とは無縁であって重機が動く音、建物を穿っていく音、重機を指揮する人たちの声しか聞こえていない。

建設業者の人たちはいつも市長さんが雇っているところの者たちではないようだったが、その動きには無駄がなく、俺らが近寄ってきているのを知ると急いでは知ってきていったのだった。

「君たち、危ないからここから中に入らないでね？」

「あ、はい！ほら、漆……………」

注意されたところでとくに立ち入り禁止の線を越えていたことによつやく気がついて俺はまるで根の生えたかのような漆を引つ張つて線を越える。通行人たちがなんとなく、興味を持っていたようだった。だがすぐにその場を去って行った。

中には、

「ああ、あのお化け屋敷って今日壊されてるんだ？」

「そだね、もう忍び込めなくなるねえ」

「結局、うなり声の正体は何なのかわからずじまいだし」

「そうそう、あ、そういえば……………」

そんな声も聞こえた。

まあ、あの建物がまだ現存していたとしても、うなり声を上げて

いたと思われる謎のお化けは俺の目の前に立って崩壊を目にしている……。

「……………」

「漆……………」

崩れ行く元我が家を眺めながら漆は何を思っているのか、ここからは窺い知れない。だけど、俺だったらここまで成長してきた家が目の前で壊される……………そんなことされたのなら少なからずショックを受けると思っただ。

「漆、ソフトクリームおごってやるぞ」

「……………いい、要らない」

そりゃそうだよな、ソフトクリームで我が家の埋め合わせなんてできるはずがない。俺はそれを十分理解していたというか、ちよつとでも埋め合わせができればよかったなあとは思っただが、どうやらちよつとさえも無駄だったようだ。

その後、漆はほぼ半日の間そこでばーっとその建物が原型をとどめず、もはや土と瓦礫に扮する様をその目に焼き付けていたのだった。

「……………もう、跡形もなくなっただね」

立ち入り禁止の線が解かれた後、俺たちは瓦礫の手前に立っていた。いや、立っていたのは俺だけで漆は座って、瓦礫をひとつ拾い上げてそれを凝視していた。

そんな漆の後姿を見ていたからか、漆の返事に変な間を空けてしまっていたことに気がつく。

「そうだな……………」

「まるで、龍に蹴散らされた後みたい」

遅れ目の返事を意に介すこともなく漆はため息をついてそんなことをつぶやいた。

「……………この家さ、私が壊そうって思ってたのにな」

「……………はあ？」

漆の声からは無常とも言つべき落胆の響を感じることができが、

その感じと言葉とはつながりようが有りそうではなかった。

「だってさ、この家のせいで私はあの地下に閉じ込められてたんだよ？」

憤慨、ここに極まる！そういった顔をしていて哀愁を漂わせるような表情は微塵もしていない。

「それで、輝に助けられたって言うか、外に連れ出されて……いろいろな人に出会って、いかに自分を捕らえていたこの建物が憎い物が判った」

あゝもうっ！とその後言ってひとつの瓦礫を手にとった。そのままどこかにぶん投げるのかと思ったのだが漆はそれを両手で包み、なんとなくだが、愛おしそうに……見ている気がしたのだ。

「……けどさ、確かにこれまで自分を閉じ込めていた場所。自由を、世界を教えてくれなかった存在だったんだけどね……ここに私が閉じ込められていなかったら私は輝と出会えていなかった、輝に名前を、そう、漆って名前を貰っていなかった確信があるんだ」

「……そうかあ？別に俺はそう思わないけどなあ……」

漆が自由だったのなら、俺は彼女とどこかで会うことができただろう……まあ、多分というか、漆という名前ではなかったことは確かだろうが。

「考え方の違いだよ……輝はこの建物がなければ別の場所で、別の名前で私に会っていたと思うけど、私はそうは思わない。私は漆のままで輝に会えて嬉しいから……それにさ、もしもなんて話は存在しないんだよ」

「確かにそうだけど……」

座ったままで瓦礫を軽く投げてから漆は立ち上がった。長めのスカートだったからか、スカートのすそ部分をぱっぱとたたいてこつちを向いた。その表情はいつものものだった。

「行こう？もう何もないから」

俺の横を通り過ぎて俺は再び元建物の跡を眺める。

「瓦礫と土ならあるけどな？」

俺も漆にならって背を見せる。

「……それと、思い出もね」

「何か言ったか？」

「じゃあ、何て聞こえた？」

「さあ？わからねえから聞いてるんじゃないの？」

「そうだね……」

歩きながら夕焼けの空を見上げて漆は言った。

「……判らないから輝の隣にいるんだよ」

その言葉が俺には理解できなかった。

漆編：崩壊を招く、ひとつの存在。（後書き）

さて、今回の問題は………ううん、そうだ！龍の角って何が元だかわかりますか？って、難しいですね………ううん、直江兼次が掲げていたというか、何を兜に掲げていたでしょう？

たまには登場人物紹介ってやりたい……………か？（前書き）

先には進みませんよ？ええ、だってたまには休息を……………いえ、別にいいわけじゃないんですよ？このまま漆編の続きをするか、それとも久遠編をはじめるか……………黒か白か、悩めますな。

たまには登場人物紹介ってやりたい……か？

龍と書いてドラゴンと呼ぶ　　龍が空を泳ぐ時

・黒河輝：黒き龍、漆と出会う。

後に自分が黒河家の実子ではないということを知ったのだが、父親が実子同然のような扱いをしているために黒河家を出るようなことはなかった。

しかし、双子の妹、千佳と由佳にはそのことを切り出せずにいる。漆とであつた後に忍び込んだ豪邸にて白き龍である久遠に出会う。漆、久遠と生活しているので彼女たち二人のことが気になるときがあるのだが、どちらか片方と話ばかりしているともう片方に対して申し訳ないと思ってしまうためにどっちつかずというはさまれた状況に陥っている。

スケベなくせに臆病なので漆一人だったときはしょっちゅう胸ばかり見ていたが久遠や双子が来た後はあまり意識できなくなっている。その割には漆や久遠が薄着だったりすると両方共をじーとみているが妹たちが似たようなことをしても通常の反応しかない。妹たちをまったく意識していないため、無断で妹の部屋に入って下着を物色したりする。とりあえず、エロい。予断だが、漆がやってきたその日に嫌われないように一生懸命溜め込んだエロ本を泣く泣く自らの手で燃やしてしまったというエピソードがある。

・黒河漆：輝の自宅付近にある空き家の下にいた黒い龍。

名前を輝から貰い、輝の父が養子として黒河家に迎え入れた。

輝に主に感謝しており、名前をつけてくれたことにたいしての感謝と友人となった輝のことを心から信頼している。

元から暗がりになっていたためか、それがトラウマとなったようで暗い場所が苦手である。

性格は基本的に自分を中心。

たまにそのときの感情によって違うことをやったり、したりしたりする。

何かしらの興味をもたない限り、初対面の相手に対してはあまり反応を示さない。

落ち込むと黒い霧のようなものが身体から噴出してきてあたりを包んでしまう。輝の妹、千佳のことを嫌ってはいるのだがどこか通じるものを感じているらしい。はじめ、久遠のことには興味を示さなかったが輝と話しているところを見て何かしらの興味を示した。まれに間違った考えを素直に信じてしまうことが多く、テレビなどの影響を受けやすい。

最上久遠：輝が佐原とともに忍び込んだ屋敷の地下室にいた白い龍生まれた当初から下半身と白蛇のような龍の尻尾がくっついていてような状態だった。

そのまま家にこもって生活をしたために一般的な常識、考えなどは漆と違ってちゃんとある。

このような状態で生まれてきた自分を精一杯愛してくれた両親を深く愛していて、そんな両親と抱きしめあうという夢をかなえてくれた輝に対して感謝の気持ちを持っている。常識などはしっているが、なにぶん友達などが少ないために今のところ友達といえるのは輝、漆、千佳と由佳である。由佳は久遠のことを気に入っているためか、よく一緒にいるところをみることができる。

佐原太郎：脇役。実はものすごい人物である。

黒河千佳：輝、漆の義理の妹に当たる、双子の一人。

由佳とは双子だが考え方や性格が違うのだが仲がいい。

学校のほうではめちゃくちやもてるが、輝いわくそれは外面がいいだけらしい。

自己中心的な性格で輝のことをよくこき使うのだが兄に憧れを持つ

ている。プライドが高いために素直にありがとうなどがいえなくて
実は葛藤していたりする。過去一度、恐い思いをしたために男性に
少し嫌悪感を抱いている。最近、漆がいるために輝にいろいろと愚
痴を聞いたりしてもらえなくなったのでストレスがたまる一方だそ
うである。

黒河由佳：輝、漆の妹に当たる、双子の一人。

千佳とは双子なのだが物の捉え方や意見が合わないときもあるが仲
がいい。

学校のほうでは主に年上からもてるそうである。

控えめな性格だが輝をこきつかうのが好きらしく、たまに手伝った
りするがなれていないのか逆に足手まといになることがあってそれ
を苦悩するという珍しいこともある。過去一度、恐い思いをしたた
めに男が少しばかり嫌いになっている。最近、姉のような久遠がい
てくれてうれしいと思っていて輝とはまた別に甘えられるためにこ
の生活を楽しんでいるようである。

隣の奥さん：隣に住んでいる奥さん。

ご町内のうわさ好きの奥さんの話によるとその奥さんの下着を盗
もうとした泥棒を引きずり込んで、そのまま泥棒は行方不明となっ
たらしい。

その後、頭にブリーフをかぶった記憶喪失の男が隣町で保護された
という話が一時期話題をよんだ。

その隣の奥さんは音速を超えるか、超えないかという程度の速さを
出したり右手で電柱を粉砕することができる。

何か特殊な人間なのか、手から怪光線を発射したり半径一キロメー
トル内の人間の数や建物の数……はたまた頭の中に地図を作成する
ことができるらしい。

実は人間じゃなく龍だ、という話もあるがそれに対していやいや、
サイボークであるという意見もある。

謎の多い婦人だがとにかく、怒らせると核のスイッチみたいに危険な存在であるといわれていて彼女が怒ると口から火を噴いたり、身体からでてくる白き、高貴なオーラは軽く鉄を融解させる事が可能である。

包丁を握ってその気になれば十キロにわたってまな板ごと大地を切断し、怒ってしまった彼女の咆哮は長さにして北海道から沖縄まで聞こえるほどだそうである。

彼女が怒る前兆としていきなり雨が降ってきて暗雲が立ち込めた後に大雨が降るそうだ。

余談だが、一週間前に夫が浮気をしているという情報をつかんだためにその真意を確かめた。その後、夫は満身創痍で病院から自宅へと恐る恐る帰ってきたという話が今、ご町内でうわさの種となっている。そんな隣の奥さんが最近こっているものは腕相撲で、二の腕のお肉を落としたらしい……それで久遠との腕相撲の末に敗北を喫したが輝に彼女候補ができたようでうれしいようだ。

久遠編：道なき道を（前書き）

さあさあさあ！続けて漆編を更新しようかとも思いましたがやはり、漆と並んで双壁となる久遠編を更新することにしました！おっと、そういえば物凄いことを聞きました。後書きでやっていた意味不明な問題よりもさらに一部の人たちにとっては問題のある事件………ご存知の方もいるでしょうが、気になる方は後書きにて！では、久遠編スタート！

久遠編：道なき道を

久遠編：道なき道を

「あ、はい……」

久遠に電話が来てかれこれ三十分が経っていた。内容が気になる俺と漆は久遠にばれないようにリビングからこっそりと覗き見を行っている。

「どうだ？」

「……わかんない」

しかし、電話が置かれているところまで五メートルほどあるため相手の声が受話器からは聞こえてこない。つまり、ここからではさっぱりわからないのでやっていることは無駄であるということが誰にでもわかる。

現に、千佳と由佳は俺たち二人をみてため息をついていたりした。

「わからないだろうから……これ、秘密道具」

漆に手渡されたものをまじまじと眺める。

「……糸電話……だな？」

「隊長殿、今から私が目標に接近して……じかに内容を基地に届けます！ 屍になったならば、エアーズロックからばらまいてほしいであります！ では、行って来ます！」

その作戦自体、というかしやべり方自体がおかしいような気がしたが、漆本人は別段おかしいとおもっていないようで敬礼をした後に匍匐前進。そして、漆は……スカートなので俺もついでに匍匐前進をしようとしたところで久遠が受話器を置いてしまった。いろいろな意味で情報収集は終わりを告げてしまったのである。

「……お二人とも、何をしていますか？」

こっちに歩いてこようとしていた久遠が首をかしげている……漆は匍匐前進、俺は四つんばい。

「え、えつと……ちよつとゴキブリごつこをしようかと……」

「はあ、なるほど……それで、輝さんは？」

「いまいち納得しているのかしていないのかわからない返事をしてからこちらを見やる。その目を完全に信頼させるにはどうしたらいいか、考えてみる。」

「お、俺は……」

「ど、どうしようか？突く練習です！とか言ったら確実に引かれる！ここは奥義をつかうしかない！」

「ば、ばぶう！僕ちゃん、赤ちゃんでしゅ！」

「……」

「……あ、あはは……」

視線が……視線がこんなに痛い日があるなんて思ってもみなかった。

「輝あ、何か食べるものがほしいよ」

ソファアを一人で占領しながらおっさんみたいにテレビを見ている漆がそんなことをいきなり言い出した。

「はあ？夕飯食べたじゃんかよ？」

「……ヨーグルトが食べたい」

俺の言葉も無視して自分の考えをぶつけてくる。まったく、わがままなやつだ……俺はそんなふうにお前を育てた覚えはこれっぽっちもねえぞ！？

「……ちつ、しかたねえなあ……ほかは？同じものでいいのか？」

一人だけに買ってくるのはいろいろと不満が（主に千佳から）出てきそうなのであたりを見渡す。

「あ、それならあたしプリン」

読書をしながらそう呟く千佳に、

「……エクレア」

ひとり人生ゲームをしている由佳。

「はいはい……で、久遠は？」

「あ、わたしはついていきます。そこで決めさせてもらいますから
ああ、この子だけだな……この家で唯一ついて来てくれる子は……
しかも、今日はひとりで皿洗いまでしてくれてるし………ピン
ク色のエプロン姿が物凄く、可愛い。」

「久遠、ちょっときて？」

「はい？」

漆が久遠を呼んでなにやら耳打ちをしている。

「……ええ、わかりました」

「うん、気をつけてね？」

「？」

何かはわからなかったがとりあえず、仲がよいこつて。

「輝さん、お話したいことがあるんです」

「お話したいこと？」

コンビニの袋を引っさげて帰っている途中、隣を歩いていた久遠
が立ち止まる。もちろん、久遠が立ち止まるなら俺も必然的に立ち
止まらざるおえなくなるので歩をとめる。

「何だ？もうひとつほしかったのか？デリシャススティック？あれ、
安いからもつと買っても……」

「違います、それじゃあないんです」

「じゃ、味か？この『天獄味』が気に入らないのか？」

天国ではなく、天獄……どんな味なのだろうか？しかし、これも
また違ったようで彼女は首を振っていた。

「違います！その、とても大切な、わたしのことについてのお話で
す」

「……？」

久遠は俺の隣に立って耳に口を近づける。どきつとしてしまった
がこれはあくまでも大切な話を聞くための……え？大切な話？生ま
れてきた子どもの名前は……正宗とか？そんな感じか？た、確かに
大切な話といえば、大切な話だな……

「あの、か、身体の中から……何か、熱いものを……感じてしまうんです」

「はぁ、はぁ……そんな荒い呼吸が俺の首にかかって、変に誤解してしまう自分が恨めしい。」

「お、おいっ！だ、大丈夫なのかよ？風邪か？」

「ち、違うと思います……じ、じつは今日、電話があって、その電話が……んっ……そのわたしが、あのように生まれてきて……それで、今、このよ……はぁ……はぁ……」

その場にかくんと膝を突いて自分を抱きしめるようにして道路に横になる。

「お、おい久遠？」

「はぁ……はぁ……」

肩をつかもうとして、その手を誰か別の人につかまれる。

「まった、君がふれるとすごいことになる」

「え？」

振り向いた先には一人の女性がいた。その人は夜闇を溶かしたようなスーツに腰まで伸ばした長髪、そして、まるで西洋の龍……いや、竜のような翼を生やしていた。

それが作り物ではないと直感でわかった。ぎこちなく動くことなど一度もなく、翼膜に血を送っている血管が見え、それは彼女の背中から生えている。

「とにかく、その公園まで運ぶわよ？」

俺と久遠をつかみ、彼女はとんだ。

「え？」

眼下に広がる道路……そこにはコンビニの袋が取り残されていたのだった。

久遠編：道なき道を（後書き）

さて、重大な問題ですが……………獄つぶし 中辛既に人気がありません……………さて、冗談はそのくらいにして……………この小説呼んでいる人の中で18歳以上の方が高校の制服着てるコスプレAV、またはADVものをもっているという方、いますか？気をつけてください？もしかしたら児童ポルノ禁止法？だったか知りませんがそれが成立しちゃったら罰金を科せられる可能性がありますよ？ここでどういったものが簡単に説明しておきますと、アニメ、ゲーム……………あとは忘れました。そういったものでも、それっぽいものもっているだけでいずれ摘発されちゃったりするそうですよ？ということは、小説とかも規制されるに違いありません！ちよつと間違つて妹とかの濡れ場（ちよつと間違つてもありえない）なんて書いたりしたら罰金ものですね？つまり、ロリコンの人とかお金を搾り取られるということです……………あなおそろしや。まあ、そういった物を持っていない人はいいんですけどね。これって結構ホットな話題なんでしょうか？

漆編：黒き龍、心を知りて。（前書き）

むしむしする暑さに雨……これが梅雨ですね。じんわりとした感じの汗が下着をぬらし、無性にいらいらしてしまう……乾燥剤を部屋中にばら撒きたい心境です。

漆編：黒き龍、心を知りて。

漆編：黒き龍、心を知りて。

「時雨君、絶対に私を幸せにするって言っていたのにつー！」

「誤解だ、亜美……僕は今も君のことが好きだ」

「何よ、その嘘！私が何にも知らないって思ったら大間違い！これ、見なさいよ！」

「これは……いつこんなものを！？」

「あの女狐にあなたはだまされてるだけなの！」

「あの子のことをそんな風に言っちゃだめだ！大変なのは知ってるだろう？彼女は彼女なりに、がんばって僕らと接しようとしているんだから……ね？亜美もわかってあげてよ」

「……変わっちゃったね、時雨君……ここさ、どこだったか覚えてる？」

「え？何があった……場所だった？」

「ここ、時雨君に助けてもらった場所……ここで、ここでさよならするなんて思ってもみなかった……ばいばい、時雨君」

「あ、あぐあっ……！」

「おい、漆……お前は昼間っから何を見てるんだよ？」

「ん？『濃い時雨』って番組。今日で最終回」

エンドロールが流れる向こう側の画面に血のりがつきまくっている……うわ、めっちゃどろどろとしたドラマだよな……おいおい、これまで仲のよかったシーンが流れてるじゃねえか……見ていて心の中に後悔がふりそそがねえ？

「漆、これみて面白いかな？」

「ん？よくわかんない。友達だよな？この二人。なんでケンカなってるんだろ？」

どうやら冗談とかじゃなくて本当によくわかっていない顔で首をかしげて俺の方向を見てくる。ふむ、これは解説を入れてやったほうがよさそうだな。

「友達って言うよりもだな、それよりももっと近い関係だ。もっと、親しい関係」

「えーっと、親友？」

一生懸命考えた末に出てきた言葉なのでよしとしようが、これはこれで違うものだな。ああ、そういえば女子と男子の間に友情はあるのかどうかをよくきくのだが結局のところ終止符は打たれたのだろうか？あれってやっぱり見る側の考え方によるんだろうなあ……って、話がそれてるぞ、俺。

「違う違う。たしかに親しい存在なんだけどさっき男をぐっさあつてやったほうは刺された男の親友じゃないぞ。親友が別の友達と仲良くしているところを指摘されたぐらいであそこまで狂氣的な瞳をしないからな」

「んーそうだよねえ？それだったら私、今頃輝を刺してるもんねえ？だって、久遠や千佳、由佳と仲がいいから」

首をかしげる漆にちよつと恐れを抱きながらも俺は持論を展開することにした。

「まあ、世間一般的に言うならばあの二人は恋人だったんだ。恋人わかるか？まあ、彼らの場合だったら年齢的に見て夫婦だったんだろ？が……」

「夫婦？」

首をかしげるところをみるといまだよくわかっていないようだ。

「妻と夫だな……」

「それって、どういったことをする人なの？」

「朝起きたらおはようって言つて、どっちかが料理を作つて、お互いがお互いのことを信頼しているって感じだなあ……」

これぐらいしか俺は知識を持っていないというかこれ以上踏み込んだようなことを言ったらR指定に引っかけられて削除されかねん。

もしくは伏字となるだろう。

「夜に『ピーッ!』を『ピーッ!』して最終的には上から『ピーッ!』をするの?」

「……いや、さすがにそんなことをするとは思えないな。中にはしない夫婦もいると思うぞ、多分」

無知とは恐いことだな……何も知らずに放送禁止用語を連発するなんて……

「ふうん?じゃ、私と輝みたいな関係なんだ?」

「え?いや、それは……」

漆はうれしそうに両手を挙げて万歳なんてしているが、俺は固まっていた。漆と公式に、そんなことをしてもいい間柄だったなんて……

「だって、朝起きたらおはようっていつて輝が料理を作ってくれてお互い信頼してるもんね?」

「ン、確かに、言われて見ればそうだよなあ……」

R指定の部分を取っ払ったらこんなソフトな関係に……あくまで俺の理想像なのだがそれがすでに具現化しているといっているぞ、これは。

「じゃ、私はやっぱり輝を刺していいことだよな?」

「なぬ?」

なぜ、そうなるのだろうか?漆の顔はまるで日向ぼっこをしている猫のような感じだったがいっていることは大統領しか押せない危険なスイッチを押すか、押さないかということところだ。

「だって、久遠とか千佳とか由佳に同じようなことしてるし……」

「あゝそうだな、それはちょっと違うっていうか……」

こりゃ、いきなり夫婦とかの考え方を教えたのが間違いだったといまさら気がついた。漆が立って台所に行こうとしているのを一生懸命抑える。漆の目には何を思ったのか包丁しか映っていない。

「ああ、あれだ、俺がどうやら段階を超えすぎて間違えてしまったようだ!そういったことなら俺より隣の奥さんに聞いてきてくれっ

「!!」

「隣の奥さん？」

不思議そうに首をかしげている漆よりも先に包丁を取り上げてさつさとそれを隠す……まあ、目の前で隠したって無意味だというのはご理解いただけるだろう。

「ああ、あの人は夫がいるし、多分あの人ならさつき見たようなドラマとか見てそうだからな！きつと俺より詳しく教えてくれる」

「ん、わかった」

おとなしく従ってくれて本当に助かった……ちゃんと隠した包丁は片付けておかないと身の危険を感じる……

「じゃ、行つて来ます！」

「ああ……行つてらっしゃい」

若干の不安はあるものの、隣の奥さんなら何とかしてくれるはずだ……そう、俺は信じている。

「輝、ただいま」

俺が夕食の準備をしているところに漆が帰ってきた。

「ああ、お帰り……で、どうだった？」

「ん？え、えつと……」

照れたような顔を俺に見せた後、漆は何かを言おうとして……

「あのね、よくわからなかった」

「わからなかった？」

「うん、もうちょっと大人になってから来なさいって言われちゃった」

「ふうん？」

よくわからないな……十分漆は大人だろうに……胸だつて出てるし。

「ま、それならそれでしょうがないわな。今日はお前の好きなハンバーグだぞ」

「やった！じゃ、手洗つてくるね」

廊下を駆けてく漆の後姿を眺めて俺はなんとなくだが、思った。

漆は……漆はもしかしてまだ生まれて間もないのではないのかと

……

そして、今日から、それ以降……漆は俺の目を見て話すことはなくなつた。

漆編：黒き龍、心を知りて。（後書き）

さて、今回の話はどうか？見ての通り、漆と久遠に話が分かれていき、いずれは全く異なった終わり方をする事となります。しかし、異なる終わり方となってしまうが以前書いた小説『飛龍とかいてワイバーンと読む』から地続きとなっている今作ですが、『白河』の話もいぜんとして続きます……………では、今回の問題を出したいと思います！え？前々回の答え？知っている人のほうが多いでしょうから無視しますね……………嘘です、答えは愛ですよ？さて、今回の問題はコロンブスの卵でいきましょう？コロンブスはある楕円形の卵を見事たたせました……………さて、どうやってたたせたでしょうか？

久遠編：共に歩き（前書き）

漆編と久遠編、どっちのほうが人気あるんでしょうね？とふと思つてアクセス数を確認したところ、若干の差はありましたが久遠編のほうが人気があるようでした。ううむ、まあ、メインヒロインなんだし別にいいかなあと思いましたが、よくよく思えば双子編を投稿するのを完全に忘れていることに気がつきました。ま、まあ、いずれやるといふなんとも消極的で情けない意見ですが……とりあえずこの小説を読んで頂いてああ、時間をどぶには捨ててないと実感してもらえれば幸いかと思います。感想とかありましたらお願いします。では、今回もどうぞ！

久遠編：共に歩き

久遠編：共に歩き

久遠の身体から熱を感じる……それは彼女に触らなくてもわかるほどだった。苦悶に満ちた顔を見るたびに、久遠がうめくたびに俺の思考回路はまともな考えができない方向へと向かっていつている。そんな立ち尽くしている俺に対してここまで運んできた女性が一喝する。

「ほら、ボーっとしてないで水をかける！」

「いいのかよ！？えっ？お前、大体何者なんだよ？」

このダークスーツの人物がどういったやつなのかわからないが、いきなり久遠が倒れたということで俺は完全に混乱していた。彼女は久遠を助ける方法を知っているというのに俺は知らない。

「しっかりしなさいよ！！」

ぱんっ！！という音が聞こえ、それが自分の頬をぶたれたことだと理解し、一秒後には相手の頬を殴ろうとしている自分がいた。反撃、親父に叩き込まれていたどんな相手にも噛み付く暴力性が俺の中にはあるのかもしれない。

「あら、女性を殴ろうつていうの？」

「これは……反射神経だ……わりい」

相手は俺の手をつかんでいて、そこはすでに折れているのではないかという激痛を俺に感じさせていた。話してもらった後も、痛みは持続していたがあそこまで強く握られていたのに俺の手にはそういった痕跡が残っていなかった。

「ま、頭が冷えたみたいでいいんだけど……そのホースを使ってこの子に水かけて」

「……わかった」

もはや反対していても久遠の症状は悪化していくだけ。それなら俺がすべきことは決まっている。

「……もう大丈夫よ」

「………そっか………」

その場にしりもちをつく。地面は水をぶちまけたせいでぬれてい
るので立とうとしたが足に力が入らない。普段だったら造作もない
ことなのに、二、三歳の子だってできることが今は出来ない……。

「あなた、ひとつのことしか見えないタイプね？助けたいのに助け
る術を知らない……役立たずの道具。幅の合わないドライバーほど
不必要なものはないわ」

つまり、俺は役に立たない道具だということだ。

「………」

俺が反論するとしても、無言だ。言える言葉を持ち合わせていな
いし、言う権利もない。

「次、彼女にこんなことが起こると思わないけど……いい？あな
たの大切な人がまた似たような状況になったらあなたはひとりで何
ができる？おろおろするだけでは駄目、冷静であり続けなくては
いけないのよ」

諭され、これを認めてしまったら俺は考えることができない馬鹿
なやつと自分で認めることとなる。しかし、認めなければ俺は再び
醜態をさらしてしまった上にもしかしたら、いや、確実に久遠を失
うことになるのだろう。

俺に説教をたらした謎のお姉さんは何を思ったのか、俺の隣に同
じように座る。お尻がぬれるだろうにそんなことを気にしてはいな
かった。

「……久遠ちゃんのご両親……母方のほうはとある薬品を身体に受
けてしまっているのよ。それに気がついたのは彼女の母にあったと
き。まあ、おかげでまたこの国に帰ってこれただけだね」

「まさか……」

そういえば、久遠の両親が外国にいつてなぜこうなったのかを調
べるといつていた気がする……

「そう、わたしは久遠ちゃんを助けるためにきたのよ……ま、これは私の不手際でもあるし」

「はあ？」

「これから言うことはとてもおかしくて、馬鹿らしいこと……」

そこで言葉をきってこちらを見てくる。俺にこの話を聞きたいかどうかたずねているようだ。久遠がもう大丈夫だというのならこのまま聞いたって問題はないはず……だ。

「よろしい、少し前のことなんだけどね、私、とある組織を壊滅させたのよ……いや、壊滅させたと思ってただけで実は隠れ蓑だったんだけどね？その組織……『白河』っていうのよ」

「……！？」

ふうっとひとつため息をついて彼女は続ける。俺はその名前がここで出てくるなんて思っても見なかったわけなのだが……知ってかしらずか、彼女は俺を見ることもなくまるで独り言のようにしゃべり始めた。

「そこ、その昔龍に加護を受けていたらしくてねえ、結構栄えていたんだけど……人はいつか傲慢になるのよ。誰のおかげで栄えたのか、誰のおかげですばらしい一族を築き上げたのかももう忘れちゃっていたの。傲慢な者にそれから龍が新たに訪れることなく、気がついたら龍は姿を消していた」

悲しそうに、だがその目は憎しみに染まっている……そんな気がした。

「それで、彼らは膨大な資金を費やして自ら絶対的な存在の龍を作ろうと考えたのよ」

「はあ？」

話が変わる方向へと向かっていることに気がつく。遠くでいまだ泣いているせみの声が今の季節を夏だと俺に思い出させてくれなければこの場所が夏だとは誰も思わないほど寒かった。

「しかし、残念なことに人体実験が行われたりして失敗した連中は封印されたり息の根を止められた。私だって身体を使われたし……

私の愚弟……弟も私のために実験道具として生まれてすぐ使われたわ」

「……」

言葉も返せなかった。そんなことが本当に行われていたのか？

「その過程のなかに久遠ちゃんのお母さんも入っていたの……彼女を身ごもってすぐにとある産婦人科に行って点滴を受けたとき……ひそかにその液体が使われて妊婦にどういった影響が現れるかなんて人として最低の行為をしたのよ」

はき捨てるようにそういつて久遠を見やる。しかし、その目は優しい目をしていた。

「ま、久遠ちゃんが生まれる前に施設は崩壊、資料も焼失……挙句にそんな組織を私は一人でつぶしたわ」

笑っている……その顔は嘘を言っているような瞳じゃなかった。

ものすごく、この人は精神的にも肉体的にも強い。

「けど、まさか薬を打たれて母体に影響がなく、そして影響が子どもに行くなんて考えなかったわ……まあ、私って思えば全部を知りうる努力なんてしないし、それに考えるだけ馬鹿らしい……ああ、馬鹿らしいといえば、その昔白河は代々変な能力を受け継いでいたのよ」

「変な能力？」

ようやく俺に話しかけるような形となったのだが、これまた俺が首をかしげるような話だった。

「そう、龍を人の姿に変え、共存するという現在腐りきった白河家が求める力よ」

「……」

もう二週間ほど前のことになるのかもしれない……俺はその能力について知っているような気がしてならなかった。

久遠編：共に歩き（後書き）

お詫び：最近出した『御注文は？』パンドラの箱入り娘部隊で！
『』がタイトル偽りありとふと思ってしまいました。元はファミレスが舞台だったのでよかったですけどどうみても今回は関係ない！
後付しようにもどうしようもないので、謝ります。すいませんでした……ま、まあ……間違えることは誰にでもありますとかはいませんが、今後何かつつこめそうなところがあつたら誰か突っ込んでください。これは、マジでよろしくお願いします！

漆編：黒き龍、蒼空にて。（前書き）

結構やったなあと思ったところまだ漆編三話目……トホホと思いながらもいやいや、まだまだ終わりに近づいていないっていうことだと実感しました。おっと、最近いつていなかった言葉が……感想、評価、メッセージ……できればよろしくお願いします。

漆編：黒き龍、蒼空にて。

漆編：黒き龍、蒼空にて。

「漆、そのしょうゆをとってくれ」

「……………」

「漆？」

そろそろ夏休みも八月半ばまで進行していてせみが絶賛彼女募集
中と鳴いているある日。漆にしょうゆをとってもらべく声をかけ
たのだが反応はなかった……俺のほうをずっと見ているのだが、瞬
きをしていない。

「自分でとったら？」

千佳がそういうことを言うのでしょうがなくしょうゆに手を伸ば
すと漆がはつとした表情を見せた。まるで夢遊病患者があれ？ここ
はどこ？といった風に……まあ、一度もそんな状況に陥ったことな
んでないんだけどな。

「え？しょ、しょうゆ？」

あたふたとした時点で俺はゆっくりとしょうゆに手を伸ばしてい
た。

「もういいぞ、もう自分でとるから」

今から漆が手を伸ばせばもしかしたら俺の手と当たってその拍子
にしょうゆがひっくり返って千佳に怒られかねんから……

「ああ、い、いいて！私が取る！」

そういつて俺の指よりあとに漆の指が俺の指の上に重なる……俺
が危惧したような状態に張らなかったのでよいでしょう。

「つつつ……！？」

しかし、何が漆にそうさせるのか……漆の顔が真っ赤に染まって
さらには目を白黒させて固まる。ついでに言うならそれまで静かに
食事を取っていたほかの連中たちが何か面白いものを見つけたとい
わんばかりの顔で漆の顔を眺めていたのだった。

「？」

なぜ、そうなってしまったのかわからない俺はぼさぁと漆の顔をほかのみんなと同じように見ていたのだが漆はそんな俺と決して目を合わせようとはしなかった。

「あの、どうかしましたか？」

久遠が漆の目の前で手を上下に振ってみても漆は俺の指と当たった指をじつと眺めている。ここまで漆がぼさつとするところは見たことがない……。

「お、おい？もしかして怪我か？それで、怪我した部分に俺の指が当たったから痛いのか？」

漆の手に触ろうとしたら漆はびくつとして俺から逃げるようにして身体をそらした上に目も合わせようとはしなかった。

「べ、別に！」

拳動不審をまさに体现したかのような動きを見せた後（椅子をがたがた言わせて後ろに倒れそうになるも何とかふんばる）に漆は再び指を握っていた。

「漆、お前最近変だぞ？俺と目をあわせようとしないうし、俺が触れようとしたらものすごい体勢とってさけるし、それに……一緒に寝ないし」

ほかにも俺がトイレに行った後は最低三十分はあけるし、風呂上りの俺を決してみようとはしないし、無理に見せようとしたら噛み付いてくるし……パソコンでエッチなサイトを見ようとしたりするものすつごく、怒るし……久遠と話していたりするとすぐどよんとあのダークゾーンを形成するしさ……これまで一つ天井の下で寝てたのに久遠と一緒に千佳由佳の部屋の床で寝てるしさ……くすん、俺寂しい。

「兄さん、一緒に寝てるほうが変なのよ？」

「え？そうか？」

どこかおかしいだろうか？ずっとこれまで寝てたのになぁ……どうしちゃったんだ？まさか、新種のインフルエンザの影響か？

いろいろと考えているのは俺だけではないようで由佳も何かしら考えがあるらしい、手をぼんとたたくといった。

「……わかった、漆さんがきつと兄さんのことを嫌いになったんだ」
その瞬間、俺の脳天に時速百キロ以上の速さで雷がずどん！

「……………」

え？う、嘘だよね？お、俺のことが……俺のことが嫌いになった？は、ははっ……………そ、そんなことないよなあ……………漆？

「……べ、別に」

漆にすぐるような視線を送った俺だったが、果たして漆はそのまま走ってトイレに逃げ込んでしまったのだった……

「……え？ほ、本当に俺って……………漆に嫌われてるのかよ……………」

世界が回り、脚ががくがく震えてくる……………とてもたつてはいられない。まあ、食事中だから座ってるから安全だが。

「あの、大丈夫ですか？顔、真っ青ですよ？」

いつの間に血色が悪くなったのだろう……………夏ばてしないように今日はレバーを焼いたのに……………とにかく、久遠が心配そうにそういつてくれている気遣いを無駄にすることはできないので、俺はなんとかうなづく。あくまで、冷静に……………そう、そういえば俺は学校でクールボーイと伊達に呼ばれていない！つまり、俺がなぜ、ここまで動揺しているのかは考えないようにしてこの場をいつものようにやり過ごすのが一番だ！

「だだだだだ大丈夫だ、別にきききき、嫌われていたたたってお、俺にはかかか……………関係ねえからあ（裏声）」

千佳がため息をついているのが見て取れた。ど、どうやら何とかやり過ごせたようだ。

「……はあ、これは兄さんのほうも重症ね」

どうやら、やり過ごしてなかったようなので大人の余裕というやつを子どもに見せ付けることにする。

「べべべべべ、別に、重症なんでもねえよ？」

そついうと由佳がニヤニヤしながら……………彼女がニヤニヤしてい

るときはろくなことを言わない……俺にこういった。

「……………おにいちやんなんか大嫌い……シヨック受けた？」

そういわれても、ぜんぜんシヨックを受けない……あれ？よくよく思えば元から嫌われてるやつに嫌われたってシヨック受けないよなあ？

「……………ぜんぜん」

首をすくめてやれやれ。うわ、なんだかお仕置きしたい気持ちになってきた。

「輝さん、わたしのほうからも漆さんを説得しておきますから……何か漆さんに対して後ろめたいことがあるのなら謝っておいてください」

そういつて久遠が立ち上がり、お開きとなった感じで夕食は幕を閉じたのだった。

その日の夜空を一人で漆は見つめていた……昼間だったならば雲ひとつない蒼空が彼女を見下ろしていたに違いない。

「……………馬鹿、馬鹿輝……………」

彼女はなぜ輝のことをまともに見られなくなったのかわからない。ただ、隣の奥さんに『輝くんは漆ちゃんのことを恥ずかしいくらい大切に思ってるわよ？あなたにとってもそうでしょう？』それにうなずいてしまってから、家に帰って輝にその話ができなくなった。ほかにも教えてもらったことがあるのだが、テレビで何度でも見たことがあったことなのだがそれを実際にやってみたらうれしいような、けど確実に何かが変わる気がした。変わる……それは以前あったものが壊れてしまうことでもある。

それが漆を今の状況に追いやっているのかもしれない。

責任を追及する相手が違うような気がしたが輝のせいであるということを理由にして漆はさらに彼を罵倒する。そういえば、輝を罵倒するのは初めてのことだと思いいながらもその気持ちは治まらない。

「……馬鹿輝なんて久遠に千佳に由佳に嫌われちゃえばいいんだ！」
ひとつ、流れ星が漆の前で零れ落ちた。

漆編：黒き龍、蒼空にて。（後書き）

先日、投稿したあの小説……結局あれからひとりとして感想や評価をしてくれる人がおらず、へこみました……。以前のほうが良かった！とかそういったこともなかったんですよ。まあ、結構読んでくれた方が多かったようなので続編は考えていますけどね。結局、ここで問題を出していいこうとしたのに前回自分がどんな問題を出したのかさえわかってないし……。たまには自分の小説の問題でも出すことにしましょう。さて、これまで雨月が様々な小説を書いてきましたがその中でも第一作目の主人公の名前は何でしょう？

久遠編：一人が倒れて（前書き）

気がつけば第20部分。それと、これまでの小説の中で一度もやったことがなかったことをやってみたいと思います……………アクセス数、100突破！こんなに読んでくれるとは思いませんでした。まあ、結構前のことなんですけどね。とりあえず、この先漆と久遠はどうなるのか、そして輝はどんな結末を迎えるのか……………評価に感想、メッセージその他もろもろお願いしたいと思います。まあ、こないでしょうけど挨拶のようなものです。

久遠編：一人が倒れて

久遠編：一人が倒れて

暗がりの中、俺らは今ベンチに座っていた。俺の腕の中には久遠がいる……温かく、だけどそれが彼女が生きているという証拠にもつながるといってごく一般的なこと。生きているんだから温かい……当然のことだがそれがうれしかった。

ぎゅっと久遠を抱きしめている俺を見ることがもなく、俺の隣に座っている。

「……また、白河が動きだしたって聞いて戻ってきたわけじゃないけど……あなた、どうみても白河の血を持つてるわね？」

嘘はついても意味がない……この人相手にだが。

「ええ、俺は白河家から養子に出されました……今じゃ、黒河輝です」

「へえ、輝ねえ……漢字は違うけど私の弟もあきらって名前」

ふふっと笑うが、俺は久遠のことを聞いておきたかった。

「あの、どうして久遠はこんなことに？」

「久遠ちゃんは生まれて成長するまで……ああ、もちろん今も受けてるわよ？薬の影響を受け……あなたの力によって久遠ちゃんは人の姿に戻った……これが意味することがわかる？久遠ちゃんは姿は不完全なれど、白河が求めていた完全な龍として生まれてきたのよ」

「……」
少し変わって生まれてきたのだと思っていたのだが、改めて久遠が龍であるということを言われて少しだけ、ショックを受けていた。
どうやらそんな顔をした俺が気に喰わなかったらしく、相手は声を荒げていた。

「そんな顔をしない！あなたが久遠ちゃんを信じてあげられればあなたの知っている久遠ちゃんはずっとそのまま……馬鹿らしい話だけれどあなたが久遠ちゃんにしてあげられることは信じてあげること

だよ」

「信じるたつて……俺はその話が信じられないんだが？」

意外と馬鹿な子なのねとそういつて相手は鼻を鳴らす。

「遅かれ早かれ久遠ちゃんは狙われる……誰に？とは聞かないわよね？」

「白河？」

「甘いわね、この情報が多くのところに流れれば研究対象として彼女は狙われる……頭に叩き込んでおくこと。それと、私が知りうる範囲の中では久遠ちゃんのお母さんのデータはなかった……きつと白河本家に保管されてるってことでしょうね？すでにさまざまなところこのデータのことは知れ渡っていて今だつてそのデータを求めている連中はいるはずよ。久遠ちゃんが傷つけられてしまうのは時間の問題ね」

「……………」

俺は言葉も出なかった。

「けど、完全に久遠ちゃんが覚醒してしまえば話は別……もはや人間ではどうしようもないくらいの力を手に入れて、力の制御ができなければ暴れたす……暴れた龍を退治するのにさて、何人地獄の門をくぐらなきゃいけないのかしらね？」

どこことなく、うれしそうな微笑を俺に向けながらも何かをこの人が言おうとしていることだけわかった。ふと思ったことだがこの人が死神になったら世界は死人で一杯になるだろう。

「……俺はどうすればいい？」

「そうそう、その言葉がもうちょっと前に聞きたかつたわあ……あなたができることはひとつだけ」

懐から拳銃を取り出し、俺は少しだけびくついたがそれを俺に握らせる。

「……久遠ちゃんの母親のデータを燃やすだけでいいわ」

「それだけで？」

データを燃やすだけ、それだけで本当に久遠は狙われずにすむの

か？そういった疑問が頭に浮かぶ。

俺の不安が顔にでも出たのか知らないが、安心させるような声音で俺に話しかける。

「後のことは心配しないで？こう見えても私って意外と友達多いのよ……ま、ちよつとくせのある連中が多いんだけどね」

「その人たちも……もしかして白河の薬が原因か？」

相手はベンチから立ち上がり、俺に背を向けた。

「……久遠ちゃんを助けたければ動きなさい？そうね、明け方には行動を開始したほうがいいわ……まずは本家を目指すことね……けど、それだけで？っていったわね？ふふ、それって結構骨が折れるわよ？」

それだけ言って彼女は漆黒の夜空に翼をはためかせて俺の目の前から消えたのだった……。

「ん……」

「おきたのか……久遠？」

「え？あ、はい……」

久遠がおき、俺は立ち上がる。

「……久遠、俺についてきてほしい」

「え？ど、どこかへいくんですか？」

寝起き顔の久遠がかわいい……この顔をこれから先、ずっと見るために俺がやらなくてはいけないことがあるのを知った。久遠の母親のデータを消すだけで、それだけでいいとあの人はいつてくれたのだ。嘘は決してつかないような顔……いや、約束は絶対守るという表情だった。

「ああ、ちよつともものすごいことになりそうだけどな……」

そして俺はこの言葉を久遠に告げる。

「きつと、最高の夏休みの思い出になると思う。だから、一緒に来てくれ、久遠」

「は、はい」

少しだけ緊張している久遠の手をとって俺は歩き出したのだった。

まず探すべき人物、それはあのじーさんだ。

久遠編：一人が倒れて（後書き）

さて、前回の問題の答えは……天道寺時雨でした！ちなみに、現在の名前は天道時時雨となっています。やっぱ、寺とか名前に入るのはちょっとあれかなあと思ったために改名されたのですが……そろそろ、天道時時雨小説新作を出そうかなあと思っています。そんなこと言ったらまた愚者さんからつつこまれそうですけどね。

漆編：黒き龍、暗闇を知りて。（前書き）

最近ふと思ったことですが、他の作者の方の小説を面白いくとかいろいろと紹介できたらいいですよね？そうしたらあの小説とかあの小説を大々的に進められるんですけどね……まあ、ぐちぐちいつていても仕方ありませんがね。今回で漆編も四話目。きりが悪いですが今回で一旦漆編はオヤスミですね。久遠編も次回でオヤスミ……それじゃあ、何をするんだと？と思った方へ……見てのお楽しみということ。決して考えてないということはありませんので、安心してください。ああ、最後に……評価とか感想とか、そういったものをもらったら飛躍的に更新スピードが一時的にあがります。

漆編：黒き龍、暗闇を知りて。

漆編：黒き龍、暗闇を知りて。

いきなりすぎて俺は何が起こってしまったのかよくわからない。

漆とともに夕食の買い物に出かけた帰りに黒塗りの車が近づいてきたかと思うとあっという間に漆を車の中に入れて走り去ってしまったのだ。

「……………」

言葉も出ない俺だったが、誰かに背中をたたかれてようやく気がついた。

「バカ者！しつかりせんかつー！！」

「じ、じーさん！？」

そこには白河のじーさんがつえを持って立っていた。どうやらこの杖で叩かれたようだと思認識するまでにいつもの三倍ほど時間がたってしまったていたのだ、それだけ今の状況に俺が混乱しているということがわかりだろう。

「あれは一体なんだ？」

「白河のものじゃよ。これ以上あの黒い龍がお前と親しくなる前に始末しようと考えたんじやろうて」

始末という言葉聞いて不穏ならざるものを感じてしまっていた。

「ぼうつとするな、行くぞ」

「あ、ああ……」

まだ漆に嫌われたままだ……………あれから一度だって俺の目を見て話してくれない。俺はそのことに不満がありまくっている……………その状況で、どこの誰だか知らないが漆を連れていくなんて勝手すぎる。

どこからどう見てもじいには思えないような足の速さでじーさんは道路を突き進む。俺もその手に夕飯の材料を持ったまま走っているのだが……………

「なあ、いったいなぜこんなことが起こったんだ？」

「先日、老中会議で決定したのじゃよ」

老中会議って……江戸時代じゃあるまいし。まあ、そういった制度をとっているところを見ると白河は古い考えのものが多くと考えてしまう。

「わしだけのけものにした拳句、勝手にわしの孫を振り回す……
…いい加減、わしもあたまにきたところじゃ………輝よ、おまえは白河のものだが本家のものではない」

「はあ？」

走る途中でそんなことを言われても首を傾げるしかない。酸素を体のほうに送っているために頭のほうまで、詳しいことは考えられないのだ。

「分家筋の娘が授かった子供じゃがお前を生んで行方知らず……
よって本家の養子となったのじゃがこの前話した通り黒河のもとへと送られたというわけじゃ」

タライ回しされている感じがしないでもないというか、完全なタライ回しだろ？

「じゃ、あの時俺に嘘をついていたんだな？」

「そうじゃな、結果的にはそうなるが……お前の生みの親は案外近くにいても知れんぞ……話を続けるがおぬしの力が本物であると先日の会議で決まり、初めてお前が解き放った黒き龍、漆は依然白河が封印したもののじゃ」

あけてはいけないという扉を子どもは開けたがる……俺はそんな子どもではなかったはずだがどうやらそうだったやんちゃなことをやらかす子供らしい……。

「えっと、漆を封印から解き放って問題ないのか？世界が滅ぶとか……」

今の漆は確かにおとなしい……だが、漆がキレればどういったことが起こるのか予想がつかない……

「いや、断じてそうだったことはない。漆は人の感情がエネルギー

となつてまとまつたものに命が宿つたものじゃ」

首をかしげざる負えない。つまり、理解できない話だった。

「ともかく、あの漆が命をもつてなにがあつたかしらんがその当時人の心をめちやくちやにして暴れまわつていたのじゃよ……………もちろん、その中には白河のものも犠牲者の対象に入つていたし、そういうことがあつたそれ以降、黒き龍は白河ではご法度となつたのじゃ」

「……………」

過去のことはもはやどうでもいい……………今の事実としては漆が連れさらわれてしまったということだ……………。

駅前までやつてくるとじーさんはここから三駅離れた所の切符を買つていた。

「じーさん、そこに漆はいるのか？」

「ああ、たぶんな……………孫のフィアンセを誘拐する無粋な輩を成敗するしかないじゃろうて」

「いや、フィアンセって……………」

俺も同じようにして切符を買つて電車が来るのを待つ。

「……………輝、ひとつ面白い話をしてやろう」

「なんだ？」

じーさんはこちらを見ることもなく対岸の駅のベンチに座つているのしと思われる人のスカートの中を覗こうとしていた。

「その輝という名前自体、実は過去の白河頂点に立つ者の名前なんじゃよ」

「へ、へえ」

昔の、しかもいつの時代かもわからない人の名前を俺につけたといつてももはや俺には関係のない話だろう。

「その時は中睦まじく人と龍が共存していたそうじゃ、じゃが、輝が死ぬと同時にこれまで欲望を押さえ込まれていた他の白河は龍であろうとか商業目的に使用したと聞く……………じゃが、龍はやさしく、ある程度までは我慢していたがどうやら故人である輝の墓に何

か細工をしたのが龍たちにはれてしまいそれが白河崩壊へと率直に言って向かわせてしまったのじゃ……………それから、時が経って白河者は無理に龍を探さなくてもいいように自分たちで龍を作ることにしたのじゃよ。そして数年前、それを請け負っていた、そして漆の封印を見張っていた白河のとある組織が何者かの仕業によって壊滅。まあ、組織は滅んだのじゃが結果として龍を人為的に作るのは成功した」

そこまで話してから俺らを運ぶべく電車がやってくる。この時間帯は利用者が極端に少ないのか朝とは比べ物にならないほど人の姿がなかった。

あっさりと椅子に腰かけてじーさんは先ほどの続きを始める。

「その人為的に作られた龍……………それがお前さんのところにいる久遠じゃ」

「!？」

ここにきて驚いていた。これまでは確かに漆の話も少しは混ざっていたがそれほど重要なことではないような気がしたからだろうか？人為的にそんなことが可能なのはわからない……………

「ウソだろ？」

「いいや、不完全じゃったがもう完璧な龍となっておる。誰かが久遠にちよっかいを出したのかは知らんが覚醒し、その気になれば空を泳ぐことも可能じゃ」

なぜか、知らないが隣の奥さんのウインクしている顔が頭の中に作られる。

腕相撲で？

「ああ、それと輝……………」

じーさんは俺のほうを見てから言った。

「いつ死ぬかわからんからできれば早くひ孫の顔が見たい」

「……………ヴぁっ」

電車は俺たち二人を乗せて、そのまま何事もなく目的地へと運んで行ったのだった。

漆編：黒き龍、暗闇を知りて。（後書き）

いつもいつも後書きを読んでいる方へ、ありがとうございます。今回が初めての方、読んでくれてありがとうございます。一回以上、三回以下の方には明日しょぼい不幸が訪れます……さて、小説書いて投稿しているとやはり気になるのは読者の方々の感想なんかです。ある意味、こういった反応をしてくれるのが気になるものです。評価、感想を作者が求めるのもこれでわかっていただけるかもしれません。もっとも、他の方の中にはランキング一位を目指したい方もいるでしょうが、作者雨月にはそこまで実力がないのはわかっていますので気が向いたときで結構ですので感想をよろしくお願いします。

久遠編：そしてもう一人は

久遠編：そしてもう一人は

久遠にあらかた事情を話し、俺は絶対に久遠を助けると誓った……… 勿論、そんな恥ずかしいことを久遠には話さなかったのだから手をつないで走っていた俺らの前に目的の人物がいた。公園の出入り口に設置されていた滑り台の上に立っていたのだ。

「よお、輝……… 夜遊びか？それとも路上プレイの場所探しか？」
滑ってきて俺らを足元から眺める。

「じ、じーさん！」

すでに何かを知っているといわんばかりの表情、そしてその態度は俺にイライラをプレゼントしてくれる存在だった。

「あんた、もしかしてはじめから何もかも知っていたのか？久遠のことを！」

詰め寄って気がつけば胸倉をつかんでいた。

「あ、輝さん？何を………」

久遠が俺を止めようとするがおれの手は止まらな……… 痛い！痛いっ！

俺の手をつかんでそれこそ力づくでじーさんの胸倉から手を放させた。これが人の力と龍の違い？天と地ほどの差を実感した。

俺から離されたじーさんだったが、別に気に障ったとかそういう態度は一切見せずに真剣そうな表情で言った。

「いいや、しらなかった……… といわせてもらおうかのう？じゃが、おまえさんたちが行きたい場所を教えてやってもいい」

「本当か！？」

「ああ、わしはうそをつかん」

その言葉自体が嘘っぽかったがもはやさがりつく相手はこの人しか残っていないのかもしれないと思っていた。

「じゃが、おまえさんたちが求めているものはすでにそこにはないぞ？」

「てんめえっ！！」

にやりとした表情にかつとなつて再び胸倉をつかもつとしたのだが、あっさりそれを久遠に止められる。

「ぐが……………」

「すみません、おじいさん……………」

「結構結構、もはや輝の心の中には久遠しかないようじゃのう？」

「……………」

「え、えーつと……………」

なんとなく未だに俺の手を握っている久遠の顔が上気していておれのはうを見ている気がした。

「それで、どういうことだよ？」

「ああ、今から焚き火をしようと思つてなあ、ほれ」

取り出した一冊のファイルに五つの記憶媒体。それを何の未練もなく地面に落してついでに火をつけたマッチを落とした……………が、いまいち火は燃え上がらない。

「よし、着火剤をかけてみるか」

「え？」

「あの、危険……………」

ですよと久遠が言う前にどこからか取り出した着火剤を放り込んでいた。

ぼんっ！！

そんな音と共に火は燃え広がつてあつという間に燃やすのはどうかと思われる記憶媒体があつさと燃えはてた。

「これでお前さんたちの当初の目的は果たした……………じゃがな」
そついったじーさんの額に何かがのめりこんだ。

「え？」

「あ……………」

そのまま後頭部を地面にたたきつけて大の字に転がる。何かが飛んできた方向……………そちらのほうを急いでみると暗かったが一人の人間が立っているのがよくわかった。

「よくもやってくれたな、くそじじい！」

その手に、拳銃が握られていること、その表情は殺意に塗られていたことを俺は知った。

「お、おまえ……………」

「輝さん！」

相手に躍りかかろうとした俺の腕をつかんであっさりと遊具の陰に隠れるようにひっぱった。

「なにするんだよ、久遠！」

「冷静になってください！輝さんが撃たれたらどうするんですか?!?」

「……………」

その眼に涙をためて泣いている久遠を俺は抱きしめる。

「安心してほしいなあ、僕は無駄なことはしない主義なんだ」

かつかつかつ、そういった音を出しながら隠れていた俺たちの所へとやってきて銃を久遠へと向けた。

「っ!?!」

とっさのことで俺は久遠をかばえなかった……………いや、もしかしたら怖くて体が動かなかったのかもしれない。とにかく、その結果が迎えたことは……………

「久遠ううつつっ!!!」

俺の声が公園に響いたことだった。

特別編：千佳（前書き）

雨月「ええ、今回新作が出ると聞きましたか？」時雨「そうです、久しぶりに出番がまわってきたんですよ」雨月「そうそう、題名はどういったものでしたっけ？」時雨「ええとですね、『アマヤドリ』『昇竜町の吸血鬼事件』ですね」雨月「そうですか、今回は珍しく女の子がたくさん出てきて時雨君うはうはではないんですか？」時雨「残念ながらそうですね。基本的に一本道ストーリーに枝分かれするような物語です」雨月「そうなんですか、では、以前と関係あると思われる人物も出る予定ですか？」時雨「ええと、そのことなのですが今回新生というコンセプトでやっているためにそういったことが起こる確率は非常に低いと思われますね」雨月「では、最後に一言お願いします」時雨「ええ、笑いあり、涙ありの予定となる物語です。まあ、一応女の子は……」雨月「はい、ありがとうございました」時雨「え？ちょ、ちよつと……」輝「これはひどい！ここは大体俺のスペースなのに！前書きって大体注意を促す場所じゃないのかよ！」雨月「そういえば一度時雨vs輝の人气どちらが上から知れたかったなあ……」

特別編：千佳

特別編：千佳

御早中学、ピンからキリまでの生徒が揃っていて成績が悪いやつはとことん悪く、成績が良いやつは本当に素晴らしかった。がんばっているものは有名な私立の高校や特待生という一種のステータスを得て卒業して行く。

しかし、成績が悪いものは落ちぶれやすいので万引きや暴力事件を起こすこともしばしばあった……。そしてその日もまた、屋上で不良たち数人が二人の少女を囲んでいたのだった。

「てめえら、安君の彼女になれよ」

「嫌よ！何でこんなことするやつの彼女にならないといけないのよ！」

「おおっ！噂どおり怖いやろうだけど……そっちのほうが俺的にはいいわあっ！」

一人の不良がだんっ！という音と共に由佳の肩に手を置く。他の連中は制服を脱がそうとし始めていた……

「……………ひいつー！！」

「やめなさいよ！あんた達！」

びくついて、震える由佳を守るようにして制服を脱がそうとしていた連中の手を振り払って千佳は前に出るが、その行為は相手を喜ばせるだけ……

「いいねえ！妹を守るオネエちゃん……………」

お前は本当に中学生なのかと聞きたくなるほどの二メートルの身長にまるで岩石のような身体。

「ぐふふ……………綺麗な肌だあ」

そっいつて千佳に触ろうとした一人の不良の手に別の手が載せられた。

「はい、そこまでえ」

「ああん？」

そこに立っていたのは御早中学三年生を他者に教える三丁Aのバツジ。

「三年が二年の恋愛事情に何か用か？」

見上げるほどの化け物を相手になお、その三年はひるむことがなかった。

「おいおい、ラブレター書いて振られたんだろ？よくあることだ、気にするなよ」

「てめえ！馬鹿にしてるんだろ！？」

切れやすい性格なのか、右手の拳を叩きつけようとするがそれはあっさりと流される。

「……………いいか？身体が大きいから有利だっと思うやつは確かにいる……………だがな、どれだけ体格がすごいやつだろうが攻撃を当てられずに受け続けていたらいつかは倒れちまうもんだ」

受け流されて前のめりになった中学二年生？の顔面に拳が入り、足払いをかけられてそのままこかされる。

「て、てめえ安君に何しやがる！」

「安くん……………そんな可愛い名前だったのかよ……………」

うんざりとした調子で一つため息をついた。

「お前ら、自分達がやってること犯罪だってわかってるか？」

特に何も感情をこめた様子もない、三年生黒河輝はそれだけ言っ
て今度はにらみを利かせた。場数を踏んできた……………そんな視線にはそれだけを相手に伝えることができる。

「そ、そんなの知ってるよ」

自分たちより相手が書く上であるということと、犯罪まがいのことをしようとしていた連中にもまだ良心は残っていたようで尻込みをする。

「ほら、今回は見逃してやるから散れよ……………ああ、それと下手な気はおこさないほうがいいぞ？お前らの行為はちゃあんとビデオカ

メラでとつてるから」

それだけ教えるとあつさりと相手は引き下がって（倒れている安君なる人物を引きずって）屋上には千佳、由佳と兄の輝だけが残った。

「お、お兄ちゃん!!」

走りかけてきた由佳を制して千佳を指差す。

「ほら、お前はあつちに抱きつけよ。お前を守るうとしてたのは千佳だろ?」

「……おねえちゃん!!」

あつさりと進行方向を翻してそのまま姉に直撃。泣きじゃくる由佳を一瞥してから輝はそんな二人に背を向けた。

由佳を抱きしめながら千佳は兄である輝をにらんでいた……いつもいつも、由佳を助けるのは輝だった。どんなに不公平な要求をしても結局はやってのける兄。越えられない壁であるということを実感させられ、しかも輝にとって自分たちはまるで興味を持たないような存在として扱われているような気がした。

ただ、父親から

「お兄ちゃんだから妹を助けるように」それだけ命令されたまるで人形のような感じ。家では輝から何かを離すことなど一切なかった。

反抗期なのだからその程度かもしれないとまだ若いのに千佳はそんなことを考えていた。

ふと、いやな思い出に浸っていた千佳はどんっ!という音にはつとなる。

「ぐああ……おい、漆……手加減しろよ。腕の骨が折れたかと思っただぞ?」

「ごめんごめん、どうしても久遠に勝てないからさ」

リビングではどうやら腕相撲をしているようでその音がここまで

聞こえてきたようだ……

そういえば、不思議なことがあった。

「ねえ、由佳……あの漆って人と久遠って言う人……本当にお兄ちゃんとの友達なのかな？」

友達としては変に仲がいい……だが、恋人というわけでもなさそうだし高校一年のうちにあの三人が知り合いになったとは考えられなかった。

兄とは別の高校に入学したので兄のことを見ることも聞くこともなくなったのだがそれでも話には上がらなかった。

由佳はライトノベルをおろしてから千佳のほうを見るといつものように少し間を空けて話し始める。

「……久遠さんの家はここから少し行ったところの高級住宅街の一角にある。気になるなら連れて行ってあげる」

由佳はそれだけいって再び本を読み始めたが、どうやら話はまだ続いている……双子だからか、そんなことがわかった。

「……だけど、漆さんのほうはよくわからない……本人に直接聞いたけどはぐらかされた」

由佳は意外と行動が早い。知らないことを知りたいと思う気持ちが多いようで口下手だが聞き込みをよく行う。

「……そうなんだ、まあ、あたしにとってはどうでもいいんだけど……」

「……兄さんはもつとよく笑うようになった」

「それは確かにあるかもね」

中学までは何かに恨みを覚えているような瞳をしていて友人なんでも恥ずかしくて兄妹であると言う事を隠してきたのだがあの事件があった以降は意外といいやつなのでは？という噂がたつて面白がつて話しかけるやつが増え始めた。女子の中にも輝宛にラブレターを書いて下駄箱に突っ込むようなやつらがいたがそれは千佳と由佳がすべて取り出して保管しておくことにし、その結果として一応ラ

ブレターは貰うがまったく反応しない“妹好きの変なお兄さん”という目で見られ始めたのである。もつとも、それを輝が知る由もない。

「……あれはおねえちゃんと由佳の恥部だと思う」

「そ、そうね……」

テレパシーなのか考えていることを言い当てた由佳に苦笑するしかなかった。彼女ができてでれでれる兄の姿を見たくないということであの犯行にいたったのである。まあ、この二人にラブレターが来ることは以前より増えたのである。良くも悪くも、あの事件が更なる人気を呼んだらしかった。

「お兄ちゃん、肩揉んで」

「ああ」

「今度は背中揉んで」

「わかった」

「おなかすいた、プリン買ってきて」

「しょうがねえなあ……ほかは？」

「……同じく、プリン」

「私はティラミス」

「ええと、じゃあわたしはドラ焼きで」

妹が命令していてそれをそつなくこなす兄……それが黒河輝である。そのことに対してイライラが募る千佳で、今ここから兄を怒鳴りつけてやりたくなっただが、何とか自制心を働かせて別の言葉を口から出した。

「あたしも行く！」

「さ、帰るか」

「ん、もうちょい待つて。もうちょつとで読み終わるから」

輝が目当てのものを探している間千佳はずっと雑誌を読んでいた。すでに読み終えていたのだがふと、輝がどのくらい待つことができ

るのか試してみたくなつたのである。

『ま、十分程度でしょうね』

三十分後……

いまだ輝は静かに待っていてプリンやほかのものを袋ごと元あつた場所に戻して待っていた。店員もほかに客がいなくて暇だろうに、千佳と輝がいるために万引き防止のためかずっと立ってスマイルをしていたがそろそろそのスマイルの口元が危ない角度に傾きかかっている。

「帰ろうっ！」

「え？ああ……」

輝が手荷物を取りに行っている間にさつさとコンビニを後にする。やはり店員は怒っていたためか『ありがとうございました』があまり聞いていて気持ちいいものではなかった。

帰り道、いらいらしながら歩いていたら千佳に輝は首をかしげている。
た。

「何怒ってるんだ？」

「別に！」

お兄ちゃんが帰ろうとか言わないからでしょ！常に受身の兄に怒りしかわいてこない自分にも腹が立っていたが、ちょうど公園から人影が出てきた時点で輝にしがみついていたのだった。

「お、黒河じゃねえか？」

「佐原……お前、何してんだ？」

「ああ、おれはほら、あれだよ、修行」

「そっか、がんばれよ」

「ああ、いちゃいちゃしてるところ邪魔して悪かったな」

いちゃいちゃという言葉聞いてようやくはっとなる千佳の頭に輝の手が載せられた。

「おいおい、お前がびつくりさせたから妹がおどろいちまったんだよ」

「それはわるかったな……じゃあな」

それだけ言つてあっさりと暗闇に消える友人をもう見ることも無く輝はいまだに千佳の頭をなでていた。

「よしよし、もう大丈夫だぞ」

「こ、子ども扱いしないでよ!」

輝を押すような感じで離れる。

「ああ、わりい」

その一言が引き金だったのかもしれない。

「……あんたねえ! いっつもいっつも!……」

こみ上げてくる怒り、そして輝はきよんとしているだけ……

「そうやって優しくするだけで……なんで? 何でよあ?」

最後のほうは嗚咽しか出てこず、涙がこぼれ始めた。

「お、おい千佳? 何泣いてるんだ?」

触れようとした輝の手を払いのけて千佳はそのまま走り去っていた。

「……な、何が起こったんだ?」

首をかしげる輝だったが、やるべきことを思い出して携帯をとります。

「あ、漆か?……実は千佳が迷子になっちまった。手分けして探したいから手伝ってくれ」

迷子になってしまったといわれた千佳は公園の一角でしゃがんでいた。その公園は夜になると不良グループが多くいる有名な場所。近所迷惑をよく行っていたのだ。

「ひゅうつ! かわいこちゃんがいるぜ?」

今時それは無いだろ言いたいくなるせりふを放つこれまた珍しいリーゼント。

「おほつ! 本当だ!」

そういつて千佳によってくる別のリーゼント。

「胸も結構あるぜ？マブい子だ」

そしてエロい顔をする三人目のリーゼント……

「こ、こないでよ！」

そんなリーゼントたちから離れる千佳の耳にその声は聞こえてきた。

「おいおいおい、千佳は俺の妹だぞ、てめえらが気安く触っていいやつじゃねえ！」

その声を聞いたことは多々あった。

「んだてめえは？」

振り向くリーゼントの顔面に一つの拳がのめりこむ……

「お、おい漆っ！やりすぎだろ！」

「ごめん……ま、まあ息してるから死んでないとは思っけど」

ああ、やってしまったという表情の漆。

「ていつ！！」

「がはっ！！」

そんなしよばい掛け声だけで一人が倒れ付す……これは確実に両肩がはずされた上に両腕を折られる音がはっきりと輝の耳に聞こえていた……

「久遠、やりすぎだろ？」

「やりすぎ？違います！千佳ちゃんをいじめたような連中には制裁が必要です！」

「そ、そうだな……だけど、手加減してやれよ？」

いつもとはまったく違う表情の久遠にたじたじたがさすがにやりすぎるとやばいと思ったのか輝がそんなことを付け加えていた。

「……こっち」

「え？っ、うん」

由佳が千佳を誘導して輝たちと合流させる。今日は近所迷惑を行う連中の数が少なかったのでよかったが、公園にはそれでも骨を多くおられた連中のうめく声があつて肝試しには格好の場所となつて

いる。

これが龍と人間の实力差である。

そして、近所の人が通報したのか知らないが警察が到着。

「久遠、漆と由佳は別ルートをよろしく頼んだぞ？」

「わかった、じゃあ輝たちも急いで帰ってきてね？」

それだけ言って闇夜にまぎれる三人。

「ああ……じゃ、千佳帰るか」

「え？う、うん」

「よし、ここまでくれば大丈夫だな」

「うぐ……えぐっ……うわああああん！！」

いきなり千佳が泣き出してそのまま輝へと抱きつく。

「よしよし、恐かったんだな……」

抱きしめ、頭をなでられることにももはや抵抗は無かった。

「馬鹿、馬鹿、馬鹿……」

それだけしか出てこない……自分に対してだがこれは間違いなく輝に対して言っていると思われるだろう……そして案の定、輝は頭をかいていた。

「わりいな、一人じゃ絶対に負けるって思ってた応援頼んだわ」

「……ぐすっ……」

「ほれ、背負ってやるからな」

言われるままに、千佳は背中に乗る。

「……改めて思っただけどさ……俺、やっぱりお前たちとは違うんだな……」

ふと、輝がそんなことを口走った。

「え？」

「ああ、いや……なんでもない」

珍しく齒切れを悪くさせたが、まるで見繕うかのように輝はこんなことを言い出した。

「あのさ、血って大切だと思うか？」

「え？そ、それは大切でしょ？血がないと人間死ぬわよ？」

当然のことだとそういうが、どうやら輝が言った意味での血とは違ったように苦笑が帰ってきた。

「ははっ……そうだよなあ、やっぱり大切な……」

「？」

「気にしないでくれ」

それだけいって輝は自宅の門をくぐったのだった。

「あ、あのねおにいちゃん……」

玄関の前で降ろされて千佳は頭を下げた。

「ありがとう！」

「……千佳……」

輝は千佳を抱きしめ、泣いているようだった。

「……無事でよかった……お前がさ、俺の妹でよかったと思う」

「え？」

抱きしめられたことにも驚いたのだったが、泣いたことのほうが驚いた。輝が泣くところなどこれまで一度たりとも見たことが無かったからだ。

「もちろん、由佳も俺の妹でよかったと思う。いつかお前を守ってくれるやつが現れるといいよな」

「……」

返事は返せなかった。いまにも兄が遠くに行ってしまうかのような感じがして、返事をしてしまうと消えるような気がしたからだ。

「……何してるの？」

「由佳……ちょっと来てくれ」

「？」

妹を抱きしめている兄をどう思ったのかは知らないが、呼ばれて由佳はあっさりと輝に近寄って千佳と由佳は輝に抱きしめられた。

「……お前ら二人が俺の妹でよかった……あのな、聞いてほしいんだが……俺とお前ら、血がつながってねえ……」

元気なく、最後のほうは消えてしまいそうな声。

「……………」

「……………」

千佳と由佳は無言。

二人に顔を合わせることもなく、すまなさそうに二人を放して輝は下を向いていた。

「……………最近知ったんだけどよ……………本当に前らとは血がつながってねえらしい……………その、あれだよな、なんだか気持ち悪いよな……………」

輝のほうもなんだか言っていることがおかしい気がするが、千佳は先ほど質問されたことがようやく理解できていた。なるほど、こちらの血だったのかと。

対する由佳は一言。

「……………知ってた」

「え？」

「は？」

輝と千佳がぎょつとして由佳を見るが、首をかしげているだけだった。

「……………結構前にパパが言った……………おねえちゃんもそのとき一緒にいた」

「千佳、そうなのか？」

「へ？」

まったく記憶にない……………と思ったが、そういえば中学に入るぐらいにいわれた気がした。場所はリビングで、珍しく家でテレビを寝転がってみている父親がどうでもよさそうに言ったのだ。

『ああ、そうそう、前々から言おうと思ってたんだけどさあ輝ってお前らと血がつながってねえから』

『ふゝん』

『……………そうなんだ』

そのまま、スルー。今日の天気は晴れであると教える程度のノリだった。

「ちょよ、ちょっとまって？あれって本当だったの？」

「……本当」

「あのくそ親父……はなしてたのかよ……」

誰だつてその状況で言われても信じない話だった。しかも、笑いながら言っていたという相乗効果のために千佳の脳みそはそれを有益な情報として捉えなかったのである。

「……まあ、兄さんは兄さん」

よろよろと近寄ってきてそのまま輝の胸に身体をうずめる。

「……そうだな、ありがとう由佳」

千佳は放心状態だった……血がつながっていなかった、という事実よりもそれを教えるときのあの父親の態度！信じられない父親だった。

目の前では由佳の頭に手を載せてよしよししている輝の姿。なんだかのけ者にされているようでいやだったので由佳の隣で輝に引く付く。

「……よしよし、千佳」

「……」

まあ、兄には変わらない。千佳はぐりぐり頭を輝の胸にこすり付けて考える。

「あのさ、あんたたち何してるの？」

その声を聞いて千佳のときは止まった……漆だ……だが、はっと考えて言葉を出す。

「あ、あたしたち普通の兄妹に見える？」

「……ううん、まあ、見えなくも無いけど……ちょっとアブノーマルかな？シスコンかブラコンのどっちか、それが両方」

断言した漆にげんなりとして輝は言ったのだった。

「おい、漆……そんな知識どこで拾ってきたんだよ……」

「……そっか、ブラコンか……」

そして、千佳は一人そんなことをつぶやいていたのだった。

「おやおや、これはとても仲のよい兄妹愛ですね」

久遠も何事かと駆けつけたようで輝たちをみてそんなことを言っ

た。悪い気はしないな、千佳は再び胸にぐりぐり頭をこすり付けるのだった。

漆編：黒き龍、闇にて、いや、ザリガニにて。（前書き）

駄目な作者の見本：第三十部分までに一切感想とかがなかったらグ
レます。

漆編：黒き龍、闇にて、いや、ザリガニにて。

久遠編：黒き龍、闇にて、いや、ザリガニにて。

「……………でけえ」

一言。まあ、その屋敷は俺の前に、俺の視界に入らないほどの大きさをほこっていた。純和風の門が聳え立っているのだから驚くだろう。

「さ、行くぞい」

「え？裏道とかから入るんじゃないのか？」

「おいおい、裏道入学じゃあるまいし……………正々堂々入ると言う訳でもないがのう、他から入るとこの屋敷はどろぼう避けのための防衛装置が作動するのじゃよ」

入ったらどうなるのか……………考えられなかったが素直に前から入ることにする。

てつきり誰かが待ち受けているのかとも思ったがそうだったことはなくそこには日本庭園が広がっている。

「……………なあ、どっかに忍者とか潜んでいるんじゃないのか？」

「テレビの見すぎじゃ、それにこの屋敷に人が残っているとしてみはやあのわからずやだけ。漆ちゃんを誘拐したのも最後のわがままい付き合った暇人どもじゃよ」

一つ笑って引き戸をあけるが、そこに玄関などなくただただ、ふすまで仕切られた広い部屋が俺らの前に現れただけだった。しかも、室内だというのに一つの池が視界に映る。

「一体全体ここはどうなってるんだよ？玄関はないのか？」

「ここは人が立ち入るような場所じゃない……………ここは人の業によって生み出された物の最終地点……………」

それと同時に池があわ立ち、何かが飛び出してきた……………

「ザリガニ！？」

体長五メートルほどのザリガニが突如現れ、その姿を俺らの前に

さらす……赤いはさみ、触覚、脚……まるで獲物を見つけたというばかりの視線。

「クリムゾンシザー……それがこの実験生物の名前じゃ」

「いや、別にザリガニでいいんじゃないかねえの？」

「能力はさして変わらず、弱点は足の関節などじゃな」

ああ、大きくなってもそのもろさは変わらないのか……子供たちがザリガニ釣りを終えた後にいじっていたらあっさりとおしが取れてしまう。そして、彼らが去ったあとには胴体だけがぼいされてるからな。

「まあ、ちびつこ程度の腕力では足とかちぎれはせんがのう」

俺とじーさんの間へと鋏を振り落とすがそれをあっさりとよける。脳味噌もでかくなっただと思うのだがそんなに変わりはないのだろう。

さつさと下をかいくぐって足元へとやってくる……

「せやあつー！」

胴体と直結している足の根元に拳をたたきつける……ぶちっという音とともにあっさりともげる。

悲鳴とか一切上げてくれなくてよかったと思う。だって、怖いだろう？

「こつちもこつちでやっているからさつさと終わらせろよ」

「へえへえ」

十脚の足をじーさんとともにばらばらにして動けなくなった胴体の上って額にけりをいれる。

クリムゾンシザーの動きが完璧に止まる。

「このことをしつとるか？」

「何をだ？」

隣につながっている扉をふさいでいるザリガニの鋏をどかしながらじーさんはしゃべる。

「アメリカザリガニは成長するにしたがって徐々に体の色が赤くなってくるのじゃ」

「いや、知らねえよ、そんなの」

「ああ、それとザリガニを食すときはちゃんと加熱して食べなくてはならん！ザリガニの腸の中にはベルツ肺吸虫がおるかもしれんからう」

はつきり言うがザリガニなんて食う奴いないだろ？俺はそんなことを考えたのだがじーさんはまじで食うつもりなのだろうか……ザリガニの甲羅をたたき割ろうとしていたりする。

「ほら、次行こうぜ？」

「ちっ、しょうがないの」

「……………」

ふすまを開けるとそこにも一つの池があつた。ざばっ！そんな音を立てながら再びクリムゾンシザーが現れる。

「おいおい、またクリムゾンシザーかよっ！？」

「違うな、これはマツカチンじゃ」

「マツカチン？」

なんじゃそりゃ？

「別名じゃよ、アメリカザリガニの。知っている人は知っているはずじゃよ」

「俺はしらねえよ」

知っている方がいたらご連絡ください。あなたを第一回勝手にザリガニ博士賞を授与します。

「マツカチンを飼育するときは決して数匹を同じ水槽に入れてはならん！やつらは共食いを始めてしまうからな！」

何か怖いものでも見たかのようにがくがくと震えているじーさん。やれやれ、きつと小さい頃に禁忌をやってしまったに違いない。

マツカチンと相対する俺ら……だが、いきなりふすまが飛び散って隣の部屋からまた別のマツカチンが現れる。

「ほら見る！たとえこのように区切っていたとしても今のやつらには意味がないことじゃ！逃げるぞ、輝！奴らは共食いを始める！グロすぎて文章にもできんことが起こるぞ！」

「……………まあ、いいけどよ」

お互い鋏を振り上げて戦い始めたマツカチンを置き去りにし、俺らは先ほどマツカチンがやってきたほうの部屋へと逃げ込む。

「うおう！？」

そこにはそびえたつまた別のマツカチンが……………

「安心せい、これはやつが脱皮したやつじゃ」

「な、なんだ……………驚かせやがって」

そのまま隣の部屋のふすまを開ける……………

開けたと同時にあつという間に暗くなり、一瞬だけまた電気がつく。

「漆っ！！」

倒れている漆の姿がぱつとつつされた後に再び電気が消えるがまたもやつく。

「うるしいいっ！！」

そこには、赤い血の上に倒れている漆の姿が。

急いで駆け寄ろうとするが、じーさんにまいったをかけられる。

「まて！それよりあれを見ろ！」

「！？」

漆よりも先にいた者……………それは一人の少年とそして、俺が初めてあつた龍、あの黒い龍が立っていた。

「……………お前らか、漆をこんなにしたやつは！」

「そうだと言ったらどうするんだい？」

「……………」

返事はせずに、俺は相手へと踊りかかる。

久遠編：相方を背負う（前書き）

作者からのお願い：えゝ、タイトルがちょっとあれだったりするとなかなか読む気が起きない……そんなことはありませんか？雨月もその一人でどなたかの小説を読もうと思ってもやはりタイトルで引いてしまったら殆ど読むことはありません。そこで、提案なのですがこの小説を読んでくださった方があの小説は面白いよとかあれは傑作だったとか雨月に教えて欲しいと思います。無理に……とはいいませんが、教えてもらえると嬉しいものです。メッセージなどで教えていただけたらいいなあと思っています。勿論、自推でも結構ですので、よろしくお願いします。ああ、そうそう……カウントダウンですね。

久遠編：相方を背負う

久遠編：相方を背負う

「へ？なんですか？」

撃たれたはずの久遠だったがその額からからんと鉛の玉が落ちた程度だった。すり傷さえしておらず、血すら滲んでいなかった。

「え……………」

「言っただろう？僕は無駄な事をしない……………龍を殺そうとするならもっと強い武器がないと無理だから……………それに、あのじじいも龍のはしくれたからな、あの程度じゃ死なない。憎しみをこめて撃った弾丸だったとしてもそれが威力を増すことなんてありえない」
「そういつて遊具を適当に撃つ、するとそれが本物であるという通りに穴が開いていた。」

「まったく、危険なことをしておって馬鹿が！」

後ろからじーさんが立つてこちらへと歩き出していた。まあ、しかし頭から血を出してはいたがかすり傷程度だった。

「おじいさん……………」

ほっとしたのか、また涙を流している久遠だった。
なごみ始めた空気がだったが、相手が俺の額に拳銃を突きつけたことによつてあっさりと緊迫した空気に変わっていた。

「おっと、別に僕は龍を殺しに来たわけじゃあない。龍の血が入っているといつても覚醒してなきゃ人と同じだから……………」

「……………」

「輝さんっ！」

「おっと、動くなよ」

かちりという音が拳銃から聞こえてくる。

「お前も持つてるんだろ？おもちゃをよ。あの馬鹿女からもらったはずだからな」

見ていたのかと思ったのだが、ポケットが銃の形に膨らんでいたからわかったのだろう。

「僕は一方的に勝つてというのが嫌いだ……………一応、相手にも勝てるチャンスやるっていう方法が好きだから……………それで勝負しろ」

あつさりと拳銃をひいてマガジンを取り換える。俺も立ち上がった拳銃を引っ張り出した。

「輝さん……………」

俺に久遠が抱きついてきた。ものすごく、温かい。

「大丈夫だ、久遠……………俺は……………」

「負けないってか？はっ！くだらねえ！さつさと構えろよ」

冗談か、本気か……………久遠へと再び銃口を向ける。あの弾丸を受けても久遠が死ぬことはない……………理屈では分かっていたがそうもいかなかった。とりあえず、向けられている銃口を俺へと向けさせるよう、移動する。

「……………お前、名前はなんていうんだよ？」

ふと、相手の名前を聞いていなかったたので尋ねてみる。てっきり答えてくれないと思っていたがあつさりと答えてくれた。

「白河明人。僕は血の綱がらねえお前の弟だ」

弟……………弟ねえ……………残念ながら俺には妹は居ても弟なんていない。

「……………」

「保証してやろう、僕の放った弾丸は見事にお前の頭蓋を割るね……………」

……………それで、面白いことが起こる」

久遠が泣くところでも予想しているのかしらねえが……………そうしないようにやるしかない。

「が、頑張ってくださいね、輝さん！」

「ああ、まかせ……………」

ぱあん！

そんな乾いた音が聞こえて相手を見やる……………にやっと笑っていた銃口から煙が立ち上っていた。

急に視界が斜めになって、すぐ右を向けば公園の地面がうつつた。そして、なにか赤い液体が……………

「輝さんっ!？」

「輝!？」

久遠とじーさんの声が聞こえてくる……………

それ以降はもう何も聞こえない。

漆編・黒き龍、石の下にて。
(前書き)

カウントダウン4？

漆編：黒き龍、石の下にて。

漆編：黒き龍、石の下にて

「じゃあ、あたし達はあつちで待ってるから……………」

「わりいな、わざわざ待たせるような真似してよ」

「いいですよ、輝さんはちゃんと漆さんと話してください」

千佳が佐原、久遠に由佳をつれて去って行く。静かな霊園で、俺たち以外、この霊園ないでは人の姿が見ることができない。

四人がいなくなつて俺は静かに漆の墓に手を合わせた。

「久しぶりだな、漆……………」

黒いスーツ姿の俺は漆の墓標の前に立っている……………漆が死んでしまつて一年がたつた。今の俺はあの頃よりも成長できただろうか……………

「不思議だよなあ、お前がこんなふうに……………まさか、死んでしまふなんて思わなかつたぜ」

墓が喋ることなんてない。そんなことはわかつているが俺は放さずに入られなかつた。

「あの時さ、お前は大丈夫だつて思つてあいつらと戦つた……………だがよ、結局お前は死んじまつたからな……………前々からいおうと思つてたんだ」

少しだけ息を吐く。緊張するが、あの時いえなかつたことをちゃんと一言言わなくてはいけない。

「……………俺はお前のことが好きだつたんだ……………」

涙が頬をつたつて地面に吸い込まれて行く……………漆の墓標は光を浴びて輝いている。

「悪い、さつさと言つて普通の恋人と生活送りがかつたぜ……………俺が笑つてその隣でお前がいてさ。俺の料理食べて笑ってくれるお前が見たかつた、喧嘩したらお前にばろばろに負けるんだろうな、俺は。ああ、それと腕相撲のリベンジだつてやってねえよな……………」

涙が止まらないが、言葉も止まらない。言えないうちに漆は消えた。勇気があればその時点で言えたのだ……もしかしたら振られていたのかもしれない。だが、今の子の状況よりまだ。

墓の前に膝をついて涙を流すしかない俺を俺は憎かった。

「ちくしょおおおおおつっ！！俺は本当に馬鹿なことをしちまつたんだ！お前の、漆の敵さえ殺せなかった！とどめなんてさせねえよ！漆い！さっさとお前を……お前を病院に連れて行くべきだったんだよお……」

漆は返事をしてくれない。一年前はあんなに笑っていたのに、話せていたのに、ちよつとは考えていることを理解できたのに……俺の隣で怒ったり笑ったりしていた漆はもう、動かない。何をしたらって笑わないし、怒らない。

情けない姿をさらしているってわかってる。

漆がこんな姿を見たくないって生きていたら言ってくれただろう。

俺を励ましてくれていた。

だが、そんな漆はもういない。

あの日に戻ることが出来たらならば……

もしも、戻れたならば……

俺は首を振って立ち上がる。

「いや、そんなことなんて出来ねえな……」

涙を拭く事無く俺は立ち上がり、漆に笑いかけた。

「お前がもう笑えないってことはわかってる。だから、お前の代わりに俺が笑うよ……生まれ変わりっていうのがあったら……」

『輝……………』

「!？」

湿った土から黒ずんだ右手が生える……………そして、それは何かを
求めるかのように動き出し、左手も現れる。

「……………これは……………」

『輝、何であのとき私を助けてくれなかったの?』

「漆……………」

俺の目の前に現れたそれは……………漆なんかじゃなかった。陰が
実体化した、そんな感じか?時折、砂嵐が混ざるかのようにその姿
をぶれさせながらも俺に近づこうとする。

「……………あんたは今最高の悪夢を見ている」

「お前……………」

そして、もう一人……………俺の前に現れた。

忘れもしない、漆を殺した張本人……………一年前に俺がとどめをさ
せなかったやつだ。

「悪夢だあ?お前が何かしたんだろ!？」

「違うね、この漆は君が心の中で育てた漆だ。後悔、絶望、負い目

……………そんなものをこいつは喰らって育ってきた……………」

嫌な笑みを俺へと向ける。

「君に漆を倒せるかな?確かに一度目は僕が殺した……………」

お前に出来るのかと、そいつは言ったのだ。

「……………俺は……………」

『輝、一緒にいようよ、ここは暗くて一人……………だから、怖い。私
はまた一人ぼっち』

まるで機械音。時折走るノイズに背筋を寒気が襲う。地の底から
聞こえる声とはこういった声のことを言うのかもしれない。

『輝あ……………』

「……………」

酷く緩慢な動きでこちらへとやってくる。俺に出来ることなんて
……………ないのかもしれない。

久遠編・背負われしものは歌を歌う（前書き）

カウントダウン 3

久遠編：背負われしものは歌を歌う

久遠編：背負われしものは歌を歌う

気がつけば白い天井だった……それならどれだけ良かったのだろつか？

自分の名前さえ、思い出せない。

俺の目の前には暗く、淀んだ赤い池。

それが物凄く怖かった。

小さい頃に悪いことをしたら親父に入れられていた物置小屋よりも怖くて怖くて、何も起こっていないのに俺の身に危険が迫っていることを感じるのだ。

『馬鹿か？お前にやってきた危険は過ぎ去った』

誰かが俺にそういった。

声の聞こえたほう、少しだけ光を、温かさを感じるほうへと視界を移動させる。

そこには俺が、たっていた。

『思い出せよ、お前はあの程度じゃ死なない』

いや、立っているんじゃないくて鏡に俺が映っていた。

『死ぬのは怖いか？久遠に銃を向けられたとき、お前は彼女を救えなかった』

それは……………そうだ、俺は怖くて助けられなかった。とつさのこととはいえ、ああいったときは絶対に助けるのがお約束ではないのか？

『もうちよつと考えるとお前は久遠を失うのが怖かった。そして今……………久遠は自分を失った』

そういわれてもぴんとしなかった。久遠は俺と違ってあの弾丸を受けた程度では死なないし、傷すらつかない……………。

『お前を失い、彼女の力は暴走……………久遠は単なるケダモノと成り果てた』

無表情、冷徹な言葉を口に出すことをためらわない。嘘はつかない、そいつは自分だから。

『白き龍は……………何も久遠だけじゃない……………』

そういわれて、何かをつかみかけた。俺は誰だ？

『お前は白河輝……………久遠を、あの白い龍の化け物を助けると誓った馬鹿な男だ』

そうだ、俺は……………

あの池は俺の血で出来たもの。

あの鏡は俺を批判する自分の考え。

久遠がおかしくなったのは俺のせい。

俺は何だ？

あんな簡単には死なない。

そう、大体俺は……人間じゃなかった。

漆編：黒き龍、光を知りて。
(前書き)

カウントダウン2？

漆編：黒き龍、光を知りて。

漆編：黒き龍、光を知りて。

「あいたたた……………」

漆は静かに目を開ける。

「うわっ！？」

そこには顔を青ざめた輝が倒れていた。

「え？な、なんで輝が！？」

「僕が呼んだんだよ、君をえさにして」

「！？」

すばやく身を起こし、輝を引っ張って距離をとる。

「あなた誰！？」

「僕？僕は君が持っているその男の弟さ……………」

髪をいじりながらそんなことを言う。その間、漆は相手のことを一切無視して輝の頬をばしばし叩く。少しだけ顔に赤みが戻ったが一向に目を開けることはなかった。

「あなた……………輝に何をしたのよ！？」

この原因が目の前の相手にあることだと決め付けて漆は相手を睨みつけていた。

「僕の兄さんに何をしたかって？」

「弟？輝はあんたみたいに整った顔をしてないわよ！そんな嘘、すぐばれるんだから！そんなことはどうでもいいから輝をどうにかしなさいよ！」

「……………」

まくし立てて睨みつける。その目はもはや人のそれとは違っていた。

「……………今兄さんには夢を見てもらってる」

「夢……………」

相手は頷き、説明を続ける。

「そう、夢さ……夢の中じゃ君は死んでる」

「え？私は生きてるわよ？」

「……夢の中では……今頃君の墓参りを兄さんはしている……そして、死んでしまった君を自分のせいだと思つて自ら精神を壊すことを行っているのさ」

きざつぽく笑い、目を細めて漆を見下すようにねめつけていた。

突如として部屋の明かりが消され、再びついたときには一人の少女が輝の弟の隣に静かに立っていた。

「……何も兄さんだけが白河全員が驚くような力を持っているわけじゃないんだよ？僕にだって少しはあるさ」

「それがどうしたの？」

「……君はずつと白河家にとって邪魔存在だったんだ。もう忘れたのかい？兄さんが君を助けるまでは君は閉じ込められていたんだよ？それよりも前のことを思い出せない？」

鼻をならしてふんと漆は言った。

「知らない、というか……輝の事だけしか頭にないもの。今すぐ私は輝をつれて看病する。あなたなんか構っていられる暇なんてない」

「おやおや、いいのかい？何も人質は兄さんだけじゃない……指をぱちりとならすと上から縛られた一人の老人が現れる。」

「……この人がどうなつてもいいのかい？」

「別に」

「そ、それは酷いんじゃないのかのう、漆ちゃん」

苦笑しながら漆を見やるが漆はじーっと見ているだけだった。

「だって、私は輝のことだけ大事。ほかは……知らないもの」

「輝がそれを喜ぶ？」

「それは……」

漆は何も言えずにそつぽをむく。いつもは何か反応を示してくれるはずの輝も黙ったままで漆に背負われていた。

「そうだな、言い方を変えようか？このじーさんを助けるためには

僕らを倒さないといけない……もし君が僕らを倒せたらじーさんだけじゃなくて君が背負っている兄さんも助けられるんだよ？」

「じゃあ、すぐにおじいさんを助ける……絶対に！」

陰が呼応するかのように歪んでいき、陰はもはや人の姿をしていない。長大な龍の姿に変わっているが漆の姿が龍になることはなかった。闇をまとうかのように、漆の周りは変に黒いオーラが立ち上っているのだ。

瞳は輝が漆を初めて見たときのように真っ赤に染まっている。

「ほお、兄さんが倒れているのにこんなことが出来るなんて……」

輝の弟を守るようにその少女は前に出てくると、徐々に姿を変えていく。

「いけ、ナハト」

それだけの言葉で真っ黒になった龍が漆へと襲いかかる。

「ナハトじゃと！？おぬしも封印を破ったのか！？」

「何も封印されていた黒龍は一体じゃない……それに、僕にだって少なからず力がありますからね」

鋭い雄たけびとともに口をあけ、漆を飲み込もうとする……だが、漆はそれを真っ向から受け止め、押さえつけた。

「なっ……押さえつけただと！？」

ナハトと呼んだ龍をけしかけた少年は驚いている。

「……この程度？今の私をなめてもらっちゃ困る……輝、今すぐにも助けてあげるからね！」

闇はさらに黒く輝き、漆の瞳は更に赤く染まって輝いた。

「……ずっとずっと一人ぼっちだった私を出してくれた。それに友達だって輝のおかげで出来た！人間と龍が共存できるって教えてくれた……それに今だって、私のことを助けにここまでやってきてくれたっ！！」

押さえつけられているナハトは暴れるがもはや漆に勝てることなど皆無……それは誰が見ても明らかかなもので徐々に元気をなくなっていき動かなくなった。

「…………私は同類を傷つけたくなんてない…………さ、早く輝を助けて」

「くっ…………何も腕力だけが戦いじゃない！」

ぱちりと指を鳴らすことにより、電気がつき、再び消える。

「ここは……………」

漆の前に広がった光景、それは墓地だった。

久遠編：歌は二人を癒した。（前書き）

今回で久遠編終了っ！カウントダウン！

久遠編：歌は二人を癒した。

久遠編：歌は二人を癒した。

「ぐがああつ！！」

「あがあああつ！！」

巨大な白い龍は絶叫しながら彼女の大切なものを奪った存在であるちっぽけな人間をその長い身体で締め上げていた。徐々に人間の身体は悲鳴を上げ、足から順に骨が折れゆき、このまま朽ち果てて行くのは時間の問題だった。

「やめろ、やめるんじや久遠ちゃん！」

近くにいた老人の声など聞こえず、狂ったような瞳は焦点が合わなかったその目に映しているのは居場所を失っただけのちっぽけな人間だった。

もとより、その人間がこの場所にやってきたのは死ぬためだった。彼の住んでいた屋敷は何者かの襲撃によって炎上し、彼が一週間後に継ぐべきはずだった屋敷は消え去って多くの人たちが見事に自分だけを残して逃げて行った……。どうやら見捨てられたとしたのはそれから少し後……。どうせ、このまま捕まるのならば自分の兄を手にかけた後に死のうと決めていたのだ。

死ぬ……。いや、それは違うのかもしれない。こうやって今、伝説上の龍に、しかも自分達が作り出した存在に……。命を絶たれなければ旅立てない自分が情けなかった。結局、自分がやってきたことは八つ当たり。それだけだった。

「おい、久遠！」

そんな時、先ほど死んだと思われた人間が、元の場所に立っていた。

「あ、輝！？」

「嘘ぐがあっ！！」

龍の力がいつそう強くなり、声が押し出されるように大気へと溶けてゆく……両腕はもう使い物にならないただの肉塊に成り果てた。

「もうやめとけよ、そいつはもう充分反省している」

そんなことを言いながら近づいて行く一人の少年……人間は荒れている龍に愚か者が近づけばどうなるか知っていた。

もはや目の前さえちゃんと理解できていない龍がするべきことは

……

邪魔するものに襲い掛かることだった。

「げほっ！！がはっ……………」

そのおかげでちっぽけな人間は解放されたが身体がもう動かない。首だけ動かして白い龍と一人の少年を見やる……尻尾で潰すために振り上げるが、相手はよけようとせずじっとみるだけ。

振り落とされた尻尾、ぐしゃっ！という音が聞こえてくるとふんでいた音は全く聞こえずその代わりに左腕でその尻尾を受け止めている一人の少年がいた。

「……………ほら、もうやめようぜ？よくよく思えば今頃あいつら全員俺たち二人を探してるからよお」

『ぐるるる……………』

龍が人の話など聞かないことを知ってかしらしらずか……その少年は龍に話しかけていた。もはやあれは人でもなんでもない、龍だ。

案の定、龍のほうも話を聞こうと思っていなかったようで彼に再び尻尾で襲い掛かっていた。

だが、それもまたおさえる。人間にはその少年がもはや人ではな

い人に見える。

「はあ……………　　まったく、腕相撲なら腕でやれよな？……………　　俺は男女差別しないほうなんだ」

それだけいつてつかんだ尻尾を振り回し、それに比例して龍の身体も宙舞って最後に公園の遊具を一つ破壊し、大地に沈む。

「頭冷えたか？……………　　ああ、そうそう、久遠、覚えてるか？この言葉……………」

鋭く開けられた少年の瞳……………　　それは人間のそれではなく龍と同じような瞳……………　　白い光が彼を中心に夜空へと舞い上がって四方八方に地面を這う。

『ええと、とりあえず人型になれや！！』

それだけで、たったそれだけの言葉で光は消えて、荒れ果てた公園は姿を取り戻して人間は再び両足で大地に立つことができた。

「これは一体……………」

言葉も出ない人間、そして、大地に沈んだはずの龍はジャングルジムの内部で奇妙な恰好で少年のほうを見ていた。

「あ、輝さん……………　　輝さん！輝さんっ！」

「まったく、変な恰好しやがってよ……………　　っ！か、俺の言うことくらい……………　　おわっ！！」

「輝さん……………」

白き龍は少年を抱きしめて放さない……………

「お、おい……………」

「よかった……………　　死んでなくて」

「……………　　ああ」

白き龍を抱きしめたまま、その少年は人間のほうへと静かに視線を動かして顎をしゃくった。

行け……………　　そういう意味がその一つに含まれていることを人間は知った。

「……………」

ここにこれ以上いても無駄なだけ……………それを悟って人間は公園を後にしたのだった。

夜道を歩く人間の背中から声が聞こえてくる。

「まったく、こいつが白河のところのガキかよ……………」

「晶様、口が悪いですよ」

「あゝはいはい、悪かった。まったく、こいつが白河のところの子どもかよ……………これでいいか？」

「はい、いいですよ」

内容的にあまり代わりのない、だが一寸のすきさえ見せずにそんなやり取りを終える。

「とりあえず、警察にでも転がしておいてやるか」

急いで後ろを振り向く人間だったが、相手は人とは思えないすばやさで彼の握っていた拳銃を弾き飛ばし、力任せに引き倒す。

「ぐあっ！！！」

「甘い、甘いねえ！その程度の腕じゃ、うちの『お姉ちゃん』にはおよばねえぜ？」

「お、お前……………白瀬晶……………か？なりそこないのくせして！」

胸倉をそのままつかまれてあげられる。

「藍、さつさとこいつを縛ってくれよ」

「はい、わかりました」

付き添っていた藍色のワンピースの少女……………可憐だが、その背中には羽が生えていた。

そして、動く力の残っていなかった人間はあっさりとぐるぐるまきにされてつかまれる。

「ふふっ！僕を捕まえたところで無駄さ！どうせ僕は裏切られた！見捨てられた人間だ」

そっという彼の頬を涙がつたう。人に裏切られるのを生まれて知っ

た瞬間だったのだ。それまでは裕福に過ごしてきた、誰も彼の言うことを聞かないということとはなかった。しかし、最近になって全てが狂いつばなしかったのだ。

「まったく、可愛いそんな野郎だよなあ……………」

「本当ですね、晶様がこのようにならなくてほっとしました」

「ほっとけ、ほらさつさと帰ろうぜ？俺まだこっちに帰ってきて一週間もたつてねえ」

「ちよつと待った！」

帰ろうとしていた二つの陰に、追いつがる二つの陰。

「そいつは俺の弟だ！おいて行ってくれ！」

「ああん？弟お？」

振り返る一つの陰だったが、相手を確認して目を細める。

「……………おいおい、まだラスボスがいたのかよ？藍、こりや死ぬ気でいくしかねえぜ？」

「え、ええ……………この人何者なんでしょう……………」

しかし、追いかけてきた少年は両手を挙げた。

「待った、俺らはあんたらとやる気はない」

「そうよ、愚弟」

そんな声が聞こえてきて全員が声のしたほう、夜空を見上げる。

「姉さん！？」

そこには黒スーツの女性が翼をはためかせることなく、浮いていた。

「おいて行つてあげなさい。どうせそいつを捕まえたところで意味なんてないわよ」

「……………いいのかよ？」

「ええ、いいわ。大体、あんたも私もこの久遠ちゃんがいてくれたからこっちに帰つてこれたのよ？またあの猫耳と一緒にサバイバルしたいの？」

何を思い出したのか汗を流しながら縄でグルグルにしたちっぴけな人間を道路に下ろして、白き龍へと頭を下げる。

「君が久遠ちゃんかあ……………君のおかげで俺はまたこっちに戻ってこれて友人達と会えた。礼を言う」

「いえいえ、そんな……………」

照れる白き龍にもう一度だけ頭を下げて愚弟と呼ばれた男は隣にいた藍色のワンピースの少女と一緒に歩き出した。

「じゃ、まあ、今回は素直に身を引くけどな……………ま、縁があつたらまた会おうや」

「失礼します」

「じゃあね、久遠ちゃん、輝」

三人が消え、三人が残った。

「……………」

「さ、帰るぞ、久遠」

「え、ええ……………けど、本当にいいんですか？逃がしちゃって」
縄を解いて自由にする。

「ああ」

「悪さしたらどうするんです？」

「そんなときゃあの三人が何とかしてくれるさ」

単なる人間ではなさそうだと感じて人任せ。

「いつかまた会ったら『兄ちゃん』って呼んでくれ」

それだけいって少年は人間に背を向けた。

「あ、待ってください輝さん！」

そして、白き龍もそれを追いかけて白けてきた夜に消えたのだった。

「……………」

一人残された人間は立ち上がり、どこかへ消えた。

ここに、漆と久遠の夏休みは終わりを告げるのだった。

漆編：黒き龍、輝きを知りて。（前書き）

今回で漆編も終了ですっ！うわあああん！けっきょくカウントダウンまでしてたのに一切感想とかなかったあっ！こうなったらぐれてやるっ！

漆編：黒き龍、輝きを知りて。

漆編：黒き龍、輝きを知りて。

『輝あ、一緒に逝こうよ……』

「あ、ああ……わかった、一緒に行こう、漆……」

闇に沈むかのように輝は影の中へと沈み始める……だが、その輝の頭をつかんで引きずり出す闇を纏いし漆。

「……輝！しっかりして！」

ばちん！そんな鋭い音が墓地中に響き渡り光を取り戻した輝の瞳が漆をとらえるのだった。

「……漆……漆か！？」

「うん！そくだよ！」

「ほ、本当に漆かあ！？」

「そうだって……しっかりしてよ、輝。ちゃんと私を見てよ」
両手で輝のほほを挟み、じっと目を合わせる。

「……ぼっ」

「……いや、恥ずかしいなら俺を見るなよ……」
「だってさ……」

「くっ……もはやこの手も通じないのか！？」

その少年の前に現れる輝、そして輝を乗せる一体の黒龍。

「ああ、漆が俺を助けてくれた……ついでだからじーさんも今助けてやるから！」

黒龍の咆哮によりあっさりと拘束していた鎖は朽ち果てて老人が地上へ三回転を華麗に決め、着地する。老人も老人とは思えぬ身体能力を見せつけるのだった。

「さ、漆帰ろうぜ」

「待て！まだ終わってなんか……………」

その言葉も無視して一匹の人間と龍は天井を壊して去っていく。黒き龍が空を泳ぐ時、満月が龍を照らす。照らされた龍の背中には一人の人間が……………」

そして、そのころ残された老人と四肢を地面へとなげうつた少年は会話をしていた。倒れた少年の横には一匹の黒龍が横たわっているのだが動こうとはしなかった。

「もう良いじやろう？人としては脆弱な体のお前がこれ以上何ができる？ナハトと名付けた龍をさっさと引き連れて消えるがよい」

「…………絶対この日のことは忘れない」

憎憎しげにその言葉を吐き捨て、少年は立ち上がる。

「ああ、わしが覚えておこう」

残された黒龍を引きずるようにして結局少年は名乗ることなく姿を消した……………そして、一人残った老人はため息をついた。

「やれやれ、三人兄弟の末っ子じゃかって何もあそこまで気張らんでもよかるうにのう……………今頃あの長男坊はどこにいったんじやろうか」

それだけ呟くとじいさんは姿を消す。

「……………なるほど、白河は三人兄弟だったのか」

そして、誰もいなくなつた場所に現れる一人男……………佐原太郎。その隣にまた別の人影が現れた。

「あゝあ、逃がしちゃった。いいの？今の老人ぼこつてはかせりやよかつたのに」

「……………ああ、友人の爺さんに手を出すわけにもいかんだろ」

「はあ？いい加減その考え捨てたほうがいいんじゃない？いずれ足元すくわれるかもよ？」

「……………かまわねえよ」

もと来たようにすぐさま二人の姿は消える。

謎が残ったままだがここに、輝と漆の夏休みは終わりを告げたの

だ
っ
た。
。

漆編：黒き龍、輝きを知りて。（後書き）

ちいゝす、雨月です。ぐれました……まあ、馬鹿やってないで次回作を期待してください。ええ、まあ、三部作構成の今作品。晶、輝と続いて次の主人公は……誰なんでしょうね？

最終話（前書き）

さよなら～さよなら～また会える日まで……………はあ、終わっちゃったよ。最後、一言でも……………いや、一言じゃ駄目だったっけ？感想とか評価、はたまたメッセージよろしくお願いしますっ！

最終話

龍と書いてドラゴンと呼ぶ　　龍が空を泳ぐ時

最終話：さよなら、だけど終わりの始まり。

いつものように俺が目覚めると同じくいつものように寝ていたはずの二人が俺を左右から見ていた、正座で。身体の節々が痛く、特に脳内が爆発するんじゃないかという痛みを感じているほど頭痛が酷い。そういえば、頭痛が痛いつて言う人は国語のお勉強が足りてないって誰かが言ってたな……。

そんな頭痛が痛い俺の耳に漆の澄んだ声が入ってくる。

「ねえ、これまで起こったことが全部夢だったら輝はどうする？」

「どうするって何が？」

意味がわからなくて何があったのか思い出そうとするが、久遠の手が俺の額につけられる。たったそれだけのことでこれまでの頭痛が嘘のように引いていき、同時に複雑なことを考えられないようになっってしまう。

「待つてください……思い出す前に答えを出して欲しいんです」

「夢だったらってことか？」

頷く久遠に俺はためいきをつく。二人が意味不明であるのはよくあることだが……さて、俺はどうするべきなんだろうか？

「白河、お前にまた依頼が来てるぜ？」

「ええ！？またあつ！？先週ようやくこっちに帰ってきたんだよ！？もつと別のやつに……」

「いつものように沈めて欲しいんだと」

「話し聴いてないし……わかったよ、いけばいいんだよね、いけ

ば

「そうそう」

そしてまた、一人の少年が事件に巻き込まれる……それはもう
すこしだけ先の話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9845g/>

龍と書いてドラゴンと呼ぶ ～ 龍が空を泳ぐ時～

2010年10月8日14時18分発行